チョーサー　哲学の慰め

樋口昌幸（訳）

凡例

1 本テキストはジェフリ・チョーサーによる *Boece* の全訳である。テキストは L. D. Benson.（ed.）*The Riverside Chaucer*. Oxford: Oxford University Press. を用いた。
2 本テキスト中の丸括弧は，原則として，原文の丸括弧に対応する。
3 本テキスト中の角括弧内の字句は訳者が補ったものである。
4 上の欄外の数字は対応する原文の行を表す。
5 本テキストは，樋口昌幸（訳）『チョーサー　哲学の慰め』（広島：渓水社，1991）からルビ，行数および注を割愛したものである。書籍としての同書は下記から入手可能である（書籍版は縦書き）。

731-0103　広島市 安佐南区 緑井 4-15-13　　樋口昌幸

2012 年 10 月

哲学の慰めに関するボエティウスの書始まる。

1

ああ，私は，泣きながら，悲しみを素材に歌を始めなければならない。
かつては赫々たる熱情のうちに喜びの詩を作ったのであったが。
というのも，見よ，心引き裂く詩神ミューズが
私に書くべきことを囁きかけ，
零落を語る悲しき歌が真の涙で私の顔を濡らすからだ。
これらの詩神は，少なくとも，どんな恐れにもうちのめされはせず，
私の伴侶として（つまり，私が追放されたとき）
付き添って来たのだった。
詩神たちは，かつては幸せにみちた
若き我が青春の栄光であったが，
今や，老人となった私の悲運を慰めている。
老いが，私の悲運にせかされ，知らぬまにやって来て，
悲しみに命ぜられて老齢が私のうちに居座っている。
時ならず白髪が頭にまじり，
しなびた肉体のたるんだ皮膚は震えている。
人の死は，甘美な日々にはやって来ず，
くりかえし呼ばれたときに哀れなものにやって来るなら幸いである。
ああ，悲しいかな。
死は，聞こえぬ耳を持ち，残酷にも，零落したものから背を向け，
泣き濡れた眼を閉じてくれようとはしない。
運命の女神が不実にもつかのまの楽しみで私をちやほやしていた間に，
私の頭は悲しみの時（つまり，死）のうちにほとんど沈んでしまっていた。
今や運命の女神が顔色を曇らせ，偽りの顔を私のほうに向けたので，
私の生命は神を忘れ，喜びもなく，いたずらに余命を保っている。
私の友人たちよ，
なぜ，何ゆえに君たちは私のことを幸せだなどと称えたのか。
没落したものは安定した位置にいたのではなかったのに。

一

私が静かにこれら私自身のことを思いおこし，尖筆を走らせて涙に

濡れた嘆きを記していたとき，私はとても威厳のある様子の婦人が私の頭上に立っているのを見た。彼女の眼はキラキラと輝き，普通の人間の力以上にはっきり見とおしていた。我々の時代に属するとはとうてい信じられないほど彼女は高年であったが，顔色は生き生きとし，尽きることのない精気と活力を備えていた。彼女の身長は推し量りがたかった。というのは，あるときには彼女は縮み約まって普通の人間の背丈のようになり，あるときには彼女の頭の先が天にも届くかのように思えたからである。彼女が頭をいっそう高くもちあげるとき，彼女は天をも突き抜け，見上げる人間の視力は無力だった。

彼女の衣服は，極細の糸と巧みな技により，朽ちることのない生地で仕立てられていた。ずっと後になって，彼女自身が私に説明して見せてくれたので，私の知るところとなったのであるが，その衣服は彼女自身が自らの手で織ったものだった。その衣服の光沢は手入れをせずうっちゃっておかれた歳月によるくすみのために黒ずみ煤けていた。ちょうど煙で汚れた肖像が黒ずんでくるのと同様だった。この衣服の最下部の裾，つまり縁，にはギリシャ文字でＰ［Π］（実践的な生活を意味する）が，そして，その文字の上，最上部の縁にはギリシャ文字のＴ［Θ］（瞑想的な生活を意味する）が，織りこまれているのが読めた。これら二文字の間には梯子状にきちんと段が作られているのが見えた。その段によって人は一番下の文字から一番上へと登ることが可能なのである。それなのに，幾人かの手がその布を暴力で，つまり力ずくで，引きちぎり，彼らめいめいが取ることのできた切れ端を持ち去るということがあったのだった。この前述の婦人は右手には小さな本を数冊持ち，左手には笏を持っていた。

さて，彼女は，これらミューズの詩神たちが私の床の周りに近づき私の涙に言葉を囁きかけているのを見たとき，いささか立腹し，きっと目を光らせて言った。「だれの許可を得て，芝居小屋と呼ばれる場所のこれらの浮かれ女たちはこの病人に近づいたのか。この女たちは治療によって彼の悲しみを和らげるのでないばかりか，甘い毒を彼に与え摂らせる。このものたちは，欲望とか情熱という，なんら実りあるものも有益なものももたらさない刺激物や突き刺し針で，実り豊かな理性の種子を毀してしまう。彼女たちは人の心を慣れっこにさせはするが，人々を病から解放することはない。お前たちミューズが甘言によって私からしりぞかせたのが，俗人の間でよく見かけられる無知で役立たずのものであったなら，私はこれほどは心を痛めず堪えるで

あろう。そのような役立たずのものの場合には，私の意図は少しも妨げられはしないのだから。だが，お前たちが私からしりぞかせようとしているこの男は，ギリシャのエレア派とアカデミア派の学派・学統ではぐくまれたものなのだ。さあ，早く立ち去りなさい，魔女たち。お前たちは甘美に［歌って］死に至らしめる。私の歌で（つまり，有益な学問で）このものを癒し治させなさい。」

このようにミューズたちの群れは咎められたので，腹だたしげに地面のほうに顔をうつむけ，赤面して恥ずかしさを示しながら，憮然として敷居を越えて行った。私は，涙に濡れて視界が霞んでいたので，その堂々とした威厳のある婦人がだれなのか分からず，まったくうろたえ驚いて，視線を地面に向け，じっとして，この婦人がこれからすることを待っていた。すると彼女は近よって来て，私のベッドの向こう端に座った。彼女は，地面に向けられている，泣き濡れて重く悲しげな私の顔を見ながら，私の精神の乱れを以下に述べる言葉で嘆いた。

2

ああ，何とこのものの精神は，
圧倒する深みに沈んだがために，鈍り，本来の輝きを失ってしまい，
心憂き心配が，世間の風に追いたてられ，はてしもなく増すたびに，
外の闇に入って行こうとすることか。
このものはかつては自由であり，
天空は彼に開かれ知られていた。
彼は，天空の道に赴き，真赤な太陽の明るさを見，
冷たい月光のもとに星斗を見た。
そして天の星が，種々の圏によって動かされる，公転軌道に従うのを支配者たるこのものは（天文学における計算の）数値によって把握したのだった。
そのうえ，どうして唸り声をあげる風が滑らかな海の水を動かし乱すのか，
どういう精霊が安定した天体を回転させるのか，
なぜ星は朱色の東方から昇り，西方の波間に沈むのか，
何が春の陽気な時を穏やかにし，大地をバラ色の花で飾り彩るのか，
だれが豊作の年に実りの秋を重い葡萄であふれるようにするのか，
これらの理由を彼は求めたのだった。
さらに，このものは自然の隠された種々の原因をも説いたのだった。

ああ，今や彼は精神の光を失って横たわり，
首は重い鎖で締めつけられ，
顔はひどい重圧のためうつむき，
無感覚な地面を見るほかない。」

二

「しかし今は嘆きよりも投薬のときです」と彼女は言った。それから両目の視線を向けて私のほうに注意を払いながら言った。「そなたは，かつて私の乳で養われ私の食物で育てられ，完璧な人間の精神にたどり着いたものではないのですか。私は，確かに，そなたに武器を与えました。それは，自ら進んで捨てたのでなければ，撃ち破られることなく安全にそなたを守ってくれたはずです。私が分からないのですか。なぜ黙っているのですか。恥ずかしさのためですか，それとも驚いているためですか。恥ずかしさのためのほうが望ましいのですが，そなたは驚きに圧しつぶされているように見えます。」

私が黙っているだけでなく，舌の働きを失ってまったく口が利けないのを見てとり，彼女は私の胸にそっと手を置いて言った。「危なげなところはない。虚脱状態に陥っているが，それは昏迷した心にはよくある病だ。少しばかり自分を忘れてはいるけれども，以前私を知っていたのなら，きっとすぐに自分自身を思い出すであろう。そうできるように，俗事の霞みでぼやけた彼の目を少し拭いてあげよう。」これらの言葉を言って，彼女は，上着の裾をおって，涙でいっぱいの私の目を拭いてくれた。

3

こうして，夜が駆りたてられ追い払われたとき，
闇は私から去り，私の目にはふたたびもとの力が戻った。
これをたとえるに，太陽が隠れている間に，
星がコルスと呼ばれる［北西の］疾風によって包みこまれ
(つまり，星が密雲に覆い隠され)，
空が湿った雨雲で暗くなり，星も天空に現れず，
夜が地上に広がっているように見えるとき，
ボレアスと呼ばれる北風が，トラキアの国の洞窟から送られ，
その夜をうちまかし（つまり，夜を追い払い)，
閉じこめられていた日を顕すならば，

太陽神フィーバスがたちまち光り輝き，
驚嘆している目に光線が射しこむ［ようである］。

三

まさにそのように，悲しみの雲がかき消され追い払われたとき，私は天空に気づき，意識を取り戻して私の医者の顔を認めた。私は目を彼女に据え，視線を固定し，私の養い親である哲学を見つめた。私は若いころから彼女の家に足しげく通い語らっていたのである。私は言った。「あらゆる徳の支配者たる方，最上の席から降りて来られたとは。どうしてこんな寂しい私の流刑の地にいらっしゃったのですか。あなたも，無実の罪により私の件で有罪とされて来られたのですか。」

彼女は言った。「私の養い子よ。今そなたを見捨てるべきでしょうか。私の［哲学という］名称への反感ゆえにそなたが堪えている重荷を，私も一緒に苦労して，そなたと分け持つべきではないでしょうか。無実のものを仲間もなく旅だたせるのは，哲学にとっては望ましくもふさわしくもありません。有罪とされるのを恐れたり，前代未聞の事件が起きたかのように震えたりすべきでしょうか。そなたは哲学が邪道の人間に攻撃されて危うくなったのは今が初めてだとでも思っているのですか。私は昔，プラトンの時代よりも前に，頑迷な愚かさに対してとても激しい戦いをしたではありませんか。また，プラトンが生きていたころ，彼の師のソクラテス は，私の目の前で，不当な死［の甘受］により勝利に値したではありませんか。ソクラテスの遺産を（遺産とは幸せ――《至福》と呼ぶことにする――に関するソクラテスの学説を指す）エピクロス派やストア派のものや他の多くのものたちがだれかれなく自分の側に取りこもうとしたとき（つまり，彼らめいめいが自分の意見を弁護するためにソクラテスの言葉を引用しようとしたとき），彼らは声高に反論しながら，彼らの獲物よろしく私を四分五裂させ，私の手織りの衣服を破ったりむしり取ったりしました。私の衣服からむしり取った布切れを持って，彼らは去って行きました。私が全面的に彼らに随伴していると思いながら。エピクロス派とストア派には私の装いぶりの形跡や痕跡がいくらかあるように見えたので，人間の愚かしさはエピクロス派とストア派を私の身内だと思いこみ，大多数の邪悪で無知な輩の誤解のため彼らの何人かは破滅させられました（つまり，彼らは哲学者のように見えたので迫害されて死んだり殺されたりした）。

だから，たとえアナクサゴラスの追放やソクラテスの服毒死，ゼノンの拷問は知らないにせよ——彼らは異国人［ギリシャ人］だから——，セネカやカニウス，ソラヌスとその同志たちは知っているでしょう。彼らの風評は大昔のことでもないし無名というわけでもありませんから。これらの人たちを死に至らしめたのは，彼らには私の流儀が染みこんでいて，悪人たちの思わくには少しも似ていないように見えたからにほかなりません。こういう次第で，たとえ私がこの世という苦しみの海で吹きまくる嵐に揉まれても，そなたは驚いてはなりません。この嵐の中で私の最大の目的は，悪人におもねないことなのです。そのような悪者は，その徒党がさほど多数でなくても，軽蔑すべきです。なぜなら，その徒党は（理性という）指導者に導かれているのではなく，ふらふらした誤謬によって愚かしく深慮なく運ばれているにすぎないのですから。もしもいつか彼らが徒党を組み，自分たちのほうが強いと［思い］我々に攻撃するならば，我らが指導者は富を高塔に集める。彼らは取っても役に立たない［中身のない］鞄や袋にやっきになる。私たちは遥か高所にいて，あらゆる騒ぎや喧噪から安全である。そこは柵で防御され囲まれており，騒々しく煩わしい愚かしさが達することはない。私たちはつまらぬものを略奪・強奪するものたちを侮蔑するのです。

4

輝く徳もち泰然として自らをよく律した生活をし，
傲慢な運命を足もとに踏みつけ，
幸運も不運も目を上げて見つめる人はみな，
表情を変えないでいることができる。
たとえ荒波を海の底から揺り動かして吹き上げようとも，
海の荒れも脅威もその人を乱すことはない。
ヴェスヴィアスと呼ばれる揺らぐ山が
その裂けた噴火口から濛々と火を噴き出そうとも，
稲妻の閃きが高い塔を撃とうとも，
その人を乱すことはない。
それゆえ，哀れなものたちよ，なぜそなたたちは，
怒り狂い凶暴な，その実，なんらの力もない，暴君を恐れるのか。
何も空頼みしたり恐れたりするでない。
そうすれば，その無力な暴君の怒りを無毒にするであろう。

だが，本来不動でないものを，震えつつ，恐れたり渇望したりするものは，
自分の盾を捨てて持ち場を離れてしまったのであり，
自らを引きたてるべく鎖で縛っているのだ。」

四

彼女は言った。「これらのことが分かりますか。少しなりとも胸に入りましたか。それとも竪琴を聞くロバのごとしですか。なぜ泣いているのです。なぜ涙をこぼしているのですか。医者の手当を待っているのなら，傷口をさらけ出さねばなりません。」

そこで私は気力が胸のうちに寄り集まってきていたので，答えて言った。「くりかえし述べたり思い出したりする必要があるでしょうか。運命の女神の刺々しさはおのずと明らかではありませんか，彼女は私に対して邪険になったのです。この土地の様子や有様を見てあなたは心を動かされないのですか。ここが，私の家の中で最も確実な場所としてあなたが選んだあの書斎なのですか。あそこではあなたは神や人間に関する学問を私とよく論じたものでした。あの当時私の服装は現在のもののようだったでしょうか。私があなたとともに自然の秘密を求めたころ，あなたが，天体の秩序にならって，私の生涯にわたる振る舞い方や原理を形成してくださったころ，私の顔付き，表情は現在のようだったでしょうか。これが，あなたのおかげによる報いなのですか。ずっとあなたに従ってきたというのに。

確かにあなたはプラトンの口をとおして次の命題を確立しました。すなわち，『もしも哲理を十分に探求した［哲学］者が国家を治めるならば，もしくは国家の為政者が哲理を得ようと探求するのであれば，国家あるいは共同体は幸せである』と。また，その同じプラトンの口をとおしてこうもおっしゃいました。『哲人が国家の政治を司り，かつ願うのは必要な大義である。なぜなら，都市の政治が悪質で暴圧的な市民の手に委ねられれば，善良な人々に災いと破滅をもたらさないはずがないからである』と。それゆえ，私はその説に従い，私的なくつろぎの時間にあなたから学んだことを実行し国家行政に実施し実行しようと願ったのでした。

あなた自身も，あなたを哲人の精神に忍びこませた神もご存じのように，私が為政，つまり官職に就いたのはあらゆる善を公衆のために追求するだけのためでした。ですから，悪人と私との間には深刻な不

和が生じ，それは請託によって解消しうるものではありませんでした。なぜなら，私の自由は良心の自由を有するものであり，私は正義の保護のためいつも有力者の怒りをものともしなかったからです。何度私はコニガストスという名の男と衝突し対抗したでしょう。あの男は気の毒な無力な人々の私有財産をいつも襲っていました。また，何度私は王室長官のあのトリグウィラがやりかけていた，あるいはすでにしていた悪事を妨げ阻止したでしょう。何度私は，私の官位を危険にさらして（つまり，私の官位を賭して）哀れな気の毒な人々を守り保護したでしょう。というのも，彼らは貪欲な野ばなしの外来者たちの数かぎりない危害と害悪とで絶えず苦しんでいたからです。

なんぴとも私をいまだかつて正義から悪へと引きこんだことはありません。各地の人々の財産や富が私的略奪や公的租税とか通行税により害を受けたり減らされたりするのを見たときは，私もその害に苦しむ人たちと同じように悲しみました。つらい飢饉のおり，苛酷で不合理な買い占めが下命，つまり命令，されて，だれの目にもそれがカンパニア地方をひどく苦しめ害をおよぼすのが明らかだったとき，私は公共の利益のために近衛兵に対し戦いを起こしました。そして，王自身知っているとおり，私はその戦いに打ち勝ち，その買い占めは要求も実行もされませんでした。（注釈　ゴート人であるテオドリック王が凶作の年に彼の蔵に穀物を満たし，彼の穀物が売りきれるまでは，しかも法外な価格であったが，だれも［王の蔵以外から］穀物を買ってはならぬと命じたとき，ボエティウスは，王自身すべて知っているとおり，その布告に立ち向かい打ち勝った。買い占めとは全面的購入，つまり，まとめ買いのことで，穀物一ブッシェルを買ったものはその五分の一を王に納めなければならないという税制のもとに人々に課せられたのであった。）（本文）　ローマの執政官であったパウリヌスは宮廷の犬ども（つまり，役人）に彼の富を欲望と貪欲からむさぼり食われるところでしたが，私は口を開けたものどもの顎から彼を引き出してやりました。また，［審理せず］予断で判決された告発の罪状によりローマの執政官アルビヌスを抜きうちに捕らえ不当に罰すべきでなかったので，私は告発者キプリアヌスの憎しみと憤慨とに身をさらしました。こういう次第ですから，私が不興を買ったことは明らかではないでしょうか。しかし，そのぶんだけ私は他のすべての人々からは安全なはずでした。つまり，私は，正義を愛するがゆえに，王の広間の廷臣とは何らの関わりも持たなかったので，［彼らからは攻

撃されず］それだけ安全でした。ところが，私は［アルビヌスのと］同じ告発者どもの告発によって有罪とされたのです。

多数の告発者のうちバジリウスというものは，かつて王室の勤めから追放されたのでしたが，今や借金苦から私の名前の告発に抱きこまれています。また，オピリオンとガウデンティウスは，二人とも数かぎりない背任行為と横領のため王室検察局から追放の刑に処せられていたにもかかわらず，その判決に従おうとせず，聖殿の庇護のもとに身を守っておりました（つまり，聖域に逃げこんだのでした)。このことが王に知れたとき，王は，彼らが定められた日までにラヴェンナの街を去らなければ，彼らの額に焼きごてで烙印して街から追い出すよう命じたのでした。

それにしても，何がこの厳罰に較べうるように見えるでしょう。というのも，まさにその［定められた］当日，上述の告発者どもによる私の名前の告発が受理されたのですから。何ということでしょう。私の情熱と知識がそれに値したでしょうか。あるいは，私を，前述のように，断罪することによって彼らは正義の告発者になったでしょうか。運命の女神はこのことを恥じなかったのでしょうか。運命の女神は，たとえ無実のものが告発されることは恥じなかったにせよ，私を告発したものどもの卑劣さは恥じいるべきだったのです。

ところで，要するにどういう罪で私が告発されたのかとお尋ねでしょうか。私は元老院議員団を救おうとしたと言われています。どういう仕方でだったかお聞きになりたいでしょうか。国王に対する反逆罪のゆえに複数の元老院議員を有罪にすべく告発者が手紙を提出しようとしたが，私はそれを阻止しようとしたとして告発されたのです。わが師よ，これをどうお考えでしょうか。あなたの不名誉とならないように私はこの告発を否認すべきでしょうか。しかし，事実，私はそれ（つまり，元老院の安泰）を確かに望みましたし，そう望むことをけっしてやめないでしょう。このことはきっぱりと認めます。ともかく，告発者の謀略は阻止されるべきであり，中断させねばなりません。というのも，そもそも元老院階級の安泰を願ったことが重罪とか有罪とか呼ばれるべきでしょうか。しかるに，元老院は判決と決議をとおして，あたかもそれ（つまり，安泰を願うこと）が有罪であり重罪であるかのように，私に対して振る舞ったのでした。しかし，愚かしさゆえにいつも思いちがいをしているからといって，そのために事物の真価が変わるなどということはありません。それに，私はソクラテス

の見解に従って，事実を隠したり虚偽に同意したりするのは正当なことだとも思いません。ともあれ，この［私の告発］事件がどのようになるにせよ，それが考察され評価されるべく私はあなたと賢者の判断に委ねます。この件のすべての判決と真実を後世の人々が知るように，私はそれを記録し記憶に残します。

捏造の手紙のため私はローマの自由を望んだとして告発されたのでしたが，この手紙に関しては何をか言わんやです。もしも私の告発者の自白を利用し，その場に同席するという自由が私にあったならば，自白はどんなときにも多大な力を有するのですから，その手紙が虚偽であることは明らかに示されたでしょう。これ以外どういう自由を望むことができるでしょう。実を言えば，私は別の自由を望みうるほうがましなのです。そうなれば私はカニウスという男の言葉でもって答えることでしょう。彼はゲルマニクスの息子であるガイウス・シーザーにより告発され，彼への謀反を知っておりかつ同意しているとされたとき，このカニウスはこうに答えました。『もし私が知っていたら，陛下が知ることはなかった』と。

私は悲しみのため頭が鈍くなって，卑劣なものが徳に対して悪をたくらむのをただ嘆いてばかりいるのではありません。彼らがしたいと望んだことを実現できるのを不思議に思っているのです。というのは，卑劣なことを考えるのはおそらく我々の欠陥に由来するのでしょうが，悪人が無実の人々に対して心のうちでたくらんだことが神の眼前で遂行され実現されうるのはまるで怪物のごとくに奇々怪々だからです。それゆえ，あなたの親友の一人は適切にもこう問いました。『もしも神がいるのなら，悪事はどこから来るのか。もしも神がいないのなら，善行はどこから来るのか』と。それにしても，悪人たちは今もすべての善人と元老院の血と死とを渇望しているので，そして彼らは私がいつも善人と元老院を守るために戦うのを見ていたので，たとえ彼らが私を破滅させようと思ったのは当然だったとしても，父親たち（つまり，元老院議員たち）までが私を滅ぼそうと思うのは不当な仕打ちだったのです。

ご記憶のことと思いますが，私が何でもしたり言ったりしようとするとき，あなたはいつもそばにいらして私を修めてくださいました。そして，これもよくご記憶でしょうが，ヴェローナの街で，国王が皆殺しをもくろんで，アルビヌス一人が告発された反逆罪をすべての階級の元老院議員にかぶらせようとしたとき，私は自らをどんな危険に

さらして元老院全体を守ったでしょうか。よくお分かりのように，私が言っているのは事実であり，自画自賛して自慢しているのではありません。というのも，だれであれ自分の功績を自慢して高い名声を得たときには，彼のひそやかな良心は減少するのですから。

それはともかく，潔白ゆえに私がどういう結果に至ったかは現在ご覧のとおりです。私は真の徳を守った報いとして無実の罪により罰を受けているのです。重罪を包み隠さず自白したときでさえ，かつて裁判官が一致して（つまり，私の告発におけるほど）厳罰を下したことがあったでしょうか。人知は誤りやすく，死すべき人間にとって運命は不安定な状態にあるのに，彼らのうちの数人さえも態度を和らげない（つまり，哀れんだり同情したりする裁判官がいない）とは。たとえ私が聖殿を燃やし司祭を邪剣で刺し殺そうとしたり，すべての善人の死を画策したとして告発されたのであっても，私は出頭したうえで，自白なり立証なりによって，罰せられるはずでした。ところが，私は弁明する術もなく，今やローマの街からほとんど五十万歩［五百マイル］も隔離され，元老院に対してなしてきた献身と貢献のゆえに流刑と死刑とを宣せられたのです。まったく彼らは報奨ものです(すなわち，そうではないということ)。彼らの誰も私に向けられたような中傷を立証できたものはいません。この侵害訴訟に関して私の告発者たちもその非道さがよく分かっています。それゆえ，その非道さを彼らは別の重罪とないまぜにして誤魔化そうとしたのです。つまり，私は顕職を渇望するがゆえに［呪術により］神を冒涜して私の良心を汚したと中傷し嘘偽りを並べたてたのでした。しかし，あなたご自身が私のうちに根づいて世俗のものへの物欲を私の心の座から追い払われたのですから，あなたの目前で冒涜心が私のうちに場所を占める余地など断じてありませんでした。というのも，あなたは毎日私の耳と心にピタゴラスの命令を染みこませたからです。すなわち，『人は一神につかえるべし，多神につかえるべからず』と。あなたは私を神にも似るほど傑出させてくださったので，卑しい悪霊に助力を求めるのはふさわしくなかったし，必要もなかったのです。そのうえ，我が家のとても清らかで奥ゆかしい室(つまり，私の妻)や私の正直な友人仲間，徳高く行いが尊敬に値する義父は，そのような中傷の嫌疑から私を弁護してくれます。

だが，何たる悪意。私を告発するものたちはそのような告発の根拠をあなた——哲学——に取っているのです。私があなたの教えで充溢

し，あなたの流儀を教えこまれているので，彼らは私が呪術とか魔法とかに近づいたと思っているのです。ですから，私の罪でけがされるのをご自身の自由意志からお望みなら話は別ですが，あなたへの敬意は私にとって無益だったというだけでは不十分なのであって，さらに，私が受けている不幸に一層の不幸が加わるのです。すなわち，多くの人々の憶測や判断は事物の真価ではなく，運命の結果しか見ないということです。彼らは一時的な幸運に後押しされたようなことのみが神によって配慮されたことだと判断するのです。（注釈　例えば，ある人が裕福であれば，彼は心正しい人であり，その裕福さを受けるに値する。逆境にあれば，彼は悪人であり，神に見捨てられたのであり，彼はその逆境を受けるに値する。このような見解の人もいるのである。）（本文）　このため，まず最初に零落した人たちが［世間から］好意的な見方をされなくなるという事態になります。今の今も私に関する人々の様々な噂のことを考えると心が痛みます。ですから，私はこれだけは申します。逆運の追いたての締めくくりは，囚われ人に罪過が科せられるとき，彼はその苦しみに値したのだと人々が思うことだ，と。私は善人たちから引き離され，官位を奪われ，憶測によって名誉をけがされていますが，すべて私の善き行いのゆえに苦しみを受けているのです。私には極悪の悪人連中が喜びと楽しみを満喫しているのを見る思いがします。あらゆる奸物が善人を中傷するための新たな嘘偽りを考えだしているのが見えます。そして，善人たちが私の危険を恐れて腑抜けにされ，ひどい悪政者が罪も受けずありとあらゆる非道を行い，付け届けに心を躍らせ，その一方で，無実のものが身の安全のみならず弁明も奪われているのが見えます。ですから，私は神に向かって次のように叫びたい気持ちです。

5

汝，諸々の星を運行する車輪の創造者よ，
汝は永遠の王座にどっしりとあり，
天体を力強い動きで回転させ，
星を汝の法則に従わせる。
それゆえ，月はあるときは，
兄なる太陽の光線をすべて受けて隈なく輝き，
小さき星々を隠す。
またあるときは，月は青白く，

その両端小暗くとがりて太陽に近づき，光を失う。
宵の明星ヘスペルスは，黄昏どきには冷たい上昇軌道に戻るけれども，
いつもの軌道をふたたび巡り，
日の出のため明け方までには青白くなり，
ルーシファーと呼ばれる。
汝は，寒い冬が木の葉を落とす時期には，
短時間しかとどまらないで昼を規制し，
暑い夏が来ると，夜の時間を短縮し速める。
汝の力は一年の季節が移り変わるのを支配する。
それゆえ，秋（つまり，夏の終）にはボレアスと呼ばれる北風が
木の葉を吹き散らすが，
春にはふたたび穏やかな西風ゼフィルスが木の葉を芽吹かせる。
そして［春に］アルクトゥルスと呼ばれる星が見た種子は，
シリウスの星が暑くなる［晩秋］ころには丈も高く実る。
何ものもその古来の法則から解き放たれはしないし，
その本来の分限の仕事を捨てることもない。
ああ汝，一定の目的により万物を支配する支配者よ，
何ゆえ汝は人間の営みを
しかるべきやり方で支配することだけは拒むのか。
何ゆえ汝は移り気な運命の女神がことごとくを
上に下に引っくり返すのを許すのか。
厳罰は，悪人を罰するのが当然であるのに，
無実のものを罰し，
邪道のものが高い座に就き，
厄介ものたちが不法にも聖人の首を踏みつけ，
本来清く輝かしい徳が暗闇に隠され，
正しいものが告発や重罪の刑を受けるのか。
そのくせ偽りの色に糊塗して装った偽誓と欺瞞は
何ゆえ悪人を苦しめないのか。
悪人たちは，力を行使しようと思えば，
幾多の人々が恐れる国王をも喜色満面として自分たちの下に従える。
ああ，汝，万物のあらゆる絆を編むのがどなたであれ，
この惨めな土地をご高覧あれ。
私どもは，偉大なる創作品の劣った部分ではなく，優れた部分であるのに，

この運命の海の中で苦しんでいる。
汝，支配者よ，激しい嵐を静め治めたまえ。
大空を統べたまう絆にて
この大地を揺らがぬように結び縛りたまえ。」

五

私がこれらの言葉をうちつづく悲しみのためすすり泣きながら吐露したとき，彼女は顔つきも涼しく私の嘆きにみじんも心を動かさず，次のように言った。「そなたが悲しみ泣いているのを見たとき，私はすぐにそなたが哀れな流刑者であることが分かりました。でも，そなたの話が示さなかったならば，そなたの流刑がどんなに遠いものであるかは分からなかったでしょう。しかし，故国から遠く離れてはいるけれども，そなたは追い出されたのではなく，自分自身で道に逸れて迷ったのです。自分は故国から追い出されると思いたい気持ちがあれば，自分で自分を他のだれよりも先に追い出してしまうものなのです。そなた以外にはだれもそなたを追い出すことができたものはいないのだから。というのも，そなたが生国を思い出すならば，そこは皇帝とかアテナイの人々の国におけるような民衆政治とかが支配しているのではなく，一人の主にして一人の王，つまり，神がそなたの故国の主なのであり，神はその民を追放することではなく，民が住むことを喜ぶのです。主の手綱によって治められ主の義に従うことこそまさに最高の自由なのです。そなたの都市に古来からある掟をそなたは忘れてしまったのですか。その都市ではよそよりもそこに自分の居場所や住家を構えたいと思うならば，なんぴともいかなる権利によってもその場所から追放されることはありえないと決められ確立されているのです。その都市の城壁と囲いの中にいるものには，流刑に値するかもしれないなどと恐れるにはおよびません。しかし，そこに住みたいという気持ちを捨てるものは，その都市の市民である価値も捨て去ってしまったのです。ですから，次のように申しましょう。この都市の様子は，そなた自身の様子ほどには，私の心を動かしはしないと。また，私はそなたの精神のあり場所を後まわしにして，象牙とガラスで飾って作られた書斎の壁のことを先に聞くようなこともしません。私はそなたの精神のうちに書物そのものを入れたことはなく，書物を価値づけ貴重にするもの，すなわち，私の書物の内容を入れたのですから。

公共の善に捧げられたそなたの業績に関してそなたは確かに真実を語りはしたけれども，そなたの善行のおびただしさの割には少ししか述べませんでした。そなたに科せられたことが本当であるか虚偽であるかについては，そなたはすべての人々に知られていることを思い出させました。そして，そなたの告発者の大罪と欺瞞に関しては，その一部始終を知っている人々の口からもっとうまくもっと詳しく知らされることもできるでしょうが，そなたはまことに正確かつ簡潔に事実に触れたように思えます。そなたはまた元老院の悪事を大いに非難して嘆き，それから，私が非難されるのを悲しみ，そなたの名誉が傷つけられ損ねられるために泣きました。最後に，悲しみから運命の女神に対して怒りの熱弁をふるい，人々の真価に応じて公平に報いが与えられないのを嘆きました。また激烈な詩的昂揚の末尾では大空を治める泰平が大地をも治めるように祈りました。

しかし，多くの感情の動揺に襲われたため，加えて，悲しみと怒りと号泣がそなたを千々に分裂させて，今も精神がしっかりしていないので，まだ強力な薬で手当するべきではありません。ですから，いくらか弱い薬を用いて，軽い手当により，そなたの精神に入りこんだ混乱のため腫れあがり固くなった激情をほぐし和らげて，もっと強力で苦い薬を受け入れることが可能になるようにしましょう。

6

蟹座の重い星がフィーバスの光で熱くなるとき
(つまり，太陽のフィーバスが蟹座にあるとき［六月]),
受け入れようとしない畑に惜しげもなく種を蒔くものは，
実りに対して抱いていた信頼を裏切られ，
樫の実を拾いに行かねばならない。
菫を摘みたければ，
野原がヒューヒューと音をたて
アクイロンと呼ばれる烈しい北風で寒さに震えているときに，
赤枯れの森に行ってはならない。
葡萄がほしいなら，味わいたいなら，
春の季節に意地きたない手で
その蔓茎を絞ったり圧しつぶしたりしてはならない。
やがて酒神バッカスが秋（夏の終）には
彼の贈り物を授けてくれるのだから。

神は，本来の職務にふさわしいように，時をわりふりし，
彼がわりあてて制限した時間が互いにいりまじることを許さない。
それゆえ，営みの定まった秩序を性急に捨てるものは，
労働から嬉しい結果も成果も得ることはできない。」

六

「まず，そなたの治療法が分かるように，二つ三つ質問をしてそなたの精神状態に触れて調べたいのですが，よろしいですか。」

「お望みのことをお気に召すままご質問くだされば，お答え申しましょう」と私は言った。

すると彼女はこのように言った。「天地はでたらめで偶発的な偶然によって支配されていると思いますか，それとも，そこには少しなりとも合理的秩序の支配があると思いますか。」

「もちろん，こんなにも一定した万物が偶発的なでたらめによって動かされているとは毛頭思っておりません。創造者であり主人である神が彼の創造物を支配していることはよく存じていますし，一日たりともこの内容が真実であることを失念したことはありません」と私は言った。

彼女は言った。「そのとおりです。事実，同じことをそなたは少し前に歌い，そして人間だけが神の配慮から漏れていると嘆いて泣きました。それというのも，そなたは他のすべてのものに関しては合理的秩序が支配しているということを疑ってはいないから。だが，とても不思議なのですが，こんなに健全な論旨を述べるのに，なぜそなたは病んでいるのでしょう。ともかく，もっと深く探ってみましょう。私の察するところでは，何かが欠けているのです。でも何であるかは分かりません。ともかく，答えてください。そなたはこの宇宙が神によって支配されていることは疑っていないけれども，ではどういう統治法によってそれが支配されていると考えているのですか。」

「お尋ねの内容がほとんど分かりません。ですから，ご質問にはお答えできません」と私は言った。　彼女は言った。「思っていたとおり，何かが欠けていて，そのために錯乱という病が，まるで裂け目ができて穴があいた城壁から入るように，そなたの精神に入りこんでいます。ともかく答えてください。万物の究極的目的は何であるか覚えていますか。そして，森羅万象の目的はどこを目指しますか。」

「以前聞いたことはありますが，悲しみのため記憶がぼやけてしま

いました」と私は言った。
「どこから万物が生じてくるかは確かに知っているのですか」と彼女は言った。
「よく存じています」と私は言って，神がすべての始源であると答えた。
彼女は言った。「万物の始源を知っていながら，万物の究極的目的を知らないとはどういうことでしょう。でも，そういうことは錯乱のときはよくあることです。錯乱には人を本来の立場（つまり，人間の安定した，完璧な認識力）から追い出すという力があるから。しかし，そのため人が根こぎにされたり，まったく別ものにされたりすることはありません。ところで，答えてほしいのですが，そなたは自分が人間であることを覚えていますか。」
（ボエティウス） 「どうして私がそれを覚えていないことなどあるでしょう」と私は言った。
（哲学） 彼女は言った。「それなのに，人間とは何ものであるかを言うことはできないのですか。」
私は言った。「自分が理性を持った死すべき動物であることが分かっているかどうかお尋ねではないのですか。私は私自身そうであることをよく存じていますし，そうであるとはっきり申します。」
「そなたは自分が他のものでもあるということは知らないのですか」と彼女は言った。
「知りませんと私は言った。
彼女は言った。「今こそそなたの病気のもうひとつの，しかも，とても大きな原因が分かりました。そなたには自分が何ものであるか分かっていないということです。これでそなたの病気の原因が，つまり，健康回復の手がかりがはっきりと分かりました。というのは，そなたは自分自身を忘れて混乱しているため，追放されただの，自分の所有物を奪われただのと悲しんでいるのです。万物の究極的目的が何であるかを知らないので，極悪非道の輩が力を得て裕福であるなどと思っているのです。さらに，どのような統治力によって天地が支配されているかを忘れて，運命の変転は統治するものもなく漂っていると勘ちがいしているのです。これらは病気の主原因となるだけでなく，確実に死の主原因とさえなります。しかし，［生命力，すなわち］本性がそなたをすっかり見捨ててはいないので，私は健康の創始者に感謝します。私はそなたの健康の回復剤を持っています。それは，そなたが天

地の統治法に関する正しい意義づけを，すなわち，天地の支配は，でたらめな偶然という愚かさではなく，神の合理的秩序に従っていることを信じているということです。ですから，少しも疑ってはなりません。この小さな火花からそなたの生命の熱が輝くことになるでしょう。

しかし，まだ特効薬の時ではありません。昏迷している精神は，その性質上，真の見解を捨てるたびに自らを偽りの見解に包みこむものであり，その偽りの見解は錯乱の闇を増し，真実の洞察を混乱させるものです。私は穏やかで軽い薬を用いてその闇をうす明るくさせましょう。偽りの欲望の闇が消えたのちに，そなたは真実の光の輝きを認めることができるのです。

7

アウステルと呼ばれる烈しい南風が，海をかきまぜて波だたせ，
荒波（つまり，海底からの噴き上がり）を揺り動かせば，
波は，今しがたまで鏡のように澄み，昼間のように美しく明るくても，
その中の芥と泥のため人の目には見通しがたくなる。
流れゆく小川は，高い山々をあちこち巡って下ってきても，
岩から分かれ割れ落ちた石に出くわし，
何度も止まり滞る。
それゆえ，明るい光で正しく見，正しく考えたいなら，
そして正しい道を進みたいなら，
悦楽を避け，
恐れを追い出し，
空頼みを捨てよ。
そして，悲しみを近づけるなかれ。
(つまり，これら四つの感情に捕らえられたり
目を眩まされたりしてはならない。)
これらのものが支配するところでは，精神は曇って暗くなり，
しがらみに縛られるからである。」

第一巻終わる。

第二巻始まる。

一

このののち，彼女はしばらく口をつぐんだ。つつましやかな沈黙で私の注意をひきつけたのち，彼女は言った（次のように言い換えてもよい。この［歌の］のち，彼女はしばらく口をつぐみ，つつましやかな沈黙により，私が彼女の言うことを聞こうと注意しているのを見さだめたとき，彼女はこのように話しはじめた)。「もしも私がそなたの病気の原因と症状とを完全に理解し把握しているならば，そなたがやつれ衰えているのは以前の幸運を望み求めているためです。彼女（運命の女神）はそっぽを向いてしまったとそなたは思っていますが，彼女はそなたの心神の明晰さと平静さとをかき乱しただけなのです。

私はよく知っていますが，あの不思議な怪物，運命の女神，は七変化し欺瞞的であり，また，彼女は欺くつもりのものに長いあいだ取り入り親しんでおきながら，やがては彼らを堪えがたい悲しみで混乱させ，顧みることなく絶望のうちにとりのこします。運命の女神の性質や流儀，実価を思い出すならばよく分かるでしょうが，彼女に関するかぎり，そなたは何らきらびやかなものをもらったことも取られたこともないのです。もっとも，私が思うには，そなたにこういうことを思い出させるにはあまり苦労しなくてよいでしょう。というのは，彼女が媚びてつきまとっていたころ，そなたはいつも男らしい言葉で彼女を攻撃し軽蔑し，私の門口（つまり，私の知識）から引き出した論旨で彼女を咎めていましたから。しかし，急変が起きると必ず心神にも変化を生じるものです。だから，そなたは精神の平静さから少しばかり逸れているのです。

それはそれとして，今は穏やかで口あたりのよいものを飲んで味わう時です。それらがそなたの中に入れば，もっと強力な飲み薬の通り道が開けてくるでしょう。そうなるように，弁論のさわやかな説得力を呼び出しましょう。弁論は私の指示にそむきさえしなければ正しい筋道をたどるものです。そして，弁論と一緒に音楽も呼び出しましょう。音楽は私たちの家の愛娘であり，あるときは軽やかに，あるときは重く，調べや音律を奏でます。

そなたは何が悲しいのですか。何がそなたを嘆きと涙のなかに投げ込んだのですか。何か今まで知らなかったものを初めて見たためだと思います。そなたは運命の女神がそなたに背を向けたと思っています

が，（もしそう思っているのなら）思いちがいです。そのようにするのが彼女のいつもの流儀なのですから。彼女は最初は，そなたにしたように，彼女特有の，変化のなかの安定を保っています。彼女がそなたにおもねて，偽りの幸福というまやかしの喜びでそなたを欺いていたとき，彼女はまさしくそうしていました。今やそなたは運命という盲目の女神の二面，つまり，二つの顔を知り理解しました。彼女は，他の人々に対しては自分を覆い隠していますが，そなたに対しては彼女のすべてを見せたのです。もしも彼女を是認するのであれば(そして，彼女を善きものと思うのであれば)，彼女の流儀に慣れなさい。そして，嘆くのをやめなさい。もしも彼女の不実な裏切りを厭(いと)うのであれば，こんなにも有害な戯れをする彼女を軽蔑し放り捨てなさい。というのは，彼女は，今はそなたにとって大いなる悲しみのもとであるにせよ，安らぎと喜びのもとになるはずだからです。確かに，彼女はそなたを見捨てましたが，このことに関しては，だれも彼女は自分を見捨てないと確信はできないのです。（注釈　ただし次のような原文の異本もある。彼女は確かにそなたを見捨てた。また，彼女はだれも見捨てたことはないと確信しているものもいない。）それなのに，そなたはやがては過ぎ去る幸福を貴重なものだと思っているのですか。現在の幸運は，忠義にいつまでもとどまりはせず，立ち去れば人に悲しみをもたらすのに，価値あるものだと思うのですか。彼女は人間の意志でとどめることはできないし，立ち去るときは人を惨めにするのですから，移ろいゆく運命の女神は，いわば来るべき惨めさの影でないとすれば，いったい何でしょうか。目の前に存在するものを見るだけでは不十分ですが，知恵は事物の究極を見とおし予測します。そうすれば，ある状態から他の状態へと（つまり，逆境から栄華へと）変化するのですから，運命の女神の脅威は恐れるにたりないものに，彼女の媚は願うにたりないものになります。

　ですから，結局，そなたは，いったん運命の女神の軛に首を置いたからには，彼女の領域（つまり，この世）で起きたことには辛抱強く平静な心で堪えなければなりません。もしも運命の女神に対して進め・停どまれという掟を書こうとするならば，そなたは自ら進んで彼女を主人として選んだのですから，そうすることは間違いでしょうし，さらに，我慢不足のため運命の女神を怒らせ邪険にならせはしないでしょうか。しかも，そうなっても彼女を変えることはやはりできないのです。もしもそなたの帆を風に託し委ねるならば，そなたが望む場

所にではなく，風が押す場所に押されて行かねばなりません。もしも畑に種を蒔くならば，年によってまちまちで，ある年は豊作，ある年は不作であることを心にとめておかねばなりません。そなたは運命の女神の支配に身を委ねたのですから，主人の流儀に従順に従わねばなりません。それとも彼女の回転する車輪の速さと運動を停止あるいは静止させるつもりなのですか。

ああ，死すべき愚者たちのうちの最たる愚者よ。もしも運命の女神がとどまり安定しはじめるならば，彼女は運命の女神たることをやめてしまうというのに。

1

運命の女神が傲然たる右手で変わりゆく時間を回転させるとき，
彼女の所行は渦巻くエウリーポスの流れるさまに似る。
（注釈　エウリーポスとは干満のある海の入り江であり，
その潮流は，今やこちら岸に，今や向こう岸にある。）
（本文）残忍なる運命の女神はかつては恐れられていた王を投げ落とし，
また，欺瞞的にも，敗れたもののうつむいた顔を上向ける。
彼女は哀れなものの泣き声を聞かず，気にとめもしない。
彼女が気まぐれから泣かせたものなのに，
泣き声を，無情にも，嘲り蔑む。
かように彼女は戯れ，かように彼女は己が力を誇示する。
裕福と見えしものを瞬時に転覆させ，
彼女の下僕たちに大いなる驚異を示す。

二

ところで，私は運命の女神の言葉を用いて，そなたと二，三議論してみたいと思います。彼女が正当に要求しているかどうかよく注意して［聴いて］ください。

『まったく，人間って奴は。なぜお前さんは毎日文句を言って私を悪者にするのかね。私がどんな悪いことをしたんだい。私がお前さんの何を奪ったかね。富であれ地位であれ，その所有権のことなら，お望みの裁判官の前で，告発なり訴訟なりしたらどうだい。もしも死ぬ定めの人間がそのようなものをひとつだって，もともと持って生れたと証明できるのなら，ご請求のものがお前さんの持ち物だといさぎよ

く認めようよ。
　自然が母親のお腹からお前さんを取り出したとき，丸裸で何から何まで世話のやけるお前さんを受け取って，私の富で養い，好意から育ててやったんだ。それなのに今になって私に我慢できないだなんて。私の権限が及ぶかぎりお前さんには贅沢で奇麗なものを与えてやった。でも，もう手を引きたくなったんだよ。お前さんはかわいがられて，言ってみれば，他人様の持ち物を使わせてもらってたんだ。まるで自分のものをすっかりなくしたかのように文句を言う権利はないのさ。それなのに何を文句を言ってるんだい。私は何も悪いことはしてないよ。富とか顕職とかほかにもそういった類いのものは私に所有権があるのだからね。私に仕えるものはちゃんと知っているけど，私が主人なのだよ。私と同行していても，私が去れば，離ればなれになるのさ。はっきり言わせてもらえば，お前さんがなくしたと愚痴ってるものが［本当に］お前さんのものだったのなら，なくすことなどなかったのではないかね。
　それとも，私にだけは権利を行使することが禁じられてるのかい。いいかい，天は明るい昼をもたらして，あとでその昼を暗い夜で覆ってもいいのだ。四季だって地表を，あるときは花，あるときは実で飾り，ときには雨や寒さで荒れさせることが許されている。海も同じ。あるときは海面が滑らかで穏やかに凪ぎ，またあるときは波や嵐ですさまじくなる権利があるじゃないか。
　それなのに，人間の欲望は満たされることがない。じっとしてるのは私の流儀とは無縁なものだから，私を縛りつけてじっとさせようとするのかね。私の力はこうであり，私がいつまでも続ける戯れはこうなのだ。私は，まわる輪があって回転する車輪をぐるぐるまわす。私は喜々として最も低きを最も高きに，最も高きを最も低きに変える。お前さんが望むのなら，［車輪を］登っていくがよい。訳あって私の戯れが要求してお前さんが転落しても，私のせいだとは思わないという掟に従うのならね。
　お前さんはリュディア王のクロイソスのことを知らないのかい。哀れにもクロイソスは，少し前まではキロスにひどく恐れられていたというのに，そのキロスに捕えられ，火炙りにされるべく火刑場に送られた。ところが，空から雨が落ちてきて，救われたではないか。ローマの執政官のパウルスのことも忘れたのかね。ペルセウス王を捕えたとき，その王が捕囚の身になったがゆえにさめざめと泣いたのを。

いったい悲劇で泣くのは，ただ運命の女神の行為を除けば，ほかに何を嘆いているでしょうか。なにしろ，彼女は不意打ちによってとても豊かな王国を転覆させてしまうのですから。（注釈　悲劇とは一時期繁栄して，悲惨のうちに終わる詩のことをいう。）

若いころギリシャ語で学ばなかったかね。ジュピター［の館］の玄関口か貯蔵室かに二つの樽が置いてあって，一方には福が，他方には禍が入っていた。もしもお前さんが福のほう（つまり，私の富や栄華）を人並み以上に受け取っているとすれば，何の権利があって文句を言うのかね。それに私がお前さんから完全には離れていないとすればどうかね。さらに，私は変わりやすいのだから，お前さんにはちゃんとした理由があってもっと喜ばしいことを期待できるのだとすればどうだい。とにかく，心を乱してはいけない。万人に共通な国にいるのだから，お前さん一人の権利によって生きようなどと思わないことだね。

2

海が激しい突風で揺れて巻き上げる真砂の数ほど，
星月夜に輝く天空の明るい星の数ほど，
豊饒（つまり，豊かさ）の女神が宝角から豊かさを滴らせ，
その手を引っこめることがないとしても，
それでもなお，人間は哀れな愁訴をこぼすのをやめはしない。
神が彼らの祈りを喜んで聞きいれて多くの黄金を惜しみなく与え，
渇望するものたちを高貴な，燦然たる栄誉で飾っても，
彼らは何物も手に入れたような気がしない。
残忍な貪欲は，手に入れたものすべてを呑みこみ，
さらに口を開ける（つまり，口を開けてさらに富を求める）。
どんな手綱が人間のはてしない欲望を
一定限度に抑えることができようか。
贈り物を気前よくもらうはしから，
さらに所有に飢えて燃え上がるのだから。
震え脅えつつ，足りていないと思うものは
けっして豊かに暮らすことはありはしない。』

三

こういう次第で，もしも運命の女神がそなたに上のように言って自

己弁護したならば，そなたには実際答えるべき言葉もないでしょう。もしもそなたの訴えが正当であると弁護しうるものがあるならば，それを示すがよろしい。語る機会を与えましょう。」

そこで私は言った。「なるほど，以上のことは説得的であり，弁論と音楽の甘い蜂蜜が塗りこまれているので，聞いている間は心地よいのですが，零落したものはもっと深く不幸を感じます（つまり，零落したものが苦しんでいる不幸は，先の言葉による治療や気慰みが喜ばせたり慰めたりしうるよりももっと深刻に感じられるものである)。ですから，それらが耳に響かなくなると，巣くっている悲しみが心を苦しめます。」

「そのとおりです」と彼女は言った。「というのは，まだ悲しみが治癒の妨げをしていますから，先のことはそなたの病気の治療ではなくて，悲しみに対する一種の栄養剤です。時が来れば，深く入っていくようなものを提言し投与しましょう。ともかく，自分を零落したものだと思ってはいけません。そなたは自分の幸福の数と程度を忘れたのですか。くどくど述べはしませんが，そなたは父親と母親を失ったとき，街の有力者に庇護され面倒を見てもらい，選ばれて国家の重臣と縁を結び，どんな血縁や縁組よりも貴重なことですが，近親になる前から親しく懇意になりました。そなたのことを実に幸福だと言わなかった人がいるでしょうか。なにしろ，義父君は高貴な家柄で，奥方は貞淑で，男の子供（つまり，令息）は前途洋々として高名だったのですから。さらにそのうえ，当たり前のことは省略しますが，そなたは若くして，年配の人にも拒まれている官位に就いたのでした。

それにしても，そなたの比類なき幸福の絶頂のことを述べるのは心が浮きたちます。もしも地上の喜びにも幸福という重み，つまり価値があるならば，不幸という重荷がふりかかったからとて忘れることなく，二人の令息が執政官になり，そろって自宅から民衆の歓呼のうちに数多の元老院議員を従えて導かれ，元老院で官位の椅子に座るのを見た日のことを記憶しているでしょう。そして，そなたは円形広場と呼ばれる場所で執政官たる二人の令息の間に座り，凱旋歌のごとく惜しみなく［王を］褒め称えて取り囲む群衆の期待に応えました。あのとき，弁士つまり王の賛美者として，そなたの才知と雄弁は栄誉に値するものでした。

当時，運命の女神がそなたを自分のお気に入りとしてご機嫌をとり大事にしていたころ，私が思うには，そなたは運命の女神に空約束を

与えました（つまり，運命の女神に甘言を与え彼女を騙し［幸運を取っ］た)。そなたは運命の女神が一度も私人に与えたことのない贈り物（つまり，褒賞）を受け取りました。運命の女神に貸借計算書を送るつもりですか。彼女がそなたに対して意地悪く目をつむったのは初めてなのに。もしも至福と悲しみとの数と程度とを考えるならば，そなたがまだ幸せであることは否定できません。だから，もしも楽しく見えていたことが過ぎ去ってしまったから自分は幸福ではないと思っているのであれば，そなたは零落したと思うべきではありません。なぜなら，いま辛く見えていることもまた過ぎ去るのですから。それとも，そなたは客人であって，思いがけずこの人生という幻の舞台にいま初めて登場したばかりなのですか。あるいは，すぐに時が人間を分解するのに(つまり，魂は肉体から遊離するのに)，人間的な事物に恒常不変なものがあるとでも思っているのですか。［生存中］幸運がとどまるという確信はほとんどまったくありませんが，人間の臨終の日は運命の女神にとっても，また存在していた事物にとっても一種の死です。そなたが死ぬときにはそなたが運命の女神を見捨て，彼女が飛び立つときには彼女がそなたを見捨てるのならば，何を気に病む必要があると思っているのですか。

3

太陽神フィーバスが朱色の馬車にて光を撒きはじめると，
星明かりを凌ぐ太陽の火炎により
星はかすみ，その白い顔色を淡くする。
(つまり，太陽が昇ると，昼の星は白くなり，
太陽の大光明のためその明るさを失う。)
春に西風ゼフィルスの息吹きにより暖かくなり，
森がバラの花で紅に染まるころ，
雲をともなう南風アウステルが激しく吹けば，
さんざしの茂みの美しさは消えうせる。
海が波も立てず穏やかに澄みわたることもしばしばあれば，
恐ろしい北風アクィロンが逆巻く嵐を引き起こし
海を掻き乱すこともしばしばある。
この世の姿は安定せず，
多くの有為転変により変転するのなら，
人間の急変する運命を信用できるであろうか。

移ろいゆく幸福を信頼するのか。
生まれたものは恒常不変でありえぬことは，
永遠の掟により，確実であり定められているのに。」

四

このとき私は次のように言った。「ああ，あらゆる徳をはぐくまれる方，まさにおっしゃるとおりです。私の栄達の過程がきわめて早かったこと（つまり，栄達が驚くほど早く速やかに私にやって来たこと）は否定できません。しかし，それは思い出すととても胸が痛みます。なぜなら，運命のあらゆる逆境の中で最も不幸な逆運はかつては幸福だったということなのですから。」

彼女は言った。「しかし，そなたは間違った見解のために苦しんでいるのです。ですから，何ものをも非難したりそのものの為にしたりすることは正しくありません。（すなわち，まだ多くのものをたっぷり持っているのだから。）（本文） たとえ偶然の幸福という虚名が現在そなたの心を乱すとしても，大事なものをまだどんなにたくさん持っているか私と一緒に数えてみたらよろしいでしょう。そなたの有り余る幸運のうちで最も大切にしていたものが，神の恩寵により，疵つけられず汚されずまだ残っているのです。そうとすれば，最良のものをまだ持っているのですから，運命の女神のいたずらを託つのは正当なことでしょうか。事実，人類の貴い名誉であるシュンマコス，そなたの奥方の父君，は元気に生存しています。彼はあらゆる知恵と徳を備えた人であり，彼をあがなうためなら，そなたは自分の命を代償にすることも厭わないでしょう。彼は彼自身に加えられたどんな判決からも安全に存生しており，そなたが受けている悪を自分のこと以上に嘆いています。

さらに，気立てが穏やかで，ほかの婦人にまさって貞節で貞淑な奥方も健在です。彼女の美点を簡潔に言えば，彼女は父親さながらです。よく言っておきますが，彼女はこの世を厭いつつ，そなたを唯一の心の拠りどころとして，そなたを願うがゆえに悲しみに泣き濡れて，まったくやつれはてうちひしがれて暮らしています。このことだけはそなたの幸福を減じると認めざるをえません。執政官である二人の令息に関しては何を申しましょう。彼らには，同年齢の子供たち同様，父親あるいは祖父ゆずりの知恵が輝いています。ところで，死すべき人間の主要な関心事は自分自身の生命を守ることですから，自分の財産

を知れば，そなたは実に幸福なはずです。そなたには命よりももっと価値があるとだれも疑わないものが残っているのですから。だから，さあ涙をお拭きなさい。まだあらゆる運命がそなたに憎しみを抱いているわけではないし，錨がしっかりと付いているときに，過大な暴風雨がそなたに襲いかかっ［て錨を切っ］たわけでもありません。ですから，現在の慰みが過ぎ去ることも将来の希望が損なわれることもないでしょう。

私は言った。「錨がしっかり持ちこたえてくれることを祈ります。持ちこたえている間に，事態がどうあろうと，私は沈まないでうまく逃れるでしょうから。ところで，どんなに多くの財産や身の周りのものが私から去り，なくなってしまったかよくお分かりいただけたでしょう。」

彼女は言った。「運命のすべてを悩んだりくよくよしたりしているのでないなら，そなたをいくらか進歩させ向上させたことになります（すなわち，いくらか慰めることができ，最良のものをまだ持っているので，運命のすべてを悲しむのではなくなった)。それにしても，幸福が少しばかり欠けたぐらいで泣きごとを言って悲しみ託つ，そなたのひ弱さには我慢なりません。いったい，あまりにも悲しくて，あるいは完璧に幸福で，自分の状態をまったく罵りも託ちもしない人などいるでしょうか。人間の幸せの状態はとても不安なものです。幸せは全面的には来ないか，永遠には続かないかのいずれかなのですから。あるものは巨万の富を持ってはいるが，名門でない血筋を恥じ，あるものは高貴な生まれで高名ではあるが，手元不如意のため非常な苦しみのなかに閉じこめられ，むしろ無名のほうがましだと思う。あるものは富も生まれも申し分ないが，妻がいないため独り寝を嘆き，あるものは夫婦仲もよく幸せに結婚してはいるが，子供がなくて赤の他人の相続人のために自分の富を蓄えている。さらに，あるものは子宝に恵まれはしても，息子や娘の素行不良のため泣き悲しんでいる。

このように，幸福の条件に関してはだれもが喜んで是認することはないのです。だれにとってもその境遇にならないうちは分からないことが必ずあるし，その境遇になればなったで心配の種があるものです。これに加えて，幸せな人は非常にひ弱な感覚をしていて，もしもすべてが思いどおりにならなければ，辛抱できなかったり逆境に慣れていなかったりで，どんな些細なことででも［不幸へと］投げ落とされてしまいます。事実，この上なく幸運な人々はほんのわずかなもので至

福の満額つまり至福の完璧さを取り去られます。そなたにまだ残っている幸運のうちのごくわずかなかけらでも手に入れることができれば，ほとんど天にもいるように感じる人々がどれほどいると思いますか。この地をそなたは流刑地と呼びますが，ここに住んでいる人々には故国です。だから，そなたがそうだと思いこむのでなければ，少しも零落してはいないのです。（すなわち，心のうちで評定して自分は零落したと思うときを除けば，零落してはいない。）また上とは逆に，あらゆる運命は，それに堪えている人の受容あるいは甘受により，至福となります。忍耐を失えば，何人も幸せではありえず，現状を変えたくならないものはいません。人間の幸せの甘さには多くの苦さがいりまじっています。つまり，その幸せは，それを楽しんでいる人には甘く気持ちよく思えるけれども，ひきとどめることはできず，気が向けば立ち去ってしまうものです。それゆえ，この世の幸せなどいかにつまらないものかよく分かります。というのも，それはあらゆる運命を受け入れ受容し甘受する人のもとにさえ永久にとどまるということはなく，また心配事のある人を何から何まで喜ばせるということもないのですから。

ああ，人間たちよ。至福は自分自身のなかにあるのに，なぜ外部に求めるのか。思いちがいと愚かさとで混乱しているのだ。

そなたに最高の至福の核心を簡潔に示しましょう。そなたにとって自分以上に大事なものがありますか。答えは『否』でしょう。ですから，もしもそなたが自分を支配できれば（つまり，心中の平静さによって)，そなたはけっして失うことのないものを，そして運命の女神も奪うことができないものを，自分の力のうちに持つことになります。そなたも知っているとおり，至福は偶発的・一時的なもののなかにはありえないのですから，次のように理解し考えなさい。もしも至福が理性によって生きる生物にとって最高の善であるならば，どんな方法であれ，取り去られうるものは最高の善ではない
(なぜなら，取り去られないもののほうが，より価値があり，より立派なものであるから)。このことから明らかなように，運命の不確実性は真の至福に達することはできません。さらに，この急変する幸せに導かれている人は，幸せが変わりやすいことを知っているか，知っていないか，のいずれかです。もしも知っていないのであれば，盲目的な無知のうちにどんな幸運がありうるでしょう。もしも変わりやすいことを知っているのであれば，失うことを疑わないものをいつ失うか

いつも心配しているはずです（すなわち，失うと分かっているから，それをいつ失うかいつもビクビクしているにちがいない)。したがって，絶えざる恐怖のため幸せにはなれません。もしも失えば，［世間から］軽蔑され見はなされたように思うことでしょう。逆に，失っても冷静な気持ちで堪えられる（つまり，あってもなくても構わない）ようなものならば，善としては実際ごくつまらないものです。私のよく知るところですが，多くの論証によりそなたに植えつけられ，かつ証明されているとおり，人間の魂はけっして死滅することはありえないのですから，また偶然の幸せは肉体の死とともに終わることは明々白々ですから，もしも死が至福を連れ去るのならば，疑うまでもなく，この世のあらゆるものが死という終わりによって零落へと堕すことになります。ところが，よく知られているように，多くの人々は，死を受忍するだけでなく，処罰や拷問をも受忍して，至福という果実を求めてきました。いったいどうして現世で人が至福に至ることがあるでしょう。そもそも生命が終わっても人は零落しはしないのですから。

4

泰然として思慮深き人は，
いつまでも長もちする住家を築き，
南東風エウルスの唸りをあげる疾風にも吹き飛ばされず，
荒波で威嚇する海をも見くだそうとするならば，
山頂や湿った砂地に家を建てるのは避けるがよい。
猛烈な南風アウステルが力のかぎり山頂を吹き荒れるし，
緩んだ砂地は重みに堪ええないから。
危険な災い（つまり，俗世の）から逃れたいなら，
低い岩場の心地よい場所に家を建てるようしかと心に決めるがよい。
そうすれば，たとえ海を荒らす風が倒壊物を巻き上げて
ゴーゴーと轟きわたろうとも，
そなたは自分の頑丈な城のおかげで静穏に幸せに，
明るい日々を送り，
風の烈しさや怒りを軽蔑するであろう。

五

しかし今や私の議論という栄養剤がそなたに染みこんできたので，もう少し強力な薬を使う時だと思います。まず次のことを理解してく

ださい。かりに運命の女神の贈り物が脆くもはかなくもないとしても，それらのうちの何がいつでもそなたのものでしょうか。あるいは，徹底的に考察し調査してみれば，運命の女神の贈り物のうち汚れていないものは何があるでしょう。富が貴重なのはそれ自体の本性によるのですか，それとも，そなたの本性によるのですか。富における何が一番価値があるのでしょう。黄金ですか，それとも山と積まれた金銭の力ですか。実際には，黄金も金銭も蓄えるよりも使うことによって輝き，使う人に名声を与えるのです。貪欲から蓄めこむものはいつも嫌われ，気前よい人の名声は高まるものです。人から人へとまわるものはただ一人の人のもとにとどまるわけにはいかないのですから，金銭は他人に渡され，貯蓄されず気前よく与えられ消費されるときこそ価値があるのです。もしも世界中の金銭が一人の人間のもとに集められたならば，他のすべての人は金銭に欠乏することになります。確かに，声はいつまでも大きければ（つまり，音量が減らなければ），一度に多くの人々に聞かれます。しかし，富は減らさずに多くの人々に行きわたることはありえず，行きわたるさいに必ず富を拠出する人を貧乏にします。富こそ乏しく貧しいものと呼ぶべきものです。多くの人々はそれを所有できず，一人のもとに来れば他の全員を貧乏にするのですから。

宝石（高価な小石のこと）の輝きは人々の目をそのほう（つまり，その美しさ）に向けさせないでしょうか。しかし，宝石の輝きに美しさなり価値なりがあるとしても，その光沢は宝石自体のものであり，所有者のものではありません。ですから，私は人間がそのようなものに驚嘆するのがまったく不思議でなりません。運動能力に欠け精神と肉体とが結合していないのであれば，理性的精神を持っている人間から見て，美しい生き物のように思えて当然なものはいったい何がありますか。宝石は創造者の意図とその見栄えのよさにより世俗の最も低級な美を少しばかり備えてはいますが，そなたたち[人間]の素晴らしさには劣るのですから，少しも驚嘆するには値しないのです。ところで，風景の美しさはそなたたちを喜ばせないでしょうか。」

（ボエティウス）「どうして喜ばせないことがありましょう。それは特に美しい創作物（つまり，天地）のうちの特に美しい部分なのですから。私たちは海面が穏やかなときにも喜びますし，さらに，天空や星，太陽，月の不思議にも驚きます。」

（哲学）彼女は言った。「それらの一つでもそなたの持ち物でしょう

か。そのようなものが輝くからといって，どうしてそなたの自慢になるでしょう。春に萌え出る花によってそなた自身が彩られたり飾られたりしますか。あるいは，そなたの豊かさが膨らんで夏の果実になりますか。なぜそなたはむなしい喜びに心を奪われるのですか。なぜそなたは無関係な善を自分のものであるかのように大切にするのですか。運命の女神は，そなた自身とは本性を異にするものをそなた個人の所有物にすることなどけっしてありません。

疑うまでもなく明らかですが，大地の果実は生きものの栄養になるべきものです。もしも［生理的要求という］本性に十分であるかどうかに従ってそなたの必要を満たそうとするならば，そなたは有り余るほどの幸運を求める必要はありません。本性はごく少数かつ少量のもので足りるのですから。もしも本性に十分な量を過飽和状態にしようとすれば，もちろん，本性のうちに詰めこんだり注ぎこんだりしたものはそなたにとって不快になるか苦痛になるかでしょう。

そなたはさまざまな衣服を着飾るのがよいことだと思いますか。もしもその衣服の美しさが見て心地よいものであれば，私が驚嘆するのはその衣服の生地の質とかそれを仕立てた職人に対してでしょう。

では，ずらりと並んだ召し使いたちが人を至福にするでしょうか。もしも召し使いたちが性悪であれば，その家にとっては大変な重荷であり破滅であり，主人自身にとっては大敵です。もしも善人であったとしても，どうして他人の，つまり外部の，善を自分の富のうちに数えることができるでしょう。ですから，以上のことから明らかに示されたように，そなたが自分の善として数えたものは何ひとつとしてそなたの善ではないのです。

これらの事物のうちに望むべき美はないのであれば，それらを失ったからといってどうして悲しみ，所有しているからといってどうして喜ぶことがあるでしょう。それらが美しいのは本来の性質のゆえであれば，そなたに何の関係がありますか。それらは，たとえそなたの富から離れても，やはりそれ自体で美しいはずです。それらはそなたの富のうちにあるがゆえに美しく貴重であったというわけではなく，それらが美しく貴重に思えたがゆえにそなたは自分の富のうちに数えたいと思ったのです。

それにしても，運命の女神に何を望んでそんなにも大声を出したり，そんなにも怖がったりしているのですか。私が思うには，有り余る所持品によって困窮を追い払おうとしているのでしょう。しかし，そう

しようとしても，そなたたちにとっては逆の結果になります。実際，いろんな高価な家財道具を持ちつづけるには多くの維持費が必要です。持ち分の多い人は要り分も多いのです。逆に，過剰な欲望によらず自然的必要によって自分が望む量を計る人はわずかしか必要としません。

それとも，人間には固有の善が備わっていなくて，そのため外部の劣ったもののうちに善を求めなければならないのでしょうか。人間は理性という美点によって神的な動物であるのに，魂のない家財道具を所有していなければ，自分のことを美しくも貴くもないと思うとは主客転倒と言うべきです。他のすべてのものは自分自身の美に満足しています。ところが，人間は理性的な精神によって神に似ているにもかかわらず，本来の優れた性質を低劣な事物で飾りたてたがり，それが創造者にどんなに大きな悪を働くことになるかを理解していないのです。創造者の望みは人類が地上の他のどんなものよりも最も価値があり立派であることなのに，そなたたちは自分自身の権威を最も低劣なものよりももっと下に貶しめています。なぜなら，あらゆる事物の善はその善が所属している物よりも価値があるとすれば，そなたたちは最下等な物を自分の善だと思っているので，自らの評価により自分自身を最下等の物に服従させ，その物よりも下に置いているからです。こうなるのも，実際，無理からぬところです。というのは，自分自身を知るときのみ人間の高貴さは他のすべてのものに優り，自分自身を知ることを放棄すれば人間は動物以下に堕する，というのが人間の実情だからです。人間以外のすべての生きものは，本来，自分自身を知ることはありません。しかし，人間が自分自身を知ろうとしないのは，悪から生じるのです。

それにしても，人間の謬見と愚かさは何と広範囲にわたって見られることでしょう。外から付けた装飾品で何でも飾ることができると思っていますが，実際にはそんなことはありえません。もしも取り付けたもので人が輝くのであれば(つまり，人を飾っているものが輝くならば)，確かに人を飾っているものは褒め称えられますが，それに覆われ包まれているものはやはりうす薄汚いままです。

私はきっぱり否定しますが，所有者に有害なものは善ではありません。間違っているでしょうか。そなたの答えは『否』でしょう。富がしばしばその所有者に有害であったことは確かです。事実，極悪非道の悪人は，ところかまわず，黄金であれ宝石であれ，その極悪さゆえ

に他人の富をいっそう欲しがり，そして，富を所有しているので自分だけが一番立派だと思いこむものです。現在そなたは剣や槍をひどく恐れていますが，もしもすっからかんの旅人としてこの人生という道に入りこんだのであれば，追剥の前だって鼻歌を歌うことでしょう。（すなわち，道中富を持ち歩いていない無一文の人間は，何も取られるものがないので，追剥の前でも平気で鼻歌を歌う。）

　ああ，この世の富による喜びは貴重にして何と燦然たることか。それを手に入れれば，ひきかえに安全を失うとは。

5

人間の最初の時代は至福にみちていた。
天然の野原のもたらす糧で足りていた。
暴飲暴食で自らを損ねることも酔いつぶれることもなかった。
黄昏どきに容易に樫の実で飢えをしのいだのだった。
澄んだ蜂蜜にバッカスの贈り物［つまり，葡萄］を混ぜる術も知らなかったし
(つまり，蜜酒の作り方も赤葡萄酒の作り方も知らなかった),
セーレス人の国の光る織物［つまり，絹］をチルスの毒液に
浸ける術も知らなかった
(つまり，チルスで見かけられる一種の貝の血［つまり，分泌液］
――それを用いて紫色に染める――
によってセーレスの国の白い織物を染めることを知らなかった)。
草上で健康な眠りをまどろみ,
流れゆく水を飲み，高い松の木陰の下に休んだ。
客人や外来者が荒れる海を櫂や小舟で切り進むこともまだなかった。
新しい国を見つけて，商品を諸国に運ぶこともまだなかった。
猛々しい進軍ラッパも寂として静かだった。
激しい憎しみで血が流され，鎧を染めることもまだなかった。
何ゆえに，いかなる敵意があって,
最初の挙兵をする気になるだろう。
残忍な傷口を見るだけで，流血が益するところは皆無なのだから。
我らの時代が古き習わしに戻らぬものか。
だが，心休まらぬ所有欲が，エトナの山の燃えつづける火よりも
もっと激しく人々のうちに燃え上がる。
悲しきかな。だれが掘り初めたのか。

地中に埋もれていた金塊を，隠棲を望んでいた宝石を。
彼は高価なる危険を掘り出してしまったのだ。
(つまり，初めてそれらを掘ったものが高価な危険を掘り出したというのは，
それらの高価さのゆえに多くの人々を危険にさらしたからである。)

六

ところで，高位や権力に関しては何を申しましょう。人間は真の高位も真の権力も知らないので，それらを天のごとく称揚しています。しかし，高位や権力が悪人のもとに来たならば，エトナ山が噴火したときの火炎ほどの危害と破壊をもたらし，大洪水もおよばぬ惨い災害をもたらします。事実，そなたもよく覚えていることと思いますが，執政官職と呼ばれる高位は，かつては自由の先駆けでしたが，執政官たちが驕りたかぶってきたため，先人たちはそれを廃止しようとしました。また，それ以前にも，やはり驕った行為のため，先人たちはローマの国家から王の称号を廃止しました（つまり，彼らはもはや王をおこうとしなかった)。

反対に，まったくまれなことですが，かりに高位および権力が善人に与えられたとしても，高位や権力自体にはどういう美点がありますか。それらを行使する人に善さがあるのみではありませんか。ですから，高位のゆえに徳に名誉が訪れることはなく，むしろ逆に，徳のゆえに高位に名誉が訪れるのです。

ところで，燦然として渇望の的である得がたい権力とは何なのですか。ああ，俗世の生きものよ。考えてもみなさい。何に対して権力を持っているように思えるのですか。もしも鼠のなかの一匹が他のすべての鼠に対して権利とか権力とかを主張するのを見るならば，そなたはどんなにか馬鹿にするでしょう。（注釈　人間にとっても同様。悪人が悪人に対して権力を持つ。つまり，肉体が肉体に対して権力を持つにすぎない。）もしも人の肉体をよく考察するならば，人間よりも脆いものは何があるでしょう。人は小さな蚊に噛まれても，這いまわる虫が人体の局所に入っても死ぬことがよくあります。そもそも，権利を他人［の精神］に行使し実行できる人を見いだすことができるでしょうか。ただ自分の肉体に対して，あるいは肉体よりも劣るもの――偶然的所有物と呼ぼう――に対して行使可能なだけではありませんか。いったい，自由な精神に対して命令ができるでしょうか。確固たる理

性により本人自身のものとなっている精神からその本来の平静な状態を奪うことができるでしょうか。かつてある暴君が精神の自由人を服従させようと思い，この暴君に対して企てられた陰謀（私は共同謀議と呼ぶ）を知っているものたちを拷問によって自白させ告発させようとしたことがありました。しかし，この自由人は舌を噛み切ってその怒れる暴君の顔に吐きつけました。こうして，この暴君が残酷さの手段にしようと思っていた拷問を，この哲人は徳の手段にしたのでした。

ところで，他人に対して為すことができて，それと同じことを仕返しに他人から為されないものはいったい何があるしょう。（すなわち，自分は他人にすることができ他人は自分にすることができないものがあるであろうか。）私が聞いたブシリスに関する話では，彼は自分の家に宿を借りにきた旅人をいつも殺していましたが，旅人のヘラクレスに殺されました。また，レグルスはアフリカの多くの人々を戦いで捕らえ，彼らに手錠をかけましたが，彼はその後まもなくかつて打ち負かした人々によって鎖につながれるべく両手をさしだす羽目になりました。このように，自分が他人に為したことを他人は自分に為すことはできないという力を持っていないのに，そのようなものをそなたは権力者だと思いますか。

さらに，もしも高位や権力がそれ自体に固有の，もしくは本来の，善さがあるとすれば，それらは悪人のもとにはけっして来ないでしょう。なぜなら，反対のもの同士は結びつかないのが常ですから。自然は反対のものが結合するのを拒むものです。ですから，私の確信するところでは，極悪人たちはしばしば高位に就いていますが，このことは高位や権力は本来的に善ではないということを示しています。なぜなら，それらは悪人と癒着し一体化しうるからです。さらに，運命の女神の贈り物が悪人のもとに惜しげもなく訪れることからも，まったく当然ながら，同じことが判断され，そう断言することが可能です。

さて，その贈り物に関しては，次のように考えるべきだと思います。疑うまでもなく，強さを身に備えている人が強いのであり，速さを身につけている人が本当に速いのであり，音楽が音楽家を作り，医術が医者を，弁論が弁論家を作ります。したがって，あらゆるものの本性がそれぞれの固有性を作り出すのであり，本性は相反する事物の特徴とはまざりあわず，相反するものをおのずと追い出します。ところが，確かに，富は飽くことのない強欲を抑えることはできず，権力は人に

自己を支配させることすらありません。というのも，権力者は邪な欲望のため，ほどかれることのない鎖に捕縛されているのですから。また，悪人に与えられた高位は彼らを価値ある人物にすることはなく，むしろ彼らがつまらない無価値な輩であることを公然と示します。なぜこういう次第なのでしょうか。それは，そなたたちが事物を間違った名称で呼んで喜んでいるので，それらがまったく反対の名称を帯びることになったためです。その名称が偽りであることはその［名称が付けられている］事物の結果によって容易に証明されます。ですから，先の類いの富は正しくは富と呼ばれるべきでなく，先のような権力は権力と呼ばれるべきでなく，先のような高位は高位と呼ばれるべきではないのです。ですから，最後に結論として，運命の女神のすべての贈り物には望ましいものは何もなく，さらに，きわめて明白に見られるように，本来価値もないのです。なぜなら，それらは常に善人と結びつくわけでもないし，結びついた人々を常に善人にするわけでもないのですから。

6

我々がよく知っているように，
皇帝ネロはどれほど多大な危害と破壊を為したことか。
彼はローマの都市を焼き，元老院議員たちを殺害させた。
残忍にも弟を殺し，母親の血でねっとりと濡れた。
(つまり，自分が宿った場所を見るため母親を殺させ，
その遺体を切り開かせた。)
そして，彼女の冷たくなった死体をすみずみまで見た。
涙で頬を濡らすこともなく，
冷酷にも，死者の美を審査し批評したのだった。
にもかかわらず，フィーバス（太陽）が地の果てから昇り
波の下にその光を隠すまでの間に見ることのできた人々を
このネロは笏によって支配した。
(つまり，彼は太陽がまわる東から西までの人々を王笏によって支配した。)
このネロは七つ星と呼ばれる冷たい星の下のすべての人々を笏によって支配した。
(つまり，彼は北の半分にいるすべての人々を支配した。)
このネロは，灼熱の砂漠を乾いた熱風で焼く

烈しい南の風ノトゥスが焦がすすべての人々
（つまり，南のすべての人々）をも支配した。
だが，かの強大な権力もこの悪しきネロの狂乱をついに改めえなかったのか。
ああ，しばしば邪剣が残忍な毒と
（つまり，有毒な残忍さが王位と）
結びつくとは悪意に満ちた運命であることだ。」

七

このとき私は次のように言った。「あなた自身よくご存じのように，私は世俗のものへの欲望に支配されたことは一度もありません。私はことを成し遂げる機会を望んだのです（すなわち，共同体を治める機会を望んだ)。というのも，徳は活かされないまま老いるべきではないからです(つまり，ボエティウスは自分が老いないうちに，彼の徳が——今やまったく活かされていないが——公共の政治に実践されないまま朽ちてしまわないことを，そして，彼の善政について人々が語り書き記すことを望んだからである)。」

（哲学） 彼女は言った。「そのとおりです。そういうことは，つまり，公共の事物の行政を正しく行ったり，公共の利益になるよう高い価値のあることをしたりして名誉や名声を得たいという大望は，生れつき立派で高貴な人々を政治にひきよせるものです。しかし，それは徳の究極的な完成に達した人々をひきつけたり魅せたりはしません。よく思い巡らして考えてごらんなさい，そんな名誉は何と小さく，何と無価値なものでしょう。そなたも天文学の証明によって学んだように，天空の大きさに比べれば，地球の丸さは点ほどの意味しか持ちません。つまり，もしも地球が天空の大きさと比較されれば，地球には広がりはないと人々全員に判断されるでしょう。大宇宙のうちのこの狭小な地域のうち，そなたも学んだとおり，プトレマイオスの証明では，我々の知っている生物が住んでいるのは四分の一だけです。さらに，その四分の一から海や沼地が占めたり広がったりしている土地と，乾燥地（つまり，砂地や砂漠）が延びている土地を頭のなかで差し引いて減ずるならば，人間の居住にはほんのわずかな場所がかろうじて残るのみです。かくして，一点のうちのそのまた極小の一点のうちに囲いこまれているというのに，名を挙げ広め，名前を遠くまで知らせようなどと思うのですか。こんなにも狭小な囲いのなかにきつくぎゅうぎゅ

うに閉じこめられているのだから，名誉にどれほどの高尚さや偉功があるでしょう。

さらに，次のことも考えてごらんなさい。多くの民族がこの狭い居住地という囲いの中に住んでいますが，彼らの言語，風習，生活様式は異なっています。そのため，そういう民族には，道中が難儀であったり，言葉が異なったり，交易がなかったりで，個人の名前が届かないばかりか，国家の名前すら届きません。少なくとも，マルクス・トゥリウスの時代，彼の本に書いてあるところでは，ローマ共和国の名声はコーカサスの山を越えて届いてはいませんでした。当時，ローマは隆盛となり，パルティア人やその周辺に住んでいた他民族に大いに恐れられていたというのにです。このことから，そなたたちが誇示し倍増せんと腐心している名誉が，実はいかに狭隘でいかに限定されたものであるか分かったでしょうか。ローマの名声が越えることも届くこともできない所にまで一ローマ人の名誉が伝わるでしょうか。また，風習や掟は様々な民族の間では一致せず，同一のことが，ある人々には称賛に値すると判断され，他の人々には懲罰に値すると判断されることがあることも分ったでしょうか。こういうわけで，人は自分の名声を称えて喜んでいても，その名前を多くの民族に伝えたり広めたりすることはまったく不可能だということになります。だから，同胞に知られれば，自分の名誉に満足すべきであり，その輝かしい名声も［将来まで残るにせよ］一民族の枠の中に限られるでしょう。

それにしても，何と多くの人々が，在世中は非常に著名であったのに，伝記作者が記憶力薄弱のゆえに失念したため，忘れられ消えていったことでしょう。もっとも，その伝記とて，暗黒の永い時間が経過するうちには伝記も著者も消え去ってしまうのですから，益するところはほとんどありません。それにもかかわらず，人間たちは将来も名声が続くと考え，不滅を得ることができるかのような気になっています。しかし，終わりのない永遠の時間と比べるならば，そなたの名前が永続すると［信じて］喜ぶべき理由があるでしょうか。いま一瞬の存在と一万年の歳月とを比べるならば，一瞬も，小なりとは言え，いささかの持続時間を有するから，どちらの時間にも終わりが来ることは同様です。ところが，その一万年も，さらに，それを一万倍した歳月も，終わりのない永遠とは較べるべくもありません。終わりのあるもの同士の比較はできますが，終わりのあるものと終わりのないものとの比較は無理なのですから。かくして，名声は，いくらでも永く続

くとそなたは思いたがっているので，尽きることのない無限の永遠と比較しうるように思われるでしょうが，実は，名声はただ単に小さいというよりも，まったく無であると思えて当然なのです。

ところで，人間は世人に聞かれたり空しい評判になるためでなければ，何も正しいことができないし，良心と徳という大いなる価値も放棄してしまい，他人の無駄口に褒賞を求めるものです。さあ，よく把握（つまり，聞いて理解）してほしいのですが，ある人がそのような虚飾を面白おかしく茶化して，うぬぼれと思いあがりをからかったことがあります。昔，ある男が真の徳を実践するためではなく鼻もちならぬ思いあがりを満たさんがために，偽って哲学者の号を語っていましたが，その男を別の人が辛辣な言葉で攻撃しました。後者の人は，その男が哲学者であるかどうか，すなわち，彼に加えられた侮辱にさらりと堪えうるかどうか，試そうと思ったのです。この似非哲学者はしばらく我慢していましたが，激烈な言葉を受けたとき，とうとうやりかえすかのように得意げにこう言いました。『私が哲学者であることがお分かりになりましたかな。』 もうひとりの人は痛烈に答えて言いました。『口をつぐんだままでいたら，そうだとよく分かっただろうね。』

閑話休題。立派な価値ある人々が（私が論じているのは，もちろん，そのような人々のことである），徳によって名誉を求める場合はどうでしょうか。この場合はいかがですか」。彼女は続けて言った。「肉体がついに死によって分解するとき，このような人々に名誉は何をもたらすでしょうか。もしも人は全面的に（つまり，肉体も魂も）死んでしまうのならば——そのように信じるのは理性の禁ずるところですが，かりにそうならば——，名誉はまったく存在しません。そもそも称えられるべき名誉の主が存在しないというのに，名誉はいったい何になりますか。また，もしも魂が，［自己の］善行の記憶をもったまま，この世という牢獄から放たれ，自由に天空に昇るのであるならば，魂はすべての世俗の関心事を軽蔑し，天空に歓喜しつつ，俗事から解放されたことを喜ぶのではないでしょうか。（すなわち，そのとき魂はこの世の名声という栄光を気にとめはしないのである。）

7

名誉を求めることのみをひたすら思いつめ，
それこそが最高の善であると思うものは

天空の広き遼遠たる空間と
この地球の狭小なる地を見よ。
そうすれば，我が名を高めんとすることを恥じいるであろう。
地球のわずかな周りを充たすことすらできないのだから。
ああ，驕れるものたちは何を得んとして
この世の死という軛のなかでいたずらに首を持ち上げるのか。
たとえ名声が多くの口の端に上って広まり，
遠くの民族にまで伝わろうとも，
一族一門が赫々たる爵位に輝こうとも，
死は高き名誉を嘲笑う。
死は高き頭も低きもともに包みこみ，
最高位のものを最下層のものと同等同列にする。
正しきファブリキウスの遺骨は今いずこ。
ブルートゥスは，厳しき大カトーは，今いずこぞ。
ほの残りたる名声は彼らの空しき名前をとどめ
数個の文字で記されてはいる。
だが，彼らの名声を称える麗句を知ろうとも
死に絶えた人そのものは知るべくもない。
それゆえ，知られず静かに休むがよい。
名声により世に知られようとするなかれ。
残酷な日が命を奪おうとも
世俗の名前という［吹き抜けて行く］風によって
生きながらえようと思ったところで
第二の死が待っているのだ。」
（注釈　ここに言う最初の死とは肉体と魂の分離であり，
ここに言う第二の死とは名声の消滅である。）

八

「ところで，」彼女は言った，「私は運命の女神に対して頑なな戦いをしていると思われないように［言っておきたいのですが］，彼女はときには欺瞞的であるがゆえに人々から感謝されるに値することもあります。すなわち，彼女が正体を現し，素顔をさらし，彼女のやり方を見せるときです。たぶん，まだそなたには私が言おうとすることが分からないでしょう。奇妙なことに，私自身言いたいことはあるのに，その内容をほとんど言葉で説明できないのです。ともかく，私の

考えは，人間にとっては逆運のほうが福運よりも有益だということです。運命の女神は，優しそうに見えるときは，嘘をついて，幸福の希望を空約束するのが常です。これに対し，逆運の女神はいつも正直であり，変化によって彼女が不安定であることを示します。順運の運命の女神は人を欺き，逆運の運命の女神は人を教えます。順運の運命の女神は，偽りの善を楽しんでいる人々の心を，その偽りの善という美によって集合させ，逆運の運命の女神は幸運の脆さを知らせることによって彼らを離散させます。順運の運命の女神は，そなたも見るとおり，いつも風向きや潮流を変えて自分自身を知ることがありません。ところが，逆運の運命の女神は逆境に慣れているので控えめで自制的で賢明です。最後に，順運の運命の女神はお追従により迷妄の徒を最高の善から逸れさせますが，逆運の運命の女神はしばしば，まるで鉤を付けているかのように人々を引き戻し，真の善へと導きます。

かくして，この峻烈で恐ろしい運命の女神はそなたに真の友人たちの心を示してくれたのに，これをつまらぬことだと思うべきでしょうか。実際，この運命の女神はそなたの仲間の実意ある顔とあてにならない顔とを区別して明らかにしてくれました。彼女は，そなたから去ったとき，彼女の友は連れて行き，そなたの友は残して行ったのです。そなたが豊かで幸せだと思えていたころ，いくら支払ってこの完全な知識（つまり，真の友人を知ること）を買ったでしょうか。さあ，だから，富が失われたのを嘆くのはおやめなさい。富の一番大事な本質，つまり，そなたの真の友人を発見したのですから。

8

天地は変わらぬ誠実さをもって調和の取れた変化をもたらす。
諸元素の相反する性質は互いに永遠の盟約を守る。
太陽神フィーバスがその黄金の馬車でバラ色の日を運び，
夜のエスペルスなる宵の明星が夜を運び，
月が夜を支配する。
海はあふれんと渇望するが，
その荒波を一定の限度に抑え，
地球の広大な地帯や領域にまで広がろうとはしない。
（つまり，地球全体を覆うことはしない。）
万物のこの調和や規律を結ぶものは愛である。
愛は地を，海を，支配し，さらに天をも指図する。

愛が手綱を緩めれば，
今は互いに愛しあっていても，
万物は終わることのない戦いを始める。
今は美しい推進力により調和をもって誠実に可動させているが，
万物は争って天地の機構をも解体しようとする。
愛は聖なる契約により諸民族を結びつけ，
純愛の恋人たちの結婚の儀式をとり結ぶ。
さらに，愛は誠実な仲間たちの掟をも規定する。
ああ，天を支配する愛が人間の心をも支配するならば，
人間たちは幸いであろうに。」

第二巻終わる。

第三巻始まる。

一

こう言って彼女は歌を終えた。彼女の甘い調べが私に染みこんだので，私は［もっと］聞きたくて，うっとりとして耳をそばだてていた（つまり，彼女が言うことをもっとよく聞くために）。しばらくして私はこのように言った。「ああ，悲しみ痛む心をこの上なく慰めてくださる方，重厚な議論と心地よい歌によって私に元気と活力を与えてくださいました。私はもう運命の女神の打撃に堪えられないとは思いません（すなわち，今や私は運命の女神のすべての攻撃に堪え，彼女から身を守ることができる）。ですから，強力だと以前おっしゃっていた治療薬をもう恐れてはいません。それどころか，聞きたくてうずうずしていますので，その治療薬をぜひ聞かせてくださるようお願いします。」

すると彼女はこのように言った。「そうであろうと思いました。そなたはじっとして注意深く私の言葉をむさぼるように聞いていましたから。私はそなたが今のような気の持ち方になるまで待っていたのです。むしろ，私がそのようにしむけた，と言うほうが事実です。まだ話していない残りの内容は，言わば，最初の味は刺すようですが，体内に入れば，甘くなるものです。しかも，そなたはその治療薬を聴きたいと言っているのですから，どこに導かれようとしているか分かれば，［聴きたくて］どんなにか熱く燃え上がることでしょう。」

「どこにですか」と私は聞いた。

彼女は言った。「そなたの心が夢にまで見ている真の幸福にです。でも，そなたの視界は俗事の虚像に占領されてさえぎられているので，まだその真の幸福を見ることはできません。」

私は言った。「ぜひ導いてください。お願いします。その真の幸福がどんなものか一刻も早く示してください。」

彼女は言った。「喜んでそうしてあげましょう。でも，まずはっきり言葉に言い表して，そなたがよく知っている至福はなぜ偽物なのかという理由を教えることに努めましょう。偽りの善をよく見つめたうえで，視線を反対側に向ければ，真の至福の輝きが分かるのですから。

1

肥沃な畑に種を蒔こうとするものは，

まず畑から棘を取り除き，
鎌で低木や羊歯を刈り取るがよい。
そうすれば，穂も実もたわわな五穀が収穫できる。
蜂蜜がいっそう甘くなるのは，
先に酸味を口にしたときである。
星がいっそう気持ちよく輝くのは，
南風ノトゥスが暴風雨を放ったのちである。
明けの明星ルーシファーが夜の闇を追い払ったのちに，
昼はいっそう美しく（太陽の）バラ色の馬[車]を導く。
ちょうどそのように，
そなたも，初めは偽りの善に目を向けたけれども，
（俗世への愛着という）軛から首を抜き出すべく始動するがよい。
そうすれば，やがて真の善がそなたの心に入って来るはずだから。」

二

このあと彼女はしばらくのあいだ視線を据えて，まるで彼女の精神の聖なる場所のうちにこもるかのようにじっとしていた。そのあと次のように話しはじめた。

「人間が関心を持っているものに関してですが，人間は様々に努力し苦労し，事実，様々な道を辿ってはいますが，だれもかれも至福というただひとつの目的に到達しようと努めています。至福とは，それを得たならば，それ以上には何もほしくないような善のことです。事実，これは最高の善ですから，その中にあらゆる種類の善を含んでいます。もしもその善に何か欠けているところがあれば，その最高［のはず］の善の外部に渇望される善があることになるので，それは最高の善ではありえません。したがって，今や明確なように，至福とはあらゆる善がそろった完璧な状態であることです。その至福を，先に述べたように，すべての人間はいろんな道によって獲得しようと努めているのですから，真の善への渇望は人間の心に生受的・本性的に植えつけられているのです。ところが，思いちがいのため道を踏みはずし偽りの善へと迷いこむのです。

ある人々は 最高の善とは何ものにも不足せずに暮らすことだと思い，富にみちあふれようと努め，他の人々は尊敬に値することこそ最高の善だと考え，顕職に就くことによって同国人の間で尊敬されようと努めます。また，強大な権力が最高の善だとみなし，支配者に，さ

もなければ支配者の取り巻きになろうと努める人々もいます。さらに，ある人々には高い名声が最高の善のように思え，戦時あるいは平時の功績により輝かしい令名を獲得しようとしてあくせくします。また，最高の善は愉悦と享楽だと推測し，肉体的快楽に耽ることが至福であると思いこんでいる人々も多くいるし，先に述べた善の要因と結果をないまぜにして，権力と快楽を得んがために富をほしがったり，金銭や名声を得んがために権力をほしがる人々もいます。

以上のもののほか，人間の願望や行動が目的とするところは次のようなものにも向けられます。貴族の身分と世間の人気，これは一種の高名をもたらすように見えますから。そして，妻と子供，これは喜びや楽しみのゆえに求められます。これに対し，友人は，幸運によるというより，徳による善に数えられるべきです。友人を持つことはまったく純粋で尊いことですから。そうでないなら権力もしくは娯楽のための交わりです。もちろん，身体的な善は，なんなく上に述べたものと関連づけられます。身体の強さと巨きさは力と価値を与えるように見え，端麗さと敏捷性は高い令名や名声を与え，身体の健康は喜びを与えるように見えるからです。

以上のことから，願望されているのは至福である，としか考えられません。なぜなら，すべての人々の判断では，何ものにもまさって一番望まれるものは最高の善である。しかるに，私が定義したように，最高の善は至福である。ゆえに，すべての人々の判断するところでは，何ものにもまさって望まれる状態は至福である，ということになるからです。

今や人類の至福として考えうるほとんどすべての原型がそなたの眼前に示されました。すなわち，富，顕職，権力，名誉，および快楽です。エピクロスはもっぱら快楽を考察し，快楽こそが最高の善であると判断し確証しました。他のすべてのものは，喜びや楽しみを心から奪うように彼には思えたからです。

それはそれとして，人間の求めるものにふたたび戻ることにしましょう。人間の心神は，薄れてきた記憶をとおしてですが，いつも最高の善を想起して探しているのです。ところが，ちょうど酔っ払いが自分の家に帰宅する道が分からないのと同じように，どの道を通ればよいのか分からないのです。そうとすれば，何物にも不足しないように努めるからといって，その人は間違っていると思われるでしょうか。もちろん間違ってはいません。あらゆる財産が豊富にあり，他人のも

のを必要とせず，自分のものは十分にあるという状態ほど至福をもたらしうるものは他にはないではありませんか。では，まさしく善であるものは尊敬と敬意にも値すると思っている人々は思いちがいをしているでしょうか。無論，そんなことはありません。ほとんどすべての人間が願い，かつ得ようと苦労するものは，卑しくもないし，軽蔑すべきでもありません。さらに，権力は善のうちに数えられるべきではないでしょうか。そうでなくて何でしょう。あらゆるもののなかで最も価値のあるものが弱く無力だとは考えられません。著名な名声は軽蔑されるべきでしょうか。もちろん，だれも否定できないように，非常にすぐれて立派なものは著名で名高く思われます。言うまでもなく，至福には苦痛や脅えはなく，憂いや悲しみに従属することもありません。ですから，自分に快楽を与えうるものなら，どんなにわずかなものでも人は入手し享受しようとするのです。実際，以上のものが人々が獲得しようと切望し求めているものです。だから，富，高位，支配権，名誉，快楽が渇望されるのです。これらによって，充足，尊敬，権力，名声，愉悦が得られると思われるからです。

以上のことから，人々が様々な努力をして求めているものは善である，ということになります。善を渇望するということは本性の力がいかに大きいかということをはっきりと示しています。なぜなら，人々は，様々な異論や不一致があっても，善という目標を愛するという点では一致しているのですから。

2

琴の柔らかく心地よい音に合わせて
含みのある歌によって示しましょう。
どのように生受の本性が
強力にも万物を支配し，導き動かすのか，
どのような掟によって見とおして大宇宙を維持するのか，
どのように，ほどけることのない絆で
万物をつなぎ結びとめているのかを。
ペネの国から来たライオンは美しい鎖につながれ，
人の手から与えられる餌を食べ，
非情な主人を恐れ，
鞭で打たれることに慣れていても，
その恐ろしい口が血ぬられるや

（つまり，餌食とした動物の血で），
休み眠っていた，往時の心がふたたびよみがえり，
恐ろしく咆哮し，本性に目覚め，
首の鎖を振りほどく。
そして，その主人が一番最初に血まみれの歯で食いちぎられ，
激しい怒りをこうむる（つまり，主人を食べてしまう）。
高い枝で（つまり，森の中の）賑やかに歌っていた鳥は，
狭い篭に入れられれば，
人間が気慰みから
蜂蜜を入れた飲物や多くの食餌を与えやさしく気づかおうとも，
跳びはねつつ狭い篭から懐かしい森影を見れば，
食餌を足で踏み散らし，
ひたすら森を求めて嘆き，
森を希求して甘い声でさえずる。
若木は，強い力で押さえられれば，
ひとたまりもなく頭を垂れるが，
それを曲げていた手が放されれば，
たちまち頭は天を見上げる。
太陽神フィーバスは夕暮れには西海の波間に沈むが，
すぐに秘密の道を通っていつもの昇る場所に馬車を戻す。
万物はその本来の通り道に戻るのを求め，
万物は喜んでその本来の姿［つまり，本性］に回帰する。
終わりを始めに結び，
（本来の姿・活動から外れないように）
その通り道を［切れ目なく］確実にしなければ，
何物も秩序を与えられはしない。

三

このように，かすかな回想力によってではあるけれども，地上の動物である人間たちも絶えず始源を夢想し，また，明晰でも完全でもないとはいえ，一種の思索力によって，遥かかなたから至福の真の目的へと目を向けているのです。それゆえ，人間は生受的・本性的な願望により真の善に導びかれる［はずです］が，色々な思いちがいのためそれから逸れてしまっているのです。考えてもごらんなさい。人間は至福をもたらすと思っているものによりおのずと目標に到達できる

と思っているけれども，本当にそれらによって到達できるでしょうか。金銭なり，顕職なり，そのほかの前述のものなりが，なんらの善も欠けていないし，欠けているように見えもしないほどの状態を人間にもたらすならば，確かに，彼らは自分が獲得したものによって至福を得たと認めましょう。しかし，それらのものが約束していることを実行できず，さらに，善が少なからず欠けているならば，それらのうちには至福という美の偽物が認知・認識されるということがはっきり示されるのではないでしょうか。

まず最初に，そなたは少し前まであふれるほどの富を持っていたので尋ねますが，あふれるほどの富に囲まれていれば，不幸や悲しみが生じたとき，心の片隅でさえも心配したり悩んだりすることはまったくありませんでしたか。」

私は言った。「はい，よく覚えていますが，いつも何か心配していましたので胸中安らかだったことは全然ありませんでした。」

彼女は言った。「それは，あればよいと思うものがなかったり，なければよいと思うものがあったりしたためではありませんか。」

「そのとおりです」と私は言った。

「では，一方は存在し，他方は存在しないことを願っていましたか。」

「そうだと認めます」と私は言った。

彼女は言った。「では，実際には，だれもが願望するものが欠けているのですか。」

「はい，欠けています」と私は言った。

彼女は言った。「何においてであれ不足・欠乏している人は自分自身に何から何まで充ち足りてはいない，ということですか。」

「はい」と私は言った。

彼女は言った。「そなたも，多大な富を持ちながら，充ち足りてはいなかったのですか。」

「そうでないとすればいったい何でしょう」と私は言った。

「このように，富は人を不足がないようにすることも，自分に充ち足りるようにすることもできないのです。しかも，それを富は約束しているように見えるのに。また，よく考えるべきだと思うのですが，金銭は，その性質上，所有者からいやおうなく奪い取られることはないようにする，というわけにはいかないのです。」

「はっきりと認めます。」と私は言った。

彼女は行った。「認めないわけにはいかないでしょう。なにしろ，

毎日強者が弱者からいやおうなく奪っているのですから。そもそも，法律上の訴訟や告訴はいったいどういう動機から生じていますか。暴力や詐欺によって，しかも，きまっていやおうなしに，奪われた金銭を取り戻したいという動機があるだけではありませんか。」

「まさにそのとおりです」と私は言った。

彼女は言った。「それでは，自分の金銭を守るためには外部の助けを求めることが必要ですか。」

「だれがそれを否定できるでしょう」と私は言った。

「そのとおりです。」 彼女は言った。「もしも失うべき金銭を持っていなければ，助けは不要だということになります。」

「疑うまでもありません。」と私は言った。

彼女は言った。「では，事態は逆転してしまいました。なぜなら，富は充足をもたらすと思われていたにもかかわらず，むしろ外部からの助けが必要になったのですから。それに，富はいったいどんな仕方・方法で飢餓感を追い払うことができるでしょうか。金持ちは飢えや渇きとは無縁でしょうか。金持ちは冬に手足が寒いと感じないでしょうか。これに対し，そなたは答えるでしょう，『金持ちは飢えを満たし，渇きを和らげ，寒さを追い払うに足るほどのものは持っている』と。しかし，飢餓感は富によってそのように紛らすことはできても，完全に追い払うことはできません。なぜなら，飢餓感は絶えず口を開けてほしがり，富によって満たされても，さらに何でも要求し，なお満たされるべき［次の］飢餓感が存在するのですから。もう語らず口をつぐみますが，本性［である生理的要求］はわずかなもので充ち足りるのに，強欲は何ものによっても充ち足りることがありません。富は飢餓感を追い払うことはできず［次の］飢餓感を作り出すのに，人間たちは富は充足を与えることができると思っているとは一体どういうことでしょう。

3

貪欲な富者は黄金が流れる大河や水脈を所有しようとも，
それによって彼の貪欲が和らぐことはない。
紅海の宝石で首を飾ろうとも，
百頭の牛で肥沃な畑を耕そうとも，
生きている間は身を蝕む心配が彼から離れず，
死んだとき薄情な富は彼に付き添いはしない。

四

ところで，高位はそれに就いている人を敬意・敬服に値しうるようにするでしょうか。高位にはその地位に就いている人々の心に徳を入りこませるほど大きな力があるでしょうか。あるいは，悪徳を追い払うことができるでしょうか。言うまでもなく，悪を追い払うどころか，むしろ悪を露見させるものです。事実，私の唾棄するところですが，高位はしばしば悪人に与えられています。例えば，ローマの執政官ノニウスは高位の座にいましたが，彼のことをカトゥルスは『くされ膿』とか『爛れ男』とか呼びました（すなわち，そう呼んだのは，膿がただれているのと同様に，彼の心は悪徳の塊だったから）。これでも，高位は悪人には赤恥をもたらすことが分かりませんか。もしも顕職のゆえに著名でなければ，彼ら悪人たちの無価値さはこれほど明らかにはならなかったでしょう。実際，そなた自身多くの危険に身をさらしながら，デコラトゥスとは官職をともにする気になれなかったではありませんか（つまり，テオドリック王を立腹させて危険な目に遭うかもしれないのに，デコラトゥスと政務上の僚友になろうとはしなかった）。それというのも，そなたは彼のうちに卑しい奸物と密告者の邪心を見て取ったからでした。私の判断でも，顕職に就いてはいても，顕職に値しないと思われる人ならば，尊敬する価値はありません。ところで，そなたは知恵にあふれている人を見れば，きっと敬服に値しないとも，そのあふれる知恵に値しないとも思わないでしょう。」

「もちろん，思いません」と私は言った。

彼女は言った。「畏敬性は，本来，徳に所属するのですが，人に徳が備わっていれば，徳は畏敬性をただちにその人のものとして配置換えをします。ところが，ただ顕職に就くだけでは，敬服に値する人物になることはできないのですから，顕職には畏敬性に固有な美が欠けていることは明白です。しかも，この点に関してはもっと注意すべきことがあります。というのは，もしも悪人が腹の中が汚く卑劣であるためにほとんどの人々に軽蔑されるならば，奸物どもは高位にもかかわらず尊敬に値しえないので，奸物が高位に就いているということが数多くの人々に知れわたってしまい，彼は高位のためにかえって称賛よりも軽蔑を受けることになります。そうなれば，仕返しなしでは済みません（つまり，奸物たちは高位に就くことによって人々に報復する）。彼らは高位に報いるに，彼らの赤恥によって高位をけがし冒涜

するからです。
　次に，真の尊敬は影のようなはかない高位によってもたらされるのではないことが分かるように，今度は次のことを理解してください。執政官の位に何度も就いたことのある人がはからずも異民族の間にやって来たとして，その顕職のゆえに異邦人たちが彼を尊敬したり恐れたりするでしょうか。もしも顕職がもともと畏敬性から与えられたものであれば，ちょうど火がどこででも赤く熱く燃えるのをやめないのと同じように，顕職はどんな人々の間ででもその務めを果たすのをやめないでしょう。ところが，敬意・敬服［に値する］と思われるのは，その人の本性に固有な力によるのではなく，ただ人間の誤った見解によるのです（つまり，高位にある人を敬服に値すると思いこむからである）。だから，その高位を知らない人々のもとではその顕職は消滅——しかも一瞬にして——してしまいます。しかし，それは異邦人の間のことだ，とそなたは言うかもしれません。では，高位は，それが生まれた場所でならば，いつまでも続くでしょうか。ローマの食糧管理官の位は，確かに，かつては偉大な権力を付与されていました。しかし，今ではむなしい名称であり，その出費は元老院にとって大きな負担になっています。かつては穀物や他の食糧を管轄する職務に就いている人は偉いと思われていましたが，今ではその食糧管理官の職ほど卑しまれているものは何があるでしょうか。
　つい先ほど言ったように，美を本性的に有していないものは，世間の見解しだいで，ときには称賛や栄光を浴び，ときにはそれを失います。したがって，高位は人を尊敬に値させえないのであれば，そして，高位は奸物どものけがらわしさによりおのずと手垢がつくのであれば，高位は時の経過とともにその栄光を失うのであれば，高位は異国人には薄汚れていると評価されるのであれば，その中にどのような望むべき美があるでしょうか。（すなわち，皆無である。それゆえ，高位はだれにも畏敬性という美を与えることはありえない。）

4

驕れるネロは，放縦の限りをつくし，
髪を整え，チルスの美しい紫衣と白い真珠で身を飾ったけれども，
それにもかかわらず，彼の栄華はすべての人々に嫌われた。
（つまり，この悪人ネロはすべての人々に嫌われていたにもかかわらず

強大な権力を持っていた。）
さらに，彼は尊敬されるべき元老院議員たちに
侮蔑の高位の座を与えた。
（著者が侮蔑の座と呼ぶのは，
その高位を与えたのが極悪人ネロだったからである。）
それゆえ，だれがまともに考えるであろう，
悪徳の奸物が与えるような顕職のうちに至福があるなどと。

五

ところで，支配権とか国王との親交とかは人を権力あるものにするでしょうか。それらによる至福が永続するのであれば，そうでしょう。しかし，王が幸福から零落へと落ちぶれた例は過去も現在も多々あります。

まったく，自分自身を維持する力さえ見られないとは，権力は何と高潔にして燦然たることでしょう。

もしも王位という権力が至福を作り出すものであれば，その権力に少しでも欠けているところがある場合，それは至福を減じ，零落をもたらすのではないでしょうか。しかるに，人間の王国が広く伸びようとも，どの王の支配権も大命権もおよばない民族が多くいるにちがいありません。ですから，王を至福にする［はずの］権力がおよばない所では，つまり，その権力が奥底まで入りこまない所では，そのため王は零落することになります。したがって，王はどうしても幸福よりも零落の割合のほうを多く持っていることになります。シシリアのある国王は暴君でしたが，自分の地位の危うさを痛感し，盟友の頭上に剣を吊り下げ，その怖気になぞらえて王位の恐怖を示しました。身を噛むような不安を追い払うことも恐怖の刺を避けることもできないのなら，権力とはいったい何でしょう。しかも，王たちは安全に暮らしたくても，そうはできません。そのくせ，権力にあることを誇っています。自分にできないことをしたがっている人が権力ある人だと思われるでしょうか。自分の周りを武装兵や護衛隊に囲まれていながら，自分が人々を恐れさせる以上に人々を恐れ，また，権力があるかのように見せるために護衛隊の手のうちに保護されているものが権力あるものと思われるでしょうか。

さて，王位そのものが非常に脆いことを示したからには，王の親交者や従者に関しては何をか言わんやです。親交のあるものたちは，王

権が安泰なときも失墜したときも，しばしば放り出されました。ネロは，友であり師でもあったセネカに，随意の死に方を選ぶように強要しましたし，アントニヌス帝は兵士たちに命じて，（親交を結んでいた）パピニアヌスを剣で殺させました。パピニアヌスは廷臣たちの間で長く有力だったのですが。実は，彼らは両者とも自分の特権を返上したがっていたのでした。この二人のうちセネカのほうはネロに自分の財産を譲って，静かな隠遁生活に入ろうとしました。しかし，偉い人たち（つまり，王権や幸運を有する者）は自らに破滅をひきよせるものなので，彼らのどちらも自分のしたいようにするわけにはいかなかったのです。手に入れていながらビクビクし，手に入れようとすれば安泰でなく，捨てたくても逃れることができないのであれば，権力とはいったい何でしょう。

　さて，徳によらず，幸運しだいで味方になるような連中は必要なときの友であるでしょうか。言うまでもなく，幸運によって友人になるような連中は逆運のときには敵になります。どんな疫病が，仲間ごかしの敵よりももっと人を苦しませるでしょう。

5

強くありたい人は無慈悲な心を抑えねばならない。
情欲に負けて卑しい手綱に首を投じてもならない。
王権が伸びてインドの国が命令や掟に震えようとも，
絶海の孤島ツーレが平伏しようとも，
卑しい黒い欲望を捨て去り，
愚痴っぽい嘆きをふっきることができないのであれば，
力を身につけてはいないのだ。

六

　さて，名誉は何としばしば欺瞞的で性悪であることでしょう。ある悲劇作者（つまり，悲劇と呼ばれる作品の創作者）は，適切にも次のように叫んで言いました。『おお，名誉よ，名誉よ，お前は無数の人々にとってただ耳を拡大させるものでしかない』と。事実，多くの人々は大いなる名声を博しましたが，それは世人の誤った意見によるのですから，そのような称賛よりももっと性の悪いものは何が考えうるでしょう。誤って称賛されれば自分への賛辞に恥じいらねばなりません。また，その価値があって謝辞や称賛を得たとしても，誉め言葉によっ

て賢者の良心がどれほど増したり殖えたりするでしょうか。賢者は善を計るに，世人の噂ではなく良心の堅固さをもって計るのですから。もしも名声を高めたり広めたりしたのが立派なことのように見えるとすれば，それが高められも広められもしなければ，みっともないことだと判断されることになります。しかし，少し前に述べたとおり，個人の名声が達しえない異民族はどうしても多くいるのですから，名誉も名声も得ていると思われる人が地上の隣の場所では栄誉も名声もないということが起きます。これらの［名誉と関係ある］事柄のうち，私の考えでは，世人の称賛とか好評とかは記憶されるに値しません。それは賢明な判断から生じるわけではないし，さらに，堅実に長つづきするわけでもないからです。

さて，貴族の称号に関しては，それがむなしくはかないものだということがはっきりと分からない人がいるでしょうか。貴族という称号が家系の著名さとか輝かしさを指すのであれば，高貴な称号は借りものにすぎません（つまり，自分の家系を自慢するものにとって）。貴族の身分は祖先の価値に由来する一種の称賛であると思われますが，称賛によって貴族になるのであれば，称賛される人こそが貴族であるはずです。したがって，自分のうちに貴族らしさ（つまり，真価に由来する称賛）を備えていないならば，借りものの貴族の身分によっては貴族たりえない，ということになります。ところで，貴族であることになんらかの善があるとすれば，私にはただ次のことだけだと思われます。すなわち，貴族の人々には立派な一門の徳からはなはだしく外れたり下落したりしてはならないという一種の義務が課せられているように見える，ということです。

6

地上の人々の系譜はみな類似の出自である。
一者が万物の父であり，一者が万物をとりしきる。
彼が太陽には光を与え，月には角を与えた。
彼が地には人を与え，天には星を与えた。
彼が魂を高い座から降ろし肉体に閉じこめた。
こうして，死すべき人間たちはなべて崇高な種子から生まれた。
なのに，なぜ祖先のことを吹聴したり自慢したりするのか。
自分の始源と，自分の創造者であり造り主である神とに目を向けるならば，

自ら心に悪徳を抱いて，本来の出自を捨てないかぎり，
だれひとりとして下落したものも卑賤なものもいないのだ。

七

ところで，肉体の快楽については何を言いましょう。快楽を欲求すれば不安にみち，実行すれば後悔にみちるものです。快楽に耽っている人々の肉体には放蕩の報いとして，何という大病や堪えがたい悲しみがもたらされることでしょう。快楽の衝動からどういう喜びが得られるかは私の知るところではありませんが，快楽の結末が苦しく哀しいものであることはよく知っています。このことはだれでも自分の情欲を思いおこせばよく分かるでしょう。そのような快楽が人を至福にしうるのであれば，同じ理由で動物もまた至福であると言わねばなりません。動物の目的は肉体的快楽をせかせかとみたすことなのですから。

妻子から受ける喜びは偽りのないものですが，よく言われているように，子供たちが，その数は知りませんが，父親にとって苦しみの種だったとはあまりにも自然に反することです。子供たちの状況の一つひとつがどんなに気がかりなものであるかはそなたに話すまでもないでしょう。そなたはこれまで経験してきたし，今でも心配しているのですから。この点で私は弟子のエウリピデスの意見を肯定します。曰く，『子供のいない人は不幸のゆえに幸福である』と。

7

快楽はすべてその耽溺者に刺針でもって苦痛を与える。
快楽は蜂と呼ばれる飛びまわる虫に似て，
甘い蜜を注ぎ終われば［人を刺して］飛びたち，
刺されたものの心をいつまでも消えやらぬ疼痛でさいなむ。

八

今や疑うまでもなく，これらの道は至福への一種の迷路であって，導くと約束している土地に人々を導くことはできません。それはさておき，上に述べた道がどんなに大悪と絡みあっているか簡潔に示しましょう。金銭を集めようと努めれば，それを所有している人から奪わなければならない。高位によって輝こうとすれば，高位を与えてくれる人に哀願嘆願しなければならない。顕職に就いて他人よりも先んず

ることを渇望すれば，卑屈な依頼によって自らを貶しめることになる。権力を欲すれば，部下の陰謀のため痛ましくも多くの危険にさらされる。名誉を求めるならば，心痛むことに煩わされて安泰を捨てることになる。快楽の生活を送ろうとすれば，卑しく脆いものの奴隷（つまり，肉体の下僕）になりさがるので，だれにも軽蔑され見はなされる。こういう次第ですから，今や明白なように，肉体の善を理性よりも重んじる人々は何と小さく何と脆いものを所有したがっていることでしょう。肉体の大きさと重さにおいて象を凌ぐことができるでしょうか。力が牡牛よりも勝ることができますか。速さが虎よりも勝ることができますか。天空の広さ，確かさ，運行の速さをご覧なさい。そろそろ卑しいものに驚嘆するのはおやめなさい。そもそも，天空は，これらの性質以上に，それを支配している秩序のゆえにこそ驚嘆されるべきものなのです。

これに対し，容姿の輝き（つまり，肉体の美しさ）は，何と一瞬のうちに過ぎ去り，何とはかないことでしょう。事実，それは夏季に咲く花の移ろいやすさよりももっとはかないものです。アリストテレスが言うように，人間がリンケウスという怪物の目を持っていて，人の視線が障害物を貫くことができるならば，外見はこよなく美しいアルキビアデスの肉体の内部の腸までも透視されて，きわめて醜く思えるはずです。ですから，そなたが美しく見えるとしても，それは，本性的にそうなのではなく，それを見る視力の弱さによる錯覚のためです。とまれ，肉体の善を好きなだけ称えてごらんなさい。そうすれば，驚嘆の的であるもの（つまり，肉体の善）が，たとえそれがどのようなものであれ，三日熱の高熱によっても壊され崩されうるということがともかく分かるでしょう。

これまで述べてきたすべては次のように簡潔に要約できます。これら世俗の善は，約束しているものを与えることができない，あらゆる善を集結して完璧になることもない，人を至福に至らしめる本道でも小道でもない，さらに，それ自体で人を至福にすることもない。

8

ああ，何という愚かさと無知が
哀れな迷える人々を真の善への道から逸れさせていることか。
なるほど，緑の樹々に黄金を求めたり，
葡萄の蔓から宝石を採ったり，

ご馳走用の魚を捕らえるのに
高い山に罠をしかけたりはしないし，
鹿狩りをしたいときにチレニア海の浅瀬に行ったりもしない。
加えて，人は波に隠れた海底の溝や深みをもよく知っているし，
どこの海が真白の真珠を産するかも，
どこの海が悪鬼貝（つまり，紫に染色するために用いる一種の巻き貝）に富むかも，
どこの潟が口あたりのよい魚や
海胆という刺のある魚介類に富むかも知っている。
しかし，人間は盲目のままでいることに甘えているので，
無頓着にも自分が渇望する善がどこに隠されているかを知らず，
地中に潜りこんで善を求める。
善は星を抱く天空のかなたにあるのに。
人間の愚かな頭に合わせるには，どのように祈ればよいのか。
ともかくも祈ろう。
彼らが富や顕職を渇望して，
苦労のすえに偽りの善を手に入れたとき，
それによって真の善を知りうるように，と。

九

偽りの幸福の形相についてはこれまで述べたことで十分でしょう。そなたが今でははっきりと理解しているならば，順序としては真の幸福に進むつもりです。」

私は言った。「確かに私はよく分かりました。富により充足を得ることはできず，王位により権力を，高位により尊敬を，名誉により貴族らしさを，快楽により喜びを得ることはできません。」

「原因もよく分かりましたか。なぜですか」と彼女は言った。

私は言った。「まるで狭い裂け目から原因を覗いているような感じです。もっと明快にあなたから教えてほしいのですが。」

彼女は言った。「実は，理由はまったく簡単なのです。なぜなら，一にして不可分なものを人間が思いちがいと愚かさのためバラバラに分割分断して歪め，真の完全な善を偽りの不完全な善にすり替えているにすぎないからです。ところで，答えてください。［充ち足りて］何にも欠乏していない人は力を必要としていると思いますか。」

「いいえ」と私は答えた。

彼女は言った。「よく答えました。もしも［充足の］力に弱いところがあれば，その箇所に関しては外部から助けが必要になりますから。」
「そのとおりです」と私は言った。
「では，本来，充足と（権）力とは同一ですか。」
「そのように思われます」と私は言った。
彼女は言った。「この種のもの（つまり，充ち足りて（権）力のあるもの）は軽蔑されるべきだと思いますか。それとも何物よりも尊敬に値すると思いますか。」
「もちろん，尊敬に値することは疑う余地がありません」と私は言った。
彼女は言った。「では，充足と権力とに尊敬を加えて，これら三者は同一であるとみなしましょうか。」
「はい，加えるべきです。真実を認めようとするのであれば」と私は言った。
彼女は言った。「充ち足りて，尊敬に値し，かつ権力のある人は，薄汚れていて著名ではないと思いますか。それとも，高い名声を博してまさしく光り輝き著名であると思いますか。考えてごらんなさい。」彼女は続けて言った。「先に認めたように，何ものも必要とせず，最も権力があり，最も敬服に値する人が，名声の輝きにだけは欠けているでしょうか。その人は名声を自分では得ることができず，名声の輝きに欠け，そのため彼はどこか弱点があり卑しいように見える，ということがあるでしょうか。（注釈　つまり，そういうことはありえない。充ち足りて，権力があり，尊敬に値する人には，いま挙げた特長から光り輝く名声が派生するのであり，彼はつとに自らに充ち足りることによってそれを身につけているのである。）
（ボエティウス）　私は言った。「それは否定できません。そのようなものは光り輝く名声と著名さのゆえにきわめて令名が高いと認めざるをえません。」
彼女は言った。「では，前述の三者に光り輝く名声が加わり，それらの間には異なるところはない，ということになります。」
「そのように帰結されます」と私は言った。
彼女は言った。「では，外部のものを必要とせず，自分の力ですべてのことをすることができ，著名で敬服に値するものは，楽しく喜ばしいものですか。」

（ボエティウス）　私は言った。「そうですが，どこからそのようなものに悲しみが入りこむのか私には分かりません。」

（哲学）　彼女は言った。「前述のことが本当ならば，そういうものは歓喜にみちていると認めなければなりません。そして，充足，権力，高貴，尊敬，および歓喜は呼び名が違うだけで，実質は変わらないということも認めなければなりません。」

（ボエティウス）　「必然的にそうなります」と私は言った。

（哲学）　彼女は言った。「このように，本来一にして単一であるものを人間は愚昧さのゆえにバラバラに分割分断しているのです。ですから，部分を持たないものの一断片だけを手に入れようとしても，ありもしない断片はもちろん，目あてでない全体を手に入れることもできないのです。」

（ボエティウス）　「どういう次第でできないのですか」と私は尋ねた。

（哲学）　彼女は言った。「貧困を追い払うために富を求めている人は権力を得ようと骨折りはしません。彼はむしろ目だたないでむさ苦しくしているのを好み，また，蓄（た）めこんだお金を失いたくないので，本性的な喜びの多くも我慢します。しかし，そのようにしていては，充足を得ることはできず，権力は逃げて行き，気苦労にさいなまれ，さらに，不潔さのため卑しめられ，目立たないでいるため埋もれてしまいます。権力のみを望む人は，富を浪費して散財し，権力と無縁なので尊敬や喜びを蔑み，名誉を称えもしません。だから，すぐ分かるように，彼には多くのものが欠けています。彼は数多くの必需品に欠乏することさえあり，数々の心配が彼をむしばみます。これらの欠乏を追い払うことができなければ，彼は権力を失うことになりますが，そうなるのを彼は最も望んでいるのです。顕職や名誉，快楽に関しても同様な議論が可能です。なぜなら，列挙したばかりのこれらのものはいずれも他のものと同じ（つまり，同一体）なのですから。これらのうちの他のものは求めず，ひとつだけを手に入れようと求めても，自分の望みのものを手に入れることはありえないのです。」

（ボエティウス）　「では，もしも人間がこれら全部を同時に手に入れることを渇望すると仮定したら，どうおっしゃいますか。」

（哲学）　彼女は言った。「もちろん最高の至福を得ることになると申しましょう。しかし，私が示したように，約束しているものを与えることのできないもののうちにはそれは見いだせません。」

「もちろんできません」と私は言った。
彼女は言った。「したがって，全一体のうち自分が求めているひとつだけを単独に与えてくれる断片があると人間は思っていますが，そのようなもののうちに至福を求めることはけっしてできないのです。」
（ボエティウス）　「同意します。これ以上の真実は申しようもありません」と私は言った。
彼女は言った。「今やそなたは偽りの幸福の形相と原因を理解しました。今度は精神の視線を転じなさい。そうすれば，私が約束した真の至福がただちに見えてくるでしょう。」
（ボエティウス）　私は言った。「もちろん，盲人にだって一目瞭然です。少し前に偽りの至福の原因を説明しようとされたとき十分ご教示くださいましたので。誤解していなければ，人に完全な充足，権力，畏敬性，令名，喜びを与えるものこそが，真の完璧な至福です。私が心底これらのことをきちんと理解したことがお分かりいただけるように［述べますと］，いま挙げたものは全一体なのですから，至福とはそれらのひとつを本当に与えうるものであり，それこそが間違いなく完全な至福であると存じています。」
（哲学）　「おお，私の養い子よ」と彼女は言った。「その所論からそなたが至福であることが分かります。ただし，その所論に加えて，私がこれから言わんとしていることを付け加えることができるのであれば。」
「それは何でしょう」と私は尋ねた。

「地上の死んで滅びていくべきもののうちにこの状態をもたらすものがあると思いますか。」
私は言った。「もちろん，そんなことは思いません。ご教示くださったように，その善よりももっと望ましいものはないのですから。」
（哲学）　彼女は言った。「このように，これらのもの（つまり，世俗の充足や権力の類い）は真の善の類似物であるかのように見えます。そうでないなら，不完全ながら一種の善を死すべき人間たちに与えるかのように見えます。しかし，実際には，それらは本当の完璧な善を与えることはできないのです。」
（ボエティウス）　「同感です」と私は言った。
（哲学）　彼女は言った。「では，そなたはどれが真の至福で，ど

れが人を欺く偽りの至福（つまり，偽装により真の善のように見えるもの）であるかが分かったのですから，今やその真の至福をどこから，そしてどこにおいて求めることができるかを知るべきです。」

「当然ながら，私はそれを聞くのをとても切望し，長いあいだ待ちこがれていました」と私は言った。

彼女は言った。「しかし，私の弟子のプラトンが『ティマイオス』［27c］という書において採っているように，人間はわずかなことにも神の援助を求めなければなりません。ですから，その最高善のありかを見いだすに値しうるためには，そなたはいま何をすべきだと判断しますか。」

（ボエティウス）　私は言った。「もちろん，万物の父に呼びかけるべきだと思います。彼なしには何ごとの始まりも正しく築かれることはないのですから。」

「そのとおりです」と彼女は言って，まもなく次のように歌いはじめた。

9

おお，汝，天地を芽吹かせ創造したる父よ，
汝はこの宇宙をとこしえの秩序にて支配し，
劫初より時が刻みゆくことを命ぜたもうた。
汝自身は静止し不動のままで他の一切のものを動かしたまう。
汝が造りたもうた作品は流動する物質から出来ているが，
これは外部の原因が汝を駆りたてたためではなく，
反発しあうことなく内に備わっている最高善の原型が
汝をして自由に活動せしめた結果である。
汝自身が至高の美であるので，
汝は美しい宇宙を心に描きつつ
その心中の美しい宇宙に似せてこの世界を造りたもうた。
汝は至高の原型から万物を派生させ，
この宇宙を完璧な造りにせんがため
完璧な部分をふんだんにかつ完全に備え持つよう命じたまう。

汝は諸元素を均衡ある数によって結びあわせたまう。
冷たきものは熱きものと，
乾は湿と調和せねばならぬ。

火は清浄なものであるが，あまりに高く舞い上がりてはならず，
重たくても地は水に没するとき，あまりに地中深くまで沈下してはならない。
汝は三層［神・霊・物］を成す自然の真中に万物を活動させる霊魂を据え，
調和しあう諸物をとおして霊魂をあまねく分け広めたまう。
霊魂は，分かれ広まり，活動をふたつの円［天の赤道と黄道］に集めると，
自己に戻り，深慮を解して，
自己に似せた姿にて天体を回転させる。
汝は同じ原因により霊［人間］と小生命［動物］を引き上げ，
軽やかな馬車に乗せて昇らせ，
彼らを天と地に広めたまう。
彼らが汝の恵み深い掟により汝に帰依するとき，
連れ戻しの火により彼らをふたたび汝がもとに帰天せしめたまう。
ああ，父よ，［人間の］精神にも汝の聖座に昇りてとどまることを認めたまえ。
精神にも善の泉を教え，
光に遭わせて，曇りなき心の眼を汝に注ぐを許したまえ。
この世の苦しみの重荷と迷妄とを追い散らし，うち破りたまえ。
汝の瑞光により輝きたまえ。
汝は燿であり，温順な人々には穏やかな安らぎである。
汝は始源にして［至福への］同行者，案内者，本道，終着であり，
汝に目を向けることこそ我らが目的である。

十

そなたはどれが不完全な善の形相で，どれが完全な善の形相であるかを見たのだから，私の考えでは今やこの完全な至福はどこに存在するかを示すのが順当です。私が思うには，まず少し前に定義したような種類の善（つまり，最高の善）が諸物の本性のうちに見いだしうるかどうかを究明して見きわめねばなりません。というのも，実際には無いものを幻想して思いちがいをしたり，私たちに託されているものの実態から乖離したりしてはならないからです。ともかく，否定しえないのは，そのような善が存在し，しかもまさしくありとあらゆる善の源泉として存在しているということです。なぜなら，不完全と呼ば

れるものはすべて完全性，あるいは完全な事物，の減耗のゆえに不完全と認められるのだから，どの類のものにおいてであれ，もしも不完全なものがあれば，その類においては完全なものもあるに相違ないということになるからです。事実，完全性が失われれば，だれにも不完全と呼ばれるものがどこから生じるのか考えることも論じることもできません。そもそも万物の本性は減耗したものや不完全なものに始源を持つのではなく，完全無欠のものから生じて，やがて劣化して末梢的なものや無益で実りのないものになってしまうものです。しかし，そうなっても，少し前に示したように，脆く空しく不完全な至福が存在するのであれば，本物で安定的で完全な至福も存在していることは疑う余地がありません。」

（ボエティウス）「その結論は手堅くかつ真実です」と私は言った。

（哲学） 彼女は言った。「では，この至福はどなたのうちに存在するのか考えてみなさい。人々の広範な同意と考察により，万物の支配者である神は善であると証明され承認されています。何も神にまさるものは考えられないから，何ものよりもまさっている神が善であることは疑いえません。理性が示すように，神は善であるので，完全な善は神のうちに存在すると証明されることは必定です。なぜなら，もしも神がそのようなものでないならば，彼は万物の支配者たることはありえないのですから。なぜなら，自分のうちに完全な善を所有しているものがあれば，それは神よりも価値があるはずであり，神に先行して神よりも古くから存在していたように思われるはずですから。なぜなら，すでに明示したように，すべて完全なものが不完全なものに先行するのですから。議論が際限なく続かないように，最高の神は最高の完全な善にみちていると認めなければなりません。ところで，確証したように，最高の善は真の至福です。ですから，必ずや，真の至福は最高の神のうちに存するということになります。」

（ボエティウス） 私は言った。「よく分かります。どのような反論のしようもありません。」

彼女は言った。「さて，今度は私が述べたこと，つまり，最高の神は最高の善にみちているということが，周到にかつ手落ちなく証明されうることを理解してください。」

「どのように［証明されるの］ですか」と私は尋ねた。

彼女は言った。「そなたは万物の支配者は，彼がみちていると証明されている最高の善を彼の外部から得たのだとかりそめにも思いま

すか。また，自分のうちに至福を所有している神自身と，神のうちにある至福とは，実体が異質であると考えますか。もしも神は彼の外部から善を受け取ったと思うのであれば，その善を神に与えたもののほうが神よりも価値があると思うことも可能です。しかし，当然ながら，はっきり認めますが，神は何ものよりも卓越した価値があります。もしもその善が彼のうちにもともと存在してはいるが，彼とは異質であると妄想するのならば，万物の支配者たる神に関して論じているのですから，［神と，異質の善という］これら異質なもの同士をだれが結合したのですか。こじつけうるものはこじつけてみるがよろしい。最後に，よく理解してほしいのですが，あるものが別の事物と異質であれば，そのものと別の事物——異質であるとして区別される事物——とは同一ではありません。だから，その本性が最高の善とは異質であるものは最高の善ではないということになります。しかし，何ものよりも価値がある神に関してそのように考えるのは呪われるべき大罪です。そもそも，あらゆるものに関して，それらの本性のほうが始源よりも優れているということはついぞありえないのですから。かくして，真実に基づいて推論すれば，あらゆるものの始源はその実体においても最高の善である，と結論できます。

「おっしゃったことは真実です」と私は言った。

（哲学） 「ところで，すでに認めたように，最高の善は至福です」と彼女は言った。

「そのとおりです」と私は言った。

彼女は言った。「では必然的に，最高の善は神である，とはっきり認めざるをえませんか。」

私は言った。「もちろんです。私は提示された議論に対し否定も反論もできません。それが強固な前提から生じたことがよく分かりますので。」

彼女は言った。「今度は上のことは，互いに異質な善は二つとありえない，ということによって，次のように一層はっきりと証明されることに注目なさい。すなわち，相互に異質な［二つの］善においては，一方は他方と異なり，それぞれ相手に対し欠けているところがあるので，どちらも完全ではありえない。しかるに，明白なように，完全でないものは最高ではない。ゆえに，最高の善であるものはけっして［他のものと］異質ではありえない。しかるに，すでに結論したごとく，至福と神とは最高の善である。ゆえに，必然的に，最高の至福は最高

の神性［つまり，神］である，という次第だからです。」
　私は言った。「これ以上の真実も，これ以上に確実な推論もありません。また，神に関してこれ以上ふさわしいことは結論できません。」
　（哲学）　彼女は言った。「以上のことに加えて，幾何学者たちが命題を示したとき既証の事実からいわゆる系とか演繹命題をひきだすのが常であるように，派生命題，もしくは副産物，として次のことをそなたに贈りましょう。すなわち，至福を得ることによって人は至福になるのですが，至福とは神性であるので，このことから明らかなように，神性を得ることによって人は至福になります。ちょうど正義を得ることによって正義の人になり，哲理を得ることによって哲人になるのと同様な理由で，神性を得たとき人は神になるのです。したがって，至福な人はどの人もみなすべて神なのです。もちろん，神は本来ただ一神のみですが，神性を分け与えられることによって多くの神が生まれるのであり，何ものもそれを妨げたり阻んだりはしません。」
　私は言った。「お好みの呼び方が派生命題であれ，系であれ，副産物であれ，演繹命題であれ，おっしゃったことは美しく貴重なことです。」
　彼女は言った。「実は，最も美しいのは，理性により前述のことに加えられるべき以下のことです。」
　「それは何ですか」と私は言った。
　彼女は言った。「至福は多くのものを含んでいるように見えるので，次のことを見きわめねばなりません。すなわち，これらのものは異なった部位とか部分として至福という，いわば，一つの身体を組みたて構成しているのか，それとも，これらのうちのあるものがそれ自体で至福の実体を成し，残りのすべては至福に連係し直結している（つまり，多くのうちの主要部として）にすぎないのか，ということです。」
　私は言った。「おっしゃっていることを私にはっきりと分からせ，また，以前おっしゃったことを思い出させてください。」
　彼女は言った。「至福は善であると判断しませんでしたか。」
　「はい，確かに。しかも，最高の善です」と私は言った。
　彼女は言った。「では，善は至福を成すので，［至福のひとつとして］善を先ほど列挙したものに加えてください。なぜなら，至福は最高の充足でもあり，また，最高の権力，最高の尊敬，最高の栄誉つまり高名，最高の快楽でもあると考えられますから。さて，これらすべて，つまり，充足や権力などは，至福の部分なのでしょうか，それとも，

最高の善がそれらの主要部に置かれていて，これらは最高の善に関わりがあり結びついているものでしょうか。」
（ボエティウス） 私は言った。「目指そうとなさっていることはよく分かりますが，あなたがお示しくださるのを聞きたく思います。」
（哲学） 彼女は言った。「この問題は次のように解決なさい。もしもこれらすべてのものが至福の部分であったならば，それらは互いに異質であるはずです。ひとつの身体を構成する部位あるいは部分の性質はそのよう［に異質］なのですから。」
「はい，これらすべてのものが全一体であることはすでに示されたとおりです」と私は言った。
彼女は言った。「では，これらは部分ではありません。もしそうならば，至福はただ一つの部分だ
けから構成されているように見えることになりますが，そういうことはありえません。」
「それは疑いえません。しかし，私が期待しているのは問題の残りを聞くことです」と私は言った。
彼女は言った。「［善以外の］ほかのすべてのものが善に関わりがあり結びついていることは明白です。充足が求められるのは善だと思われているからであり，権力が求められるのも善だと考えられているからです。尊敬，高名，および快楽についても同じことが考えられ推論されます。したがって，最高の善こそが切望されるものの一切であり原因なのです。それゆえ，善あるいは善の類似物をそのうちに含まないものはけっして切望されたり求められたりはしません。逆に，本性的に善でないものでも，善であると思われれば，真の善であるかのように切望されます。したがって，求められるすべてのものの究極的目的であり原因であるのは善性であると考えるのが本筋です。
ところで，人々が何であれ求めるとき，その原因となっているものこそが最も切望されているものであると思われます。例えば，健康のために乗馬をしようとするのであれば，切望されているのは乗馬という運動よりも，むしろその結果としての健康です。このように，一切のものは善のゆえに求められるのですから，それら一切のものは人々から善以上に切望されているというわけではありません。ところで，すでに認めたように，一切のものは至福のゆえに切望されるのですから，求められ切望されているのはただ至福のみであるということになります。以上のことから，善と至福とは全一にして同じ実体であると

いうことがはっきりと示されます。」
「その点に関してどのように異を唱えうるか考えようもありません」と私は言った。
「ところで, 我々の示したところでは, 神と真の至福は全一体です。」
「そのとおりです」と私は言った。
「かくして，次のようにきっぱりと結論できます。すなわち，神の実体は善のうちにあるのであり，他のどこにも存在しない，と。」

10

さあ，みな集って来るがよい。
世俗の偽りの喜びに心を占められ
よこしまな鎖に捕らわれ束縛されている人々よ。
ここには心労からの安息があり，
ここにはどっしりとした穏やかな安らぎの港がある。
不幸な人々に開かれた避難所はここだけなのだ。
(注釈　つまり，世俗の愛着に捕らわれ迷っている人々よ，
さあ，この最高の善，すなわち神のもとに来れ。
神は彼のもとに来るものに避難所になりたまう。)
(本文)　タグス河がその砂金によって与えるすべてのものも
ヘルムス河がその赤金の岸によって与えるすべてのものも
熱帯近くのインダス河がとりまぜて与える白い宝石も緑の宝石も
人の精神の眼を晴らせはせず，
むしろ心を昏盲のまま無明の中に閉じこめる。
[それというのも］この世で人を喜ばせ精神を興奮させ
感動させるものはすべて
深い地底の洞窟ではぐくまれたものだからだ。
だが，威耀は天を支配し，天に力を与え，
魂が無明に転落するのを救う。
(至福の）光明を知りえたものは言うであろう。
太陽の陰りなき光線も眩しくはない，と。」

十一

（ボエティウス）　「同感です。以上のことはすべてきわめて手堅い推論によって強固に結びつけられています」と私は言った。

彼女は言った。「善とは何かということが分かれば，どれほどの評価をしますか。」
「尽きることのない賛辞をもって評価します。もしも善なる神をも知ることになるのであれば」と私は言った。
彼女は言った。「正しく推論してそれを示しましょう。少し前の結論が最初のとおりに［今も］認められてさえいるならば。」
（ボエティウス） 私は言った。「認められています。」（すなわち，私は哲学が先に述べた結論を認めている。）
彼女は言った。「私が示したのは次のようなことではなかったですか。多くの人々によって求められているものは，それぞれ互いに異質であるので，真の善でも完全な善でもない。また，それらは互いに欠けているところがあるので，完全無欠な善をもたらす力を持ってもいない。ところが，寄り集まって単一の形相および単一の作用を帯びれば，そのとき初めてそれらは真の善になる。その結果，充足であるものは，とりもなおさず権力であり，同時に，尊敬，高名，喜びでもある。もしもこれらすべてが全一体でないならば，それらは求められたり切望されたりするものの数に含まれうる性質を具備していない。」
（ボエティウス） 「そのように示されました。しかも，それに関しては疑いはありえません」と私は言った。
（哲学） 彼女は言った。「では，異質であるときは善でなく，一になりはじめると善になるのだから，万物が善になるのは一を獲得することによってであるということになりませんか。」
「そのように思われます」と私は言った。
彼女は言った。「ところで，およそ善であるものすべてに関し，それが善であるのは善を担っているがゆえであると認めますか，認めませんか。」
「認めます」と私は言った。
彼女は言った。「では，一と善とは同じであるということも同じく認めなければなりません。なぜなら，本性的に結果が異質であるというわけでないのであれば，そのらのもの同士は必然的に実体が同じでなければならないのですから。」
「それは否定できません」と私は言った。
彼女は言った。「すべて存在するものは一である限りにおいて実在と実体を有するが，一であることをやめると必然的に死滅し崩壊するということを知っていますか。」

「どのような次第でですか」と私は言った。
彼女は言った。「動物におけるように，魂と肉体とが一に結合されそのまま維持されているとき，それは動物と呼ばれますが，一方が他方から分離して統一が破られれば，明らかにそれは亡きがらであり，もはや動物ではありません。また，人の身体も各部位が結合されて単一の形相を維持している間は，明瞭に人間の姿ですが，身体の部分が切断されたり切り取られたりして統一が破られれば，身体はそれまでそうであったものではなくなります。すべてのものに関して同様に［考察を］続けたければ，疑いもなく，あらゆるものは一である限りにおいて存在し，一であることをやめれば死に滅びるということが分かるはずです。」
（ボエティウス）「多くのものを考察するに，それに相違ないことが納得されます」と私は言った。
彼女は言った。「では，本性のままに生きているかぎり，その生存の欲求や願望を捨てて死滅や崩壊を願うものがあるでしょうか。」
私は言った。「動物を考察するに，しようという意志とやめようという意志とを必ず本性的に持っているので，外から強制されるのでなければ，どの動物も生存し生きながらえようという意志を放棄したり軽視したりはしないし，また，自ら進んで死に急ぎもしません。どの動物も自分を守り自己の命を救おうと努め，死や破滅を避けています。しかし，草や木に関しては疑わしく思います。つまり，（動物が持っているような，願望をかなえるのに役立つ本性的な活動力も）知覚能力のある魂も持っていないものに関しては，（生息し生きながらえようという願望を持っているのかどうか）疑問に思います。」
彼女は言った。「無論，それは疑うにはおよびません。草や木を観察してごらんなさい。それらが最初に生え出てくるのは自分に好適な場所，つまり，本性的な生命力により持ちこたえうるかぎりは，すぐに枯死したり立ち枯れたりしない場所です。あるものは野に生え，あるものは山に生え，あるものは沼地に生え，また，岩場にしがみつくものも，砂地に群棲するものもあります。ところが，それらを無理やり別の場所に移植しようとすれば，枯れてしまいます。これは自然が万物に好ましいものを与えて，それらに生息し生存する力があるかぎり，枯死させないよう努めているからです。植物はあたかも口を地中に挿し入れているかのように，根から養分を吸い上げ，髄を通して樹肉や樹皮に行きわたらせますが，これをどう説明しますか。また，髄

のように柔らかな部分は常に内部に隠され堅い樹肉によって守られて，樹皮は天候不順にそなえ天災に堪えうる防御として一番外側に置かれていますが，これをどう説明しますか。自然の配慮がいかに大きいかよく分かることに，万物は種子を増やすことによって再生・増殖するではありませんか。さらに，だれでも知っているとおり，それらはまさに礎となり産出機構となって，しばし生きぬくだけでなく，繁殖により末代までも生きのびるのです。

同様に，魂がないと思われているものもことごとく自分のものを（つまり，存在・保存するうえで自らの本性に適合するものを）維持しようとするではありませんか。そうでなければどうして，炎が軽く上に昇り，地が重く下に沈むのですか。その方向と運動がそれぞれに適しているのでないならば
[なぜそうなりますか]。事実，すべてのものは自己に合致し適合しているものを維持しているのであり，対立し敵であるものがそれらを破壊するのです。石のように硬いものはその各部を堅くしっかりと固め合わせて自らを守り，容易に割れて粉々になることのないように抵抗します。水や空気のように無定形の流動体は容易に分かれ自分を分断分割するものに席を譲りはするけれども，追い出された場所に瞬時にしてふたたび戻ります。これに対し，［四元素の残りの］火は一切の分割を拒否して，舞い上がります。

今ここでは認識能力のある魂の意図的行為ではなく，次のような本性的な合目的運動だけを扱いましょう。例えば，私たちは摂取した食物を何も考えずに飲みこみ，寝ていて分からないにもかかわらず睡眠中も呼吸します。この理由は，生物において，生存と存在に関わる自愛は，魂の意志から生じるのではなく，本性として初めから持って生まれているものだからです。その証拠に，強制的な原因があれば，[本能という]本性の恐れる死を意志が望み受け入れるという場合が多々あるではありませんか（つまり，何らかの原因で強制されれば，本性はひどく憎み恐れていても，意志が死を望み受容する)。また，ときとして逆の場合を見ることもあるではありませんか。すなわち，本性がいつも望み求めるもの，つまり，生殖，を意志が避け抑えるということです。死すべきものはただ生殖によってのみ永続性が不動となり維持されるのに。このような次第で，すべてのものが自分自身に対して持っている愛着とか自愛は心的活動からではなく，本性的な合目的運動から生じるのです。神の摂理は彼の創造物に生存し永続するための

偉大な動因を与えました。だから，それによって被造物は本性的に自分の生命をできるかぎり永く望むのです。かくして，まったく疑問の余地なく，万物は，いかなる場所に存在していようと，本性的に確実で安定した永続的生存を求め，破滅を避けるのです。」

（ボエティウス）「以前には不確かだったものが今では疑いなくはっきりと見えるようになったことを認めます」と私は言った。

（哲学）彼女は言った。「ところで，生存と永続を望むものは一であることを望みます。一が破られれば，何ものにとっても存在そのものが消滅してしまいますから。」

「そのとおりです」と私は言った。

「では，万物は一であることを望みますか」と彼女は言った。

「同意します」と私は言った。

「私が示したところでは，一であることは，すなわち善でした」と彼女は言った。

（ボエティウス）「はい，確かに」と私は言った。

彼女は言った。「では，万物は善たることを求めることになるので，善は次のように定義できます。善とは万人が望むところのものである，と。」

私は言った。「これ以上の真実は考えられません。というのも，万物が，一というそれら自身の頭を奪われて無に逆戻りし支配者もなく浮遊するのではなく，何かあるものへと向かって急いでいるのであれば，そのものはあらゆる善のうちの最高の善であるにちがいないからです。」

（哲学）すると彼女は次のように言った。「私の養い子よ，そなたのことをとてもうれしく思います。真実の核心（つまり，的）をよくぞ心に刻みました。ところで，このうちにはそなたが少し前に知らないと言ったことが示されているのです。」

「何のことですか」と私は言った。

彼女は言った。「そなたが分からなかった，万物の目的は何であるかということです。言うまでもなく，それは万人が望むものです。推論し理解したように，善が万物によって望まれているものなのですから，必然的に，善こそが万物の究極的目的であると認めなければならないのです。

沈思して真理を求めるのであれば，
脇道に迷いこむのを望まないのであれば，
内なる眼の光を自己の内部に巡らして熟考し，
とりとめのない精神の動きをとり集め
中心円へと凝集せよ。
そして，己が心に教えよ，
外部から［得ようと］あくせく求めている一切のものは
すべて己が宝庫のうちに納められ隠されている，と。
そうすれば，それまで誤謬の黒雲に覆われていたものが
太陽神フィーバスが照るよりももっと明るく輝くであろう。
(注釈　自分の精神の内部に真理の深い鉱床を求めるならば，
そして，真理からはずれる偽りの命題に誤認する迷うまいと思うならば，
自己の内部にて事物の本性と特質を熟慮検討し，
さらに，結論する前に吟味してふたたび己が精神を熟考検討せよ。
そして，魂には，真理は外物の中にあると幻想するのをやめ，
真理は，もともと組み込まれている本性により，
自分自身の内に備わっていることを教えよ。
そうすれば，太陽が外的な［身体の］視覚に見える以上にはっきりと誤解の闇が［精神の］理解の視覚に見えるであろう。)
というのも，肉体は忘却という重みを担ってはいるけれども，
認識の明晰さを精神からすべて追い出したわけではないからである。
事実，真理の種子は心のうちにとどまり貼りついていて，
薫陶という春風の息吹により刺激を受け目覚めるのだ。
もしも理性のはぐくんだものが心の底に潜んで生き残っていなかったならば，
どうして，尋ねられたとき，真意をおのずと判断できるのか。
(つまり，もしも真理が精神の奥深くに生き残っていなくて，
真理の根が本性的資質のうちに潜み閉じこめられていなかったならば，
どうして，尋ねられたことの真の理由を判断できるであろうか。)
ミューズの歌とプラトンの教えとが真理であるならば，
学習するとは想起することにしかず，
忘れたことを思い出すがごとし。」

十二

このとき私は言った。「私もプラトンとまったく同意見です。こういうことを想起させてくださったのはこれで二度目です。つまり，最初は魂が肉体から伝染病を移されて記憶を失ったとき，いま一度は悲しみの重荷と重圧のため錯乱して記憶を失ったときです。」

すると彼女はこのように言った。「そなたが認めたことをまず最初に考察すれば，分からないと言っていたことも遠からず想起するでしょう。」

「何のことですか」と私は言った。

「どのような統治力によって宇宙は支配されているか，ということです」と彼女は言った。

私は言った。「よく覚えています。それが分からなかったことを認めます。言わんとされているのが何であるか今では，おぼろげながら，理解できますが，あなた自身からもっとはっきりとお聞きしたく思います。」

彼女は言った。「宇宙が神によって支配されていることを疑ってはならないと少し前そなたは考えていました。」

私は言った。「はい，今も疑っていませんし，疑うべきだとはけっして思わないでしょう（すなわち，神がこの宇宙を支配していることをよく知っている）。いかなる理由でそのように信じるに至ったか手短にお答えしましょう。この宇宙は実に多くの異質的・背反的な諸部分から成り立っているので，もしも一者がましまさず，かくも多くの異質な事物を結合したまわなかったならば，宇宙は単一の形相へとまとめられはしなかったでしょう。そして，それらの本性は異質で互いに反目しあっているので，もしも一者がましまさず，結合し縛りあわせたものを保持したまわなかったならば，結合されていたものは分解・解体するにちがいありません。さらに，もしも一者がましまさず，自らは不動なまま，多種多様な運行を秩序づけ統御したまわなかったならば，自然の一定した秩序によって場所・時間・事象・空間・性質におけるかくも整然たる運行がもたらされることはないでしょう。ですから，万物を創造し設置したのが何者であれ，それを私は《神》と呼びます。この語は人々によく知られていますので。」

このとき彼女は言った。「そなたの捉え方がそのようであるのなら，私は微々たることしかしなくても，そなたは至福にみちて安全無事に祖国をふたたび見ることになると思います。それはともかく，これま

で述べてきたことを考えてみましょう。私が述べたところでは，充足は至福のうちに数えられはしませんでしたか。そして，神がその至福であると意見が一致しませんでしたか。」
「はい，確かに」と私は言った。
彼女は言った。「そして，この宇宙を支配するのに神は外部からの助けを必要としない，ということも[意見が一致しました]。もしも助けを必要としたのであったならば，彼は完全な充足を獲得してはいないことになりますから。」
「はい，必然的にそうなります」と私は言った。
「では，彼は自分ひとりで万物を秩序づけるのですか」と彼女は言った。
「それは否定できません」と私は言った。
「すでに示しましたが，神は善です。」
「よく覚えています」と私は言った。
彼女は言った。「このように，神は万物を善によって秩序づけるのです。なぜなら，私たちが同意見であったとおり，彼は善であり，かつ万物を自分ひとりで支配しているのですから。彼は鍵であり舵でもあり，彼によってこの宇宙という大機構が崩れることなく安定的に維持されているのです。」
「まったく同意見です。薄弱な想像ではありますが，そのようにおっしゃるだろうと少し前から予感しておりました」と私は言った。
彼女は言った。「信用します。私が見うけるに，そなたは真の善を考察すべく以前より真剣に眼を向けていますから。それはともかく，これから私が述べようとしていることも熟考すれば先ほどのことに劣らず明らかです。」
「それは何ですか」と私は尋ねた。
彼女は言った。「人々が正しく考えているとおり，神は善という鍵によって万物を支配し，万物は，すでに教示したごとく，本性的に備わっている合目的運動によって善に至らんと急いでいます。ですから，だれにも疑いえないように，万物は自ら進んで支配され，さらに，支配者である王に恭順し従うかのように，万物は統御者の御意志へと自らの意志を換えます。」
私は言った。「必然的にそのとおりです。異質な諸部分が反発しあうのを軛で抑圧するばかりで，従順なものを救うことがないなら，王国は至福であるようには見えないはずですから。」

彼女は言った。「こういう次第で，本性を有するもので，神に逆らおうとするものは皆無です。」
「はい」と私は言った。
「神に反抗しようとしたとしても，私たちが認めたように，至福の所有権により万能である神に対し，結局，為しうることがあるでしょうか。」
「もちろん，まったく無益です」と私は言った。
彼女は言った。「では，この最高の善に反抗できるものも反抗しようとするものも皆無です。」
「そうであると信じます」と私は言った。
彼女は言った。「では，それは，万物を強力に支配し，かつ優しく統御する，最高の善ですか。」
このとき私は次のように言った。「私はうれしくなってきました。結論したり証明なさる議論の目的や論旨だけでなく，それ以上に，用いられる言葉そのものが私をとても喜ばせるのです。だから，結局は，これまで偉大なものをなじったことのある愚者どもは恥じいるべきです（つまり，われわれ愚者は神の支配に関することを不埒にも非難するけれども，自分自身を恥ずべきである）。例えば，私は，神は人間の営みだけは拒み関わりあわない，などと言ってしまいました。」
（哲学）　彼女は言った。「[神の支配に関しては］そなたもこの神話を詩人から聞いたことがあるでしょう。巨人族が神々（goddis）に反逆して天を攻撃しましたが，神（God）の慈悲深い力は［神々を救い］至当にも巨人族を処分しました（つまり，至当なことながら，巨人族を滅ぼした）。ところで，先の諸議論を突き合わせてみようとは思いませんか。ことによるとそのような衝突から真理の美しい火花が発生するかもしれませんから。」
「お好きなようにどうぞ」と私は言った。
彼女は言った。「そなたは神は万能ではないと思いますか。疑うものはいないのですが。」
「もちろん，正気であれば，だれも疑いません」と私は言った。
彼女は言った。「しかし，万能ではあっても，彼に為しえないことがありはしませんか。」
「ありません」と私は言った。
「神は悪を為しうるのですか」と彼女は言った。
「いいえ，けっして」と私は言った。

彼女は言った。「ですから，悪は無なのです。万事を為しうる神が，悪は為しえないのですから。」

私は言った。「あなたは私をからかっていらっしゃるのですか。そうでなければ，私を弄ぶか，たぶらかすかしておられるのですか。議論による迷路を考えだして抜け出せないほど絡みあわせ，あるときは出口から入り，またあるときは入口から出てこられるのですか。あなたは，言葉を織りなすことによって，神の単一性に関する，いわば，優美な循環的議論，つまり堂々巡り，を作りあげているのではありませんか。というのも，少し前に至福から始めたとき，それは最高の善であり，それは神のうちにあると言われました。次いで，神自身が最高の善であり，神こそが豊潤な至福であると言われました。そして，それと矛盾しない贈り物をくださいました。つまり，なんぴとも至福を得て神にならないかぎり至福ではない，ということです。それからまた，善の形相は神と至福との実体と同じであるとも言われました。そして，一こそが万物の本性が求め切望する善であると言われました。また，議論において神は善性という統治力によって宇宙の万物を支配することを証明され，万物は神に従うと言われ，ついには，悪という本性は無であると言われました。［悪が無であるならば，善に関する議論に戻ることになる（四巻参照）。］しかも，あなたは以上のことを外部から取られた議論ではなく，連鎖的に，かつ，よく知られている証明によって示されました。しかも，その証明はそれぞれ互いに信憑性と整合性をひきつけあうものでした。」

すると彼女はこのように言った。「私はそなたをからかっても弄んでもたぶらかしてもいません。少し前に祈った神から授かって，何ものにもまさって最も重大なことを示したのです。というのも，神の本質的な姿は，無縁な外部のものに変わることも，異物を自分のうちに受け入れることもなく，パルメニデスが神的実体に関してギリシャ語で述べたとおりなのですから。彼が言うには，神的実体は，自らは不動のままでいて，宇宙を回転させ万物の循環的運動を巡りかえらせるのです。（つまり，自分自身は動かず，他のすべてのものを動かす。）ところで，私の持ち出した議論が，論じられている枠の外部から取られたのではなく，その枠内で得られたものであったことをそなたは不思議に思うにはおよびません。なぜなら，そなたもプラトンの教えから学んだように，言葉はそれが表すものと必ず従兄弟［つまり，類似物］でなければならないのですから。

12

善のきらめく泉を見ることのできる人は幸いである。
この世の重い絆から自らを解放することのできる人は幸いである。
かつてトラキアの詩人オルフェウスは妻の死をいたく悲しみ，
嘆きの歌により森をも走り動かせ，
河をも流れを止まらせた。
雄鹿も雌鹿も彼の歌を聞かんがために恐れを忘れ
獰猛なライオンの傍らに座り，
兎も犬を恐れず，犬は彼の歌を喜んだ。
[しかし] 妻への炎のような愛は彼の胸の内を燃え上がらせ，
すべてを征服する歌も
主人のオルフェウスを慰めることはできなかった。
彼はつれなき天の神々に託ちつつ黄泉の国に赴き
甘い歌に重ねて琴を奏で
女神である母親のカリオペのあらたかな泉から
譲りうけ掬い取ったすべてを涙ながらに歌い語った。
彼は嘆きゆえに，能うすべてをこめて，
そして，愛のすべてをこめて歌った。
愛は悲しみを倍加し，彼に味方し，彼を教えた。
彼は地獄をも動かした。
甘美な祈りにより冥府の諸王に解放を求め願った，
妻を自分のもとに戻したまえと。
冥土の番犬，三頭のケルベロスは未知なる歌にとらわれ感嘆した。
怒りと罪の復讐とを司り，
呵責により魂を苦しめ脅えさせる三人の女神たちも，
嘆き悲しみ，哀れみから涙する。
回転する[火の]車もイクシオンの頭を責めつけはしなかった。
絶えざる渇きの狂おしさにさいなまれていたタンタロスも
あふれる水を飲もうともしない。
ティテュオスの胃をも肝臓をもむさぼり食う禿鷹なる鳥も
彼の歌に満喫してもはやむさぼりも裂きもしない。
ついに冥府の裁き主なる王も哀れさに動かされて叫んだ。
『われわれは負けた。オルフェウスに妻を与え連れ帰らせよう。
彼は美しい歌と調べにより彼女をあがなったのだ。

しかし，これには決まりを設け，贈り物には契約を取り決めよう。
すなわち，もしも彼が黄泉の国から出る前に後ろを振り向いたならば，
彼の妻はわれわれのもとに戻るのだ。』
しかし，何が愛するものたちに決まりを設けうるであろう。
愛は，人間が設けるどんな決まりよりも偉大で強力な決まりなのだから。
ああ，オルフェウスと彼の妻が夜のほとんど終わり
（つまり，黄泉の国の境）にまで来たとき，
オルフェウスは振り向いて妻のエウリディケを見てしまい，
彼女を失い，［彼女は］死んだ。
この話は自分の精神を最高の白日（つまり，最高の善のきらめき）に
導こうと切望し求める人々全員にも当てはまる。
誘惑に負け，目を地獄の深みに向けるものは，
つまり，世俗の事柄に心を向けるものは，
地獄，つまり，この世の卑しいものを覗いている間に，
天の貴き善からひきだしたすべてを失ってしまうのである。」

第三巻終わる。

第四巻始まる。

一

以上のことを哲学は，厳粛な表情で，そして荘重な言葉づかいで，やさしく心地よく歌った。彼女はまだ何かほかのことを言おうとしていたが，このとき私は，心に巣くっていた悲しみと嘆きを完全に忘れてはいなかったので，彼女の意図をさえぎって言った。「ああ，あなたは真の光に案内してくださいます。これまでおっしゃったことは，神のような洞察力と議論とにより明快にして自明ですので，反論のしようもありません。おっしゃったことは，降りかかった不幸の悲しみのためしばらく忘れていましたが，私にはまったく知らないものだったわけではありません。しかし，私の悲しみの大きな原因は特に次のことなのです。すなわち，万物の支配者は善であるのに，はたして悪はありうるのか，あるいは悪は罰せられないでいるのか，ということです。そうとすれば，あなた自身きっとお考えのように，これは何と仰天に値することでしょう。さらに，これにもっと仰天すべきことが加わります。大悪が支配し富にあふれて栄えているのに，徳は褒賞を受けないのみならず，それどころか大悪人の足下に投げられ踏みつけられ，徳が非道な極悪人の身代わりに懲罰を受けているのです。こともあろうに全知全能で善しか欲しない神の国においてそのようなことがなされるとは，いくら驚いても嘆いてもなお足ることはありえません。」

すると彼女はこのように言った。「たしかに，もしもそなたが思っているとおりならば，それはとてつもなく大変な驚異・驚愕であり，怪物よりもはるかに恐ろしいでしょう。つまり，もしもかくも偉大な家長と執事がいてきちんと整えられている家で，汚れた粗末な容器が大事にされ重宝され，貴重な容器が汚され粗末にされているのであるならば。しかし，実はそうではありません。もしも少し前に結論したことが破棄されずにそのまま保持されているならば，そなたには次のことが分かってくるでしょう。すなわち，私が話している神の御国においては，神のお力により，善人は常に強く悪人は常に蔑まれ無力であり，悪には必ず罰があり徳には褒賞があり，善人には常に至福が訪れ悪人には常に不幸が訪れる。ほかにも色々このようなことが分かり，そなたは嘆くのをやめ，盤石の堅固さを得て逞しくなるでしょう。私が先に示したので，そなたは真の至福の形相を見，至福はどなたのう

ちにあるかが分かったのですから，まず提示しておく必要があると思われることをすべて論じ，［そののち］そなたをそなた自身の家に連れ戻す道を示しましょう。また，高く飛翔できるようにそなたの精神に翼を付けてあげましょう。そうすれば，あらゆる苦難を払い捨てて，私の導きにより私の道を辿り私の橇に乗り，安全無事にそなたの国に帰国できるのです。

1

私には高き天をも越える速い翼がある。
速い精神がこの翼をまとうとき，
精神は厭わしい地球を見くだし，大気の球を飛び越え，
雲を背後に見，
炎の高所——高速の天層の動きにより熱くなっている——を通り過ぎ，
星を抱く館に昇り，太陽神フィーバスと道をともにし，
老いて冷えた土星サトゥルヌスに同行する。
精神はきらめく星に仕える騎士になると
(つまり，精神が神に関する真の知識に至らんとして
真実を求めて神の騎士になるとき)，
精神は星の軌道に従い，明るい夜が彩られているすべての場所を通る
(つまり，雲のない夜，
雲のない夜には天はさまざまな姿の星で彩られているように見えるので)。
精神はその場所に堪能すると
いや果ての天を去り，高速の天層の上部に疾く戻り，
威光，すなわち，神の畏怖すべき光明，により完璧となる。
そこでは，王のうちの王が彼の権力の笏を持ち，宇宙の支配を調整し，
万物の輝ける裁き主が，自らは不動のまま，
速い馬車（つまり，太陽の循環運動）を支配する。
もしもこの道がそなたを導き戻し，そこに連れて行くならば，
そのときそなたは言うであろう，
『こここそ私が求めていた国だ。
失念していたが，今やはっきりと思い出した。
ここで私は生まれた。
ここに私は足場を固めよう，
ここに私は永住しよう』と。

捨ててきた昏冥の娑婆を見たいならば見えるであろう，
極悪の暴君は，今は人々が哀れにも恐れているが，
そのうるわしの国からは追放されることになるのが。」

二

このとき私は次のように言った。「いとも高邁なことを約束してくださるのは驚くべきことだと思います。約束なさったことをきちんと実行できるだろうかと疑うこともけっしてありません。ただこれだけお願いしたいのです。感激している私に早くそれらのことを話してほしいのです。」

彼女は言った。「まず是非とも認識しなければならないのは，常に善人は力があって強く，悪人は弱くて一切の力を欠いているということです。このことはそれぞれ他方により［二律背反的に］証明され明示されます。というのは，善と悪とは相矛盾する二物なので，もしも善が確固としているならば，悪の弱さが明白になり，もしも悪の脆さがはっきりと分かれば，善の確固さが分かるからです。私の論旨の信憑性がより確実となり，より増大するように，私は一方の道も他方の道も巡って，意図していることをあるときはこちら側からあるときはあちら側から確証しましょう。

およそ人間の行為を実行に移すものとしては二つのもの（つまり，意志と力）があります。もしもこれら二つのうちの一つが欠ければ，何も達成されえません。意志が欠けていれば，だれもするつもりのないことをしようとはしないし，力が欠けていれば，意志は無為にして無益だからです。それゆえ，獲得したくても，それを獲得できない人を見れば，その人には得るための力が欠けていることは疑いえないでしょう。」

「それは明白であり，どのようにも否定できません」と私は言った。

彼女は言った。「また，したかったことをなしとげた人を見れば，その人にはそれを為す力があることは疑いないでしょう。」

「はい」と私は言った。

「こういうわけで，為しうる事柄に関してはその人は力があるとみなすことが可能です。（すなわち，人が何かをできる限りにおいてその人は力があるとみなされる。）また，できないことに関してはその人は無力であると判断されます。」

「認めます」と私は言った。

彼女は言った。「前の議論において立論し示したのですが，人間の意図する願望は，様々な欲望によって導かれてはいるけれども，すべて至福に至ろうとして忙しく努めているということを覚えていますか。」
「よく覚えています。そう示されました」と私は言った。
彼女は言った。「では，至福こそが人々の求めている善であり，至福が何より求められるとき，善も何より求められ切望されている，ということも思い出しましたか。」
「思い出すまでもありません。いつもしっかりと記憶に刻んでいますから」と私は言った。
彼女は言った。「このように，人はすべて，善人も悪人も願望に違いはなく，善に至ろうと努めているのです。」
「正しい帰結です」と私は言った。
「ところで，確実なことですが，人が善人になるのは善を獲得することによってです」と彼女は言った。
「確かに」と私は言った。
「では，善人はほしいものを手に入れていますか。」
「そのように思われます」と私は言った。
彼女は言った。「さて，もしも悪人が切望している善を得たならば，彼はもはや悪人ではありえません。」
「そのとおりです」と私は言った。
彼女は言った。「このように，両者とも善を切望していながら，善人は善を獲得し，悪人は獲得しないのだから，善人は力があり悪人は無力であるということは疑いありません。」
私は言った。「そのことを疑う人は事物の本質も推論の帰結も洞察することができない人です。」
彼女は言った。「これに加えて，もしも元来目的を同じくするものが二つあって，一方は生受の本性的能力によりその[目的を達成する]ことに努め完遂する，もう一方は本性的能力を行使できず，他方が本性的能力により目的を達成するのを模倣するが，その模倣ぶりは本性にそぐわない仕方であり，本来の目的を果たしてはいないとする。この場合，どちらがより強力だと思いますか。」
「言おうとされていることは推測できますが，もっとはっきりあなた自身からお聞きしたく思います」と私は言った。
彼女は言った。「では，歩行という運動は人間に生れつき備わって

いることは否定しませんか。」
「はい，もちろん」と私は言った。
「歩行という本性的能力が足の機能であることも疑いませんか。」
「疑いません」と私は言った。
彼女は言った。「では，ある人は運動することができて自分の足で歩行し，もう一人は足の本性的機能が欠けていて手で這って進もうとするならば，これら二人のうちのどちらがより強力であると思うのが正しいですか。」
私は言った。「続きを編みあげてください。足の本性的機能により進むことができる人のほうが，できない人より強力であるのは疑うまでもありませんから。」
彼女は言った。「ところで，最高の善を善人も悪人も等しく目指していますが，善人は徳という本性的機能によってそれを求めます。ところが，悪人は色々な世俗のものに対する貪欲心によって善を得ようとしますが，貪欲心は最高の善を得るための本性的機能ではありません。そなたはこのようには考えませんか。」
「いいえ，その結論は私が認めたことから自明です。つまり，善人は必ず力があり，悪人は弱く無力であるということです。」
彼女は言った。「そなたは私［の行き先］に正しく先まわりしていますが，これは，ちょうど生命力が盛りかえし病気と闘っていると気づけば，医者が病人に期待するのが常であるのと同じく，［回復の］診断になります(つまり，哲学はボエティウスに関してそう診断する)。事実，私の見立てではそなたは今では理解できるようになっているので，より濃密で継続的な議論を示しましょう。さあ，考えてごらんなさい。どんなにはっきりと悪人の弱さと不安定さが分かることでしょう。彼らは生受の本性的願望にほとんど駆りたてられているにもかかわらず，本性的願望が導くところに至ることはできません。願望という本性の助けは常に人に先んじ，非常に強力でほとんど逆らいがたいものであるのに，その本性の助けにさえ見捨てられているとすれば，悪人はどう評価すべきでしょうか。ですから，極悪人は何と力に欠けているか，そして何と弱いか考えてもみなさい。(すなわち，渇望されながら達成されなかった欲求が大きければ大きいほど，渇望しながら達成できなかった人間の無力さは一層はなはだしい。それゆえ，哲学は最高の善に関して先のように言うのである。)
悪人たちが求めても達成・獲得できないのは，わずかな報酬やはか

ない気晴らしなのではなく，彼らは万物の神髄を，最高物（つまり，最高の善）を欠いているのです。邪悪者たちは夜も昼も最高の善を獲得しようとあくせくしているけれども，その核心に到達することはありません。善人は最高の善を獲得するので，彼らに力があることははっきりと見てとれます。ちょうど自分の足で歩行しそこから先は行くべき道がない場所にまで行ける人は力があると評価されるのと同様に，望むものすべてを極限まで獲得し達成して，その極限以上には何も望むものがない人は必ずや大いに力があると評価されるはずです。善人に力があることから，悪者たちにはあらゆる力が脱落・欠如しているように思われると結論できます。

なぜ彼らは美徳を捨てて悪徳に従うのでしょう。善を知らないためでしょうか。しかし［もしそうなら］，無知という盲目よりも弱く哀れなものは何があるでしょう。もしもそうでないならば，彼らは何に従うべきかよく知っているけれども，情欲と貪欲のため身をもちくずして道に迷っていることになります。事実，不摂生のため身をもちくずした虚弱な人は，悪徳に抗いえません。ですから，彼らは，自ら進んで善を放棄しているのだということに気づかず，自ら進んで悪徳へと逸れているのではないでしょうか。

かくして，彼らは力あることを放棄するだけでなく，存在することすらもまったく放棄しているのです。なぜなら，あらゆる存在物に共通な目的を放棄するものは，存在することをも放棄するわけですから。ところで，悪人が大部分を占めるのに，悪人は存在しないと言えば，たぶん，不思議に思う人々もいるでしょう。しかし，実はそうなのです。その理由は次のような次第によります。つまり，私は悪人が悪人であることは否定しませんが，彼らが存在すること生存していることは否定し，きっぱりとそう断言します。ちょうど死骸のことを死んだ人とは言ってもけっして人とは呼ばないのと同様に，私は，悪徳者が邪悪であることは認めても，彼らが存在することは絶対に断じて認めません。なぜなら，秩序を維持し本性を保つものは存在するけれども，それに欠けるもの（つまり，本性的な秩序を放棄しているもの）は彼の本性のうちに組み込まれているものをも放棄しているのですから。

ところで，そなたは言うでしょう，悪人は能く行う，と。確かに，私もそれは否定しません。しかし，彼らの暴力は，力からではなく，弱さに由来するのです。なぜなら，彼らは悪事を行っているけれども，もしも善人の形相と行為とのうちにとどまりうるならば，悪事を行う

ことはありえません。暴力そのものが彼らが能わざることを明示しているのです。少し前に推論し証明したとおり，悪は無であり，悪人が能く行うのは悪事だけなのですから，悪人は能わず力も持たないと明確に結論できるのです。そなたにも悪人の暴力という力がどんなものか理解できるように[話すならば]，私は少し前に最高の善よりも強力なものはないと定義しました。」

「そのとおりです」と私は言った。

「最高の善は悪を為すことはできません。」

「はい，けっして」と私は言った。

彼女は言った。「では，人間は万事を為しうると思う人がいますか。」

「狂気でなければ，ひとりもいません」と私は言った。

「しかるに，悪人は悪を為しえます」と彼女は言った。

「はい，為しえぬよう神のしたまわんことを」と私は言った。

彼女は言った。「かくして，善行のみを為しうる方は万事を為すことができ，悪行を為しうる者は万事は為しえないのですから，悪を為す者は力が劣ることは明々白々です。

しかも，この結論を証明すべく，次のことが傍証となります。すなわち，前に示したように，あらゆる力は所望されるべきもののうちに数えられ，しかも，やはり示したように，切望されるべきものはすべて善に，いわば，本性の高等部分に，関わっている。これに対し，悪や大罪を為しうることは善とは関わりえないので，悪は切望されるべき事物のうちには含まれない。しかるに，あらゆる力は切望され所望される。ゆえに，悪人の暴力や行使力が力でないことは明白である。

以上のことから，善は確かに力があり悪人は疑う余地なく無力であることが示されます。また，プラトンの議論が真正にして真実であることも明白になります。プラトン曰く,『賢者のみが望むところを能(よ)く成就し，悪人は気の向くところは常に為しえても望むところ（つまり，最高の善に至ること）を達成する能力は持たぬ』と。悪人は自分が享楽する事物によって願望する善に到達しようとして，好き勝手なことをするけれども，善を得ることも善に到達することもありません。悪徳が至福に達することはないのですから。

2

そなたが見る驕れる王たちは玉座に高く座し，きらめく紫衣に輝き，いかめしい武器に囲まれ，残酷な言葉で威嚇し，

凶暴な心にて威張りちらす。
だが，その虚飾の覆いを矧ぎとるならば，
暴君たちの心は鎖にきつく繋がれているのが見えるであろう。
情欲が満たしがたい毒でもって一面を苦しめ，
いらだちの怒りが，心乱す荒波を沸き上がらせて，精神の他面を苦しめる。
暴君は苦しみに疲れ囚われ，変わりやすい，まやかしの望みに苦しむ。
だから，そなたも見るように，
頭（つまり，暴君）にはかくも多くの専制者がいるのだから，
暴君もかくも多くの邪悪なる支配者に
（つまり，彼を支配する数々の邪悪な悪徳に）屈服し，
望みを果たすことはない。

三

これで，悪人がどんなひどい汚辱に包まれているか，そして善人がどんなに燦然と輝いているかが分かりましたか。このことから明らかなように，けっして善人に褒賞がないためしはなく，けっして悪人に懲罰がないためしはないのです。その理由は次のごとくです。人が行うすべてのことに関して，行う目的こそが当然その褒賞であると思わます。例えば，競技場，すなわち競走路，で月桂冠を求めて競走するならば，その褒賞は競走の目的である月桂冠です。さて，すでに示したように，至福とはあらゆることが行われる目的としての善のことですから，善こそが人間の諸行為にとってまさしく共通の褒賞として目指されています。しかも，この褒賞は善人から切り放されることはありえません。なぜなら，善を欠けば，当然，だれも善人とは呼ばれないのですから。それゆえ，褒賞は善行の人々を見捨てることはけっしてありません。悪人が善人に対して勝手気ままに凶暴なことをしても，賢者の冠は落ちることも萎れることもありません。外部の悪によって善人の心から彼固有の徳性が取り去さられることもありません。もっとも，外部から取った善を楽しんでいたのならば(すなわち，他人の善をまとっていたのならば)，彼にその善を与えたもの，あるいはだれか別人が，彼からそれを取ることも可能でしょうが。ともかく，だれにとっても本人自身の善性が彼に褒賞を与えるのですから，善人であることをやめたとき初めて褒賞を欠くことになるのです。最後に，あらゆる褒賞が求められるのは，それは善であると人々が思っているか

らなのですから，善を為すことのできる人が褒賞にあずかっていないなどとだれが思うでしょう。では，どのような褒賞によって報われるのでしょうか。言うまでもなく，あらゆる褒賞をも凌ぐ世にも美しく世にも素晴らしい褒賞です。少し前に与えた貴重な系を思い出して，次のように推論なさい。善は至福であるので，明白かつ確実に，あらゆる善人は善であるがゆえに至福となる。そして，至福である人は善であることと一致し相応する。かくして，善人の褒賞とは，白日にも損なわれず，悪にもくすまず，いかなるものの権力にも減らされることのない類いのもの，すなわち，神になることである。

こういう次第（善人はけっして褒賞を欠いているのではないということ）ですから，賢者には悪人と罰とが不可分であることを疑うことはできません(つまり，罰が悪人から離れることはけっしてない)。善と悪とは，そして罰と褒賞とは，正反対であるので，必然的に，先に見た善の報いのなかで起きることと照応的に，悪の罰は悪人に対して［褒賞とは］正反対の部位が対応しなければなりません。つまり，善性と有徳とが善人の褒賞であるのと同様に，悪そのものが悪人の懲罰であるのです。罰によって汚されけがされている連中は，自分が悪によって汚されけがされていることを疑いません。それゆえ，悪人が自分自身の評価をするならば，自分にはかけらほどの懲罰もないなどと思えるでしょうか。彼らはただ単に最悪の邪悪さ（つまり，最低・最悪の悪癖）に汚されけがされているというだけでなく，大いに冒され毒されているような連中であるというのに。悪人をご覧なさい。彼らは善人の対極です。何と大きな罰が彼らに伴い付きそっていることでしょう。この理由は——少し前に学んだように，すべて存在・生存するものは単一であり，単一とはすなわち善である。このことから結論として，すべて存在・生存するものは善であると思って差し支えない(つまり言い換えれば，存在と単一性と善とはすべて同じである)。かくして，善でありえないものはすべて存在・生存することをやめることになる。したがって，悪人たちは自分が以前そうであったところのものであることをやめる——という次第だからです。もっとも，人間の体という別の姿（つまり，肉体の外形）はこれらの悪人たちがかつては人間だったことをまだ示してはいますが。上のような次第で，彼らは悪心へと逸れて堕したときに，人間の本性をも捨ててしまったのです。

ところで，善性と有徳のみが各人を他の人々よりも上に高めうるの

と対称的に，悪人は悪のため人間の状態から放り出されているので，彼らの価値あるいは値打は，必然的に，人間としてのそれよりも下に置かれます。そのため，悪徳へと変化した連中を見れば，とても人間とは思えないという事態が生じます。例えば，強欲に燃え力づくで他人の財を奪うものは狼のごとしと言えるし，怒りっぽくイライラして小言ばかり言っているものは犬にたとえられます。ひそかに隠れて待ちぶせし罠によって騙し取って喜ぶものは子狐のごとしと言えるし，癇癪もちで怒りのため身を震わせているものは獅子の心を持っているかと思われます。ビクビクして逃げまわり恐れるにたりぬことを恐れるものは鹿のごとしとみなされ，のろまで愚鈍で怠惰なものはロバのような生を送っています。また，軽率で心変わりしやすく関心事がしょっちゅう変わるものは鳥にたとえられ，不潔なけがらわしい情欲にどっぷりと浸かっているものは不潔な豚の不潔な快楽に浸かっていると考えられます。このように，善性と有徳を放棄するものは人間であることをも放棄することになり，神的状態に入ることはできないので，動物へと変貌するのです。

3

南東風エウルスに吹きやられ
ナリスの王ユーリシスの帆船と軍船は海上を漂流したのち
ある島に漂着した。
そこには太陽の娘なる美しき女神キルケが住んでいて，
新来の客人に魔法のかかった飲物を調合する。
そののち，魔薬に通じた彼女の手は客人たちを様々な姿に変える。
あるものは顔を猪の面相におおわれ，
あるものはマルマリカの獅子へと変えられ，鉤爪と牙が生える。
今しがた狼に変えられ，泣こうとして咆哮するものもいれば，
インドの虎のごとく飼い馴らされて家の中を歩くものもいる。
ユーリシス王がくりかえし不幸に襲われるのを，
アルカディアの翼もつ神マーキュリーが哀れみ，
女あるじの災厄から解放したけれども，
漕ぎ手と水夫たちはすでに魔酒を口にし飲みこんでいた。
豚になったものたちはすでに食事のパンに代えて樫の実を食べていた。
彼らはもはや五体まっとうでなく，声も体形も失っていたが，

精神のみはしっかりと残り，
自分がこうむった怪物への変容を嘆き悲しむ。
おお，あまりにも微弱な手よ。
（すなわち，魔女キルケは人間の体形を動物に変えるとはいえ，
悪徳による変貌に比較対比すれば，その手は無力であり微弱である。）
キルケの魔薬も強力ではない。
それは五体を変えることはできても，心を変えることはできず，
心の奥深い城壁には
人間の力と強さ（つまり，理性の力）が潜んでいるのだから。
だが，悪徳の毒は，キルケの毒よりも強力に，人間をおびき寄せる。
なぜなら，悪徳は身体を苦しめはしないにせよ，
悪徳は残忍にも心を突きさし貫きとおし，
そして，精神を傷つけて人間を破滅させんと暴威をふるうのだから。」

四

このとき私は次のように言った。「私もそれをはっきりと認めます。人々が過たず言うとおり，悪人たちは，まだ人間の体形を保ってはいても，精神の質のため動物に変化していることが分かります。しかし，悪人たちの残忍な心は善人を破滅させようとして絶えず荒れ狂い，そうすることが許されています。私は悪人がそのようにできなければいいのにと願うのです。」

彼女は言った。「実は，許されてはいないのです。このことは適当な箇所で示しましょう。それはともかく，悪人に許されていると思われていることが彼らから取り去られて，善人を苦しめたり危害を加えたりできなくなれば，悪人の罰の大部分は軽減され除去されるでしょう。というのは，ひょっとすると幾人かの人々には信じがたいように思えるかもしれませんが，悪人たちは欲望を成就できなかったときより，欲望を果たし実行できたときのほうが，必然的に，より不幸であり不幸せであるのですから。つまり，悪を意図するのが不幸であれば，悪を為しうるのはもっと不幸であり，その行使力がなければ不幸な意図は実効なくたちぎえになったはずだからです。これらのそれぞれ（つまり，悪を行おうとする意図と，悪を為す行使力）が不幸なのですから，悪人は，必然的に，不正や悪事を意図する，為しうる，遂行する，という三重の不幸せに束縛されているのです。」

私は言った。「同感です。とまれ，悪人たちが早くその不幸せを失

うことを，つまり，悪人たちから悪の行使力が取り除かれることをせつに希望します。」
彼女は言った。「たぶん，そなたが希望するよりも早く，あるいは彼ら自身が思っているよりも早く，そうなるでしょう。それというのも，人生というかくも短い期間において，特に不滅の霊魂にとっては，待ちきれないほど遅いものは何もないのですから。事実，悪人の野望や悪の深謀はしばしば予期せぬ突然の幕切れによって破綻しますが，このこと自体が悪人に悪の終結を課しています。悪により不幸になるのであれば，一番長いあいだ悪人であるものが，必然的に，一番不幸であるということになります。究極の死によっても悪がまったく終わらないとすれば，その極悪人こそ一番不幸せな囚人であると判断されます。しかも，その不幸たるや，悪は不幸せであるという私の結論が真であれば，底無しであり確実に永劫に続くことは明白です。」
私は言った。「その結論は容認しがたく不可解ではありますが，確かに前に私が容認したこととよく一致していることは分かります。」
彼女は言った。「もっともな論評です。しかし，ある結論に賛同しがたいと思うならば，前提のどこかが偽であることを示すべきです。さもなければ，諸命題の構築が有効でなくて必然的帰結に至らないことを示さねばなりません。そうしなくて前提を容認するのであれば，議論を非難すべき理由はありません。今から言おうとしていることも先に劣らず不可解に見えるでしょうが，やはり必然的にそうだと（すなわち，それまでに承認されたことから生じると）理解されることです。」
「それは何ですか」と私は言った。
彼女は言った。「極悪人たちは，実は，裁判における罰によって罪滅ぼしをしないままでいるよりも，相応の懲罰を受け入れるほうが，より幸福である，あるいは不幸が少ない，ということです。いま私が言っているのは，悪人は報復によってその振る舞いが矯正され罪滅ぼしされるとか，拷問の恐怖によって正しい道に戻されるとか，他の人が悪を避けるための見せしめになるといっただれでも考えるようなことではありません。それとは別の立場から，私の理解するところでは，たとえ矯正という理由や罰則とか見せしめとかを考慮しなくても，悪人たちは罰せられないときのほうが不幸なのです。」
「前に述べられたのとはどのように異なる立場からですか」と私は言った。

彼女は言った。「善人は至福であり，悪人は不幸であると認めなかったですか。」
「はい」と私は言った。
彼女は言った。「では，ある人の不幸に少しなりとも善が加わるとすれば，その人は，善がみじんもまじらないで純然たる不幸であるものに比べれば，より至福ではありませんか。」
「そう思われます」と私は言った。
彼女は言った。「では，次の場合にはどう言いますか。ある悪人がまったく善を欠いている。そのため，彼の不幸には善がみじんもまじっていない。それでいて，彼の邪悪さ——そのため彼は不幸であるのに——に加えて，別の悪を重ね付けたす。別の悪漢は少しばかり善にあずかることによって不幸が除去される。この場合，先の悪人のほうが後の悪漢よりももっと不幸だと判断されませんか。」
「どうしてそれ以外でありましょう」と私は言った。
彼女は言った。「では，悪人たちは，罰せられるとき，彼らの不幸にいくぶん善を付けたすことになりませんか(つまり，彼らの受ける罰は裁判のゆえに善であるのだから)。逆に，悪人たちは懲罰なしに逃れるとき，つまり，罰を受けないとき，彼らの為した邪悪にさらなる悪を付け加えることになりませんか。罰を受けないのは，そなたも認めたように，不正のゆえに悪なのですから。」
「それは否定できません」と私は言った。
彼女は言った。「かくして，悪人たちは正当な報復によって罰せられるときよりも，罰を不正に免れるときのほうがずっと不幸なのです。ところで，明らかなことですが，悪人たちが罰せられるのは正しく，罰せられずに逃れるのは不正にして悪です。」
「だれが否定できましょう」と私は言った。
彼女は言った。「では，一切の正しいことは善であり，反対に，一切の不正は悪であるということを否定できるでしょうか。」
私は言った。「もちろん，そういうことは明白であり，少し前の結論からそのように帰結されます。ところで，教えていただきたいのですが，肉体が死によって果てたのち霊魂に懲らしめを課さないことに同意なさるのですか。」(つまり，肉体の死後，霊魂は懲らしめを受けると多少なりともお考えですか。)
彼女は言った。「無論，そうです。しかも，きわめて厳しいものです。私が思うには，ある霊魂は鋭い罰によって責められ，ある霊魂は

滅罪作用のある慈しみによって浄められます。しかし，私の意図はそういう罰について議論することではありません。

ともかく，私がこれまで苦心して述べてきたことから，次のことが分かったはずです。まず，悪人の行使力は，無価値と思えるものであり，力ではないこと。悪人が罰せられていないとそなたは嘆いたけれども，やがて見るでしょうが，悪には必ず懲罰があること。悪を為す行使力の野ばなし状態が早く終わるようにそなたは祈ったけれども，心躍らせて実感するでしょうが，その行使力は永くは続かないこと。そして，悪人はより永く悪人であればあるほど，より不幸であり，永劫に悪人であれば最も不幸であること。以上ののち私が示したことから，悪人たちは正当な報復によって罰せられるときよりも，しかるべき罰を受けずに逃れるときのほうがより不幸であること。この議論から，悪人は罰せられていないと見えるときこそ，結局は，最も苛酷な懲らしめに束縛されているということが生じます。」

私は言った。「あなたの理論を考察するに，これ以上の真実は述べようがないと思います。ところが，世人の見解をふりかえるならば，だれがこれらのことを信じるべきだ，少なくとも喜んで聞くべきだという気になるでしょう。」

彼女は言った。「確かにそのとおりです。人間の目は世の俗事の闇に慣れているのできらめく真実の光に向けることができないのです。まるで夜は遠目が利き昼は目が眩む鳥のようなのです。それというのも，人間が考えるのは万物の秩序ではなく色と欲なので，彼らは悪のやりたい放題やその行使力，あるいは罰を受けないで逃れることを幸福だと思っているのです。しかし，永遠の掟である審判を考えてごらんなさい。もしも心を最善のものへと高めるのであれば，報酬とか褒賞とかを与えてくれる裁き主は不要です。最も優れたものと合一したのですから。もしも関心事を悪事に向けるのであれば，自分の外に処罰者を求めるにはおよびません。自ら悪事に入りこんだのですから。ちょうど穢土と天空とを交互に眺めるとき，間に何も障害物がなければ，つまり，身は天にも地にもなくて，視界に入るものは他に何もないとすれば，視線の向け方ひとつで，今や星空にあり今や穢土にありと思えるのと同様です。しかし，世人はこのようなことは考えません。では，どうすべきでしょう。先に示したような動物のごとき連中に歩み寄るべきでしょうか。次の場合どう言いますか。ある人が視力をまったく失ったのに，かつては視力があったことを忘れて自分は人間と

しての完全性に何も欠けていないと思いこんでいるとする。この場合，ものが見える我々の判断では，彼は盲人ではありませんか。私がこれから言おうとしていることにも世人は同意しないでしょうが，これは強固な論拠によって支持されています。すなわち，他人に悪を為すもののほうが，悪を為されたものよりも不幸であるということです。」

「その理由をお聞きかせください」と私は言った。

彼女は言った。「悪人は残らず懲罰に値するということを否定しますか。」

「いいえ」と私は言った。

「ところで，多くの理由から確信できるように，悪人は不幸です。」

「そのとおりです」と私は言った。

「では，懲罰に値する連中が不幸であることは疑いませんか」と彼女は言った。

「まさしくそのとおりです」と私は言った。

「そなたが裁判官あるいは審判官に任じられたとすれば，どちらを罰するべきだと思いますか。悪を為した者ですか，悪を為された人ですか。」

「疑うまでもなく，悪を為した者をさいなむことによって悪を為された人［の気持ち］を存分に晴らさせます。」

彼女は言った。「では，悪事の加害者のほうが悪事の被害者よりも不幸せのように思えますか。」

「当然そうなります」と私は言った。

彼女は言った。「かくして，以上の理由や，同じ原理によって支持される別の理由から，罪というけがれはそれ本来の性質ゆえに人を不幸にするのであり，それゆえ，明らかに，人間の犯す悪は，悪を被る人の不幸ではなく，悪を為す者の不幸なのです。それなのに，告発者や法曹人はまったく逆のことをします。彼らは裁判官の心をうち，非道なことや辛いことをされたり被ったりした人への同情を買おうとしていますが，本当は非道や悪事を行った者に同情すべきなのです。告発人とか法曹人は悪を犯した者を，敵意ではなく，同情と慈しみをもって，裁判に連れて行くべきなのです。ちょうど病人を医者に連れて行くのと同じで，犯罪という病気を懲罰によって摘み取るべきなのですから。そこでの合意によっては弁護人や法曹人の心づもりはまったく中断・途絶してしまい，もしも告発という仕事が犯罪者のためになるようならば，告発人の役割へと変わることもあるでしょう。（つ

まり，弁護人たちは悪人たちを放免するのではなく告発すべきである。）また，悪人のほうも，もしも小さな隙間からでも自分が放棄した徳を見ようという気になり，罰という懲らしめによって悪徳のけがらわしさを洗い落とすべきだと理解すれば，彼らが失った善性と有徳をとりもどす代償として［受けるのなら］罰は彼らにとっては懲らしめではないと捉え判断するはずです。そして，彼らは弁護人の介添えを断って自ら裁判官や告発人のところに赴きさえもするでしょう。以上のことから，賢者には憎しみを容認する場所はない（つまり，憎しみは賢者のうちに位置を占めることはない）ということになります。というのも，はなはだしく愚かでさえなければ，だれも善人を憎みはしないし，悪人を憎むのは理由のないことだからです。ちょうど衰弱が身体の病気であるのと同様に，悪徳や罪は心の病気なのです。だから，身体を病んでいる人は，憎しみではなく，同情に値すると思われるのと同様に，精神が極悪に捕縛されている者たちは，身体の衰弱よりも悲惨なのですから，なおさら同情に値するのです。

4

なぜ喜々として人間は憎しみなる激情をひきおこし，
自分自身の手で（つまり，戦いや闘争で）
定めの最期なる死へと急いで突き進むのか。
死を求めるのなら，それはおのずとすぐにやって来る。
死は彼の疾駆する馬[車]を遅れさせはしない。
蛇や獅子，虎，熊，猪が牙もて人間を殺さんと求めているのに，
人間は刃もて互いに殺さんと求める。
見よ，風俗習慣が一致せず異なるがゆえに，
無道な軍隊を動かし残忍な戦いを行い，
槍を交えて滅ぼさんとする。
だが，その理由は残忍さを正当化するものではない。
人間の価値に対して相応の報いを与えんとするならば，
善人を正当に愛し，悪人には同情を与えよ。」

五

私は言った。「これで，善人と悪人の報いにどのような至福が，もしくはどのような不幸せが，科せられているかよく分かりました。ところで，私の見るところでは，人々の運命にも善が幾分あり，そして

悪も幾分あります。賢者ならだれでも追放されて貧窮し名声を失うよりも，故国に住みつづけ富み栄え敬服・尊敬され権力を得て強者でありたいと望むものです。そうであることによって，支配者の至福と力は彼らの同胞や臣下の人々に分け与えられ，そのとき賢者の使命はいっそう顕然と，かつ明白に果たされるのですから。特に，牢獄や法律，他の合法的刑罰による懲罰は，善人にではなく，有害な市民のために設けられたのですから，それらは有害な市民にこそ適するものです。

ですから，私にはとても不可解なのです。なぜ現状は主客転倒して，大罪のための懲罰が善人を抑圧し虐げ，悪人が徳から褒賞を奪いとって顕職を得て高位に就いているのですか。あなたからお伺いしたいのですが，あなたにはこの不当な混乱の理由は何であると思われますか。というのは，一切は偶然の出来事によって撹乱されていると信じるならば，それほど不思議には思わないでしょうが，今や神［を知ったこと］により私の驚きは高まり膨らむばかりだからです。万物の支配者たる神は，善人には善と喜びを，悪人には悪と辛酸を与えますが，これとは逆に，善人に苦難を与え，悪人に意図し望むところをかなえさせることもしばしばあります。なぜそうなのかという原因が分からないとすれば，神の為したまうことと偶然の出来事との間にはどういう違いがあるでしょうか。」

彼女は言った。「それは不可思議なことではないのですが，秩序がそうである理由が分からなければ，人々はでたらめや混乱しかないと思うでしょう。しかし，かくも偉大な秩序づけの原理を知らなくても，神が善き支配者として大宇宙を統治され支配されているのですから，そなたは一切が正しく治められていることを疑ってはなりません。

5

牛飼い座が天頂，すなわち中心点，の近くを通過するのを
(つまり，天の北極点の近くを通過[して近まわり]するのを)
知らないものは，
なぜ牛飼いの星座ははその馬車を［のろのろと］運行し
朝遅く光を海に沈めるのに，
なぜ牛飼い座がすぐまた上昇するのか分からず，
天空の法則を不思議に思うであろう。
また，なぜ満月の円みが闇夜と接する部分から侵されて光を失い，
どうして月が暗く陰々となって

明るい顔光で隠していた星を見せることになるかを知らなければ，
世の謬見に駆られ，
コリュバンテスは小太鼓を打ち鳴らし，
真鍮の器を乱打して疲弊させる。
(つまり，コリュバンテスと呼ばれる神官たちがいて，
彼らは月食のとき魔法がかけられたものと思い，
月を救い出すため器を乱打する。)
[しかし]北西風コルスの疾風が荒だつ波浪で岸辺を打ってもだれも驚かず，
寒さで凍っていた重い積雪が太陽神フィーバスの灼熱に溶けてもだれも驚かない。
ここでは容易に原因が分かるからだ。
ところが，原因が隠されていると（つまり，天空に）
人々の心は不安になり，
定見なき世人は
生涯において希有のことや突発するあらゆることに驚愕する。
だが，無知というどんよりした誤謬が消えされば，
なぜそのようなことが起きるか原因が分かり，
何も不思議とは思えなくなるであろう。」

六

私は言った。「そのとおりです。ところで，お約束では，万有の隠された原因を現し，無明に覆い隠されている原理を示すとのことでしたので，この件について論じて判断を下し私に理解させてください。私はこういう驚異や不思議にとても思い悩んでいるのです。」

彼女は少しばかり微笑みながら言った。「そなたが誘導しているのは，およそ尋ねうることのうちで最難問であり，ほとんど答えつくせない問題です。（すなわち，ボエティウスの質問に完全に答えうる十全な解答はまずもって何もない。）なぜなら，この問題はひとつの疑問が解決されて取り除かれれば，別の疑問が，まるでヒュドラ——ヘラクレスが退治した水蛇——の頭が生えてくるように，数かぎりなく生じてくる類いのものであり，活気と精気にあふれた精神の火によって（つまり，精力と活力を伴う知恵によって）疑問を抑えこむのでなければ，この疑問には形も終わりもないからです。この件に関して常に問題となるのは，神の摂理の単一性，天運の順序性，突発的な偶然，

神の認識と予定，それに自由意志の自在度ですが，これらがいかに難題であるかはそなた自身よく理解しているとおりです。しかし，これらを知ることもそなたの治療薬のうちの一服なのですから，時間はわずかしかないにせよ，いくらかでもそなたに示すよう努めましょう。ところで，［心の］栄養である音楽はそなたの楽しみですけれども，私が順序よく編まれるよう論を織りあげている間は，その楽しみをしばらく堪え忍ばなければなりません。」

「お好きなようになさってください」と私は言った。

彼女はまるで新たに開始するかのように話しはじめ，次のように言った。「万物の発生も，本性的　に可変的である事物の発展も，いかようであれ運動するもの一切は，神的精神の不動性からその原因，秩序，形相を受け取っています。神的精神は神の単一性という塔（つまり，高等領域）のうちに配置され据えられていて，実現されるべき事物に実現方法を定めます。その実現方法は，神の叡知という純粋な明晰さにおいて考察されれば，摂理と呼ばれ，他方，神の叡知により動かされ規定される事物に関連づけられれば，古人により天運と呼ばれました。これら二者が別ものであることは，一方と他方との力［の相違］を心のうちでよく考えれば，だれでも容易に分かるでしょう。摂理は万物の最高者のうちに確立されている神的理性であり，万物を規定している。これに対し，天運は［神による］規定，つまり，可変的な事物に結び付けられている順序づけであり，その規定により摂理は万物を秩序だてる。万物は多様にして多数であるにもかかわらず，摂理は万物を総体的に包括している。これに対し，天運は万物を一つひとつ個別化して規定するものであり，運動・場所・形相・時間へと分割されている。約言するに，規定の時間的展開が神的精神の視野のうちに統括・合一されれば，摂理と呼ばれ，その統括・合一が時間的に分割され，展開されれば，天運と呼ばれるのです。

これら二者は別ものではあるけれども，後者は前者に依存しているのであり，天運の順序は摂理の単一性から生じるのです。たとえて言えば，芸術家が製作しようとしているものの姿を心に思い浮かべその作品の効果をひきだすに際して，前もって単一的・同時的に心のうちに考えていたことを，時間的順序づけにより，生成するのと同様です。つまり，神は，摂理においては，実現されるべきことがらを単一的・不動的に規定し，その規定したところを，天運により多種多様な実現方法と時間とをとおして実行する。したがって，天運を執行するのが

神的精霊であれ，神の摂理の下僕であれ，霊魂であれ，神に仕えるあらゆる本性的性質であれ，星辰の天体運動であれ，天使の力によるのであれ，悪魔の種々の策略であれ，これらのいずれかか，あるいは全部によるのであれ，とにかく天運の秩序づけは織りあげられ遂行される。かくして，明らかに，摂理とは，実現されるべき事柄の不変的・単一的な形相であり，天運とは，摂理という神的単一性が実現すべく規定した事柄の可変的連鎖と時間的順序づけである。それゆえ，天運そのものが摂理に従属しその下にあるのだから，天運の下に置かれる事物はすべて摂理に従属しているのです。

しかし，天運の秩序づけを超越し摂理に直属するものもあります。それらは最高神性の近くに配置されて不動であり，可変的天運の順序を超越しているからです。ちょうど同一の中心，つまり真中，の周囲を回る円軌道と同様です。すなわち，最も内部つまり一番内側の円軌道は単一の中心に接し，その周囲を回る他の円軌道にとっては，いわば，中心となっている。これに対し，より大きな円周をもって回転する一番外側のものは，単一の中心点から最も遠いので，より広い空間へと広がっている。ところが，その中心点に結びつき繋がっているものは単一性（つまり，不動性）へと向かい，四方八方に分散・流出することはない。これと同じく，同様な理由により，神という第一の精神から最も遠く離れて行くものは放散して，より強力に天運に捕縛され従属させられる。事物の中心（つまり神）を求め接近すればするほど，そのものは天運から自由で無縁である。事実，それが神の精神の不動性に密着し不動であるならば，天運の必然を超越することになる。こういう次第で，推論に対する知力，生成に対する実在，時間に対する永遠，円軌道に対する中心という関係と，天運の可変的順序づけに対する摂理の不動的単一性は同じなのです。

この順序づけこそが，天空と星辰を動かし，諸元素同士を統制し，相互交換によって［諸元素の］姿を変え，そして，精子と受精（つまり，雄性と雌性）という過程をとおして一切の成長し滅亡するものを新たにするのです。さらに，この秩序が諸原因を解きがたく結び合わせて人間の天運と行動とを制約しているのです。さて，その天運の諸原因は，不変的摂理という始源から発しているので，当然，不変です。ですから，諸物が最もよく支配されるのは，神的精神に宿る単一性が諸原因の［組み合わせにより］変更不可能な秩序を作り出すときであることになります。なぜなら，その秩序は本来の不動性により可動的

事物を制約するからです。もしもそうでないとすれば，可動的事物は無定見に漂っているはずです。

ただ，人間にはその秩序づけを考察することができないため，万物は混乱し乱雑であるように見えますが，実は，万物の本来の行動様式は自らを規定して，自己を善へと向かわせているのです。なぜなら，何も悪のために為されるものはないからです。悪人によって為されることも，悪のために為されるのではなく，詳しく示したように，悪人は善を求めていながら，邪悪な誤謬のために道を誤っているためであり，けっして最高善の中心点から発する秩序がその始源から悪化していったためではありません。

ところで，そなたは言うかもしれません，『善人が逆境を味わうこともあり，栄華を味わうこともある。また，悪人もときに望むことを手にし，ときに厭うことを手にする。こういう混乱よりももっと悪質な混迷があるだろうか』と。しかし，善人である，あるいは悪人であると判断されている人々は必ずや思われているとおりの人間であるでしょうか。現在それほど完全な理解力をもって生きている人間がいるでしょうか(すなわち，現在人間はそれほど賢明であるであろうか)。現実には，人間たちの判断は一致せず，ある人々が褒賞に値すると思う人を他の人々は懲罰に値すると思うほどです。それでも，ある人は善人と悪人とを判別・識別できると，仮定上，認めることにしましょう。では，その人は，肉体に関して常に言われているのと同様に，心の最奥の気質を識別し見てとることができるでしょうか。（すなわち，肉体の体質と気質に関して常に判別したり論じたりするのと同様に，心の気質を論じ決定することが可能であろうか。）［肉体の場合］なぜ甘いものが合う健康な体もあれば，苦いものが合う体もあるのか。また，なぜ薄めの薬が効く病人もいれば，強い薬が効く人もいるのか。その理由を知らない人々にはそういうことは意想外な奇跡でないともかぎりませんが（すなわち，理由を知らない人々にはまるで不思議か奇跡のようであるが)，医者は健康と病気がどんな様子でどんな具合であるかを知っているので，少しも不思議には思いません。

さて，心の健康とは，善性と有徳性をおいてほかに何があると思えますか。心の病気とは，悪徳をおいてほかに何があると思えますか。善を維持し悪を除去するのは，支配者にして精神の治療者である神をおいてほかにだれがいるでしょう。神は摂理の高塔から見わたし，何が個々人一人ひとりに合うかということを察知し，彼らに合うと分か

っているものを与えたまいます。このことから天運の秩序という貴重な奇跡が生じ，さらに実現され——全知の神が実現したまうのですが——，無知な人々は驚くのです。

神の深慮に関することのうち人間の理性が理解しうる若干のことに限定する（すなわち，把握可能なことを論ずる）ならば，そなたからは方正であり正義を守っていると思われる人が，全知の神の摂理からは正反対に見えることもあります。我が朋友ルカヌスの言によれば，『勝利者の大義は神々に喜ばれ，敗者の大義はカトーに喜ばれた』のでした。このように，期待も予測もされないことがこの世で行われるのを見るならば，そなたの曇った見解からすれば混乱でしょうが，実は，正しい秩序なのです。かりに，ある人が品行方正であり，その人に関しては神の判断も人間の判断も一致するが，その人は意志薄弱であり，逆境がふりかかれば，おそらく潔白であることを放棄してしまい，そのため幸運を維持できなくなると想定しましょう。このとき，神の賢明な配慮は，逆境が彼を損なうかもしれないので，彼を救います。つまり，彼に艱難辛苦は合わないので，神は彼には難儀させないのです。別の人はあらゆる徳において完璧であり，聖者であり，神に最も近い[と想定しましょう]。このとき，神の摂理は彼を逆境に遭わせるのは悪であると判じ，そのような人物が肉体の病気のために妨げられることのないようにします。そうならないように，私より優れていると思われる哲学者がギリシャ語で言ったように，『聖者の肉体は徳によって構成されている』のです。

かくして，実現されるべきことがすべて善人に委ねられ善人が支配するということがしばしば起きるのは，悪人がみちみちている非道を減少させるためなのです。また，神はある人々には心の性質に応じて栄華と逆境とをとりまぜて分け与え，ある人々には長期間の幸福のゆえに傲慢にならないように逆境を与えて苦しめ，ある人々には忍耐の行使と実践により心の徳を強化するように困難を与えて苦しめます。それにまた，堪えうることであるのに必要以上に恐れる人々もいますが，神は彼らを辛苦や心痛によって［忍耐力があるという］自己認識へと導きます。さらに，名誉の死という勲章によってこの世の名声を得た人々も多くいますし，拷問に屈しないで，徳は逆境に負けないという範を他者に垂れた人々もいます。かくして，人々に起きるのが見かけられるあらゆることは，すべて人々の利益になるべく，正しく，かつ秩序にのっとって行われることは何ら疑いありません。

悪人にもときには苦境が，ときには望みどおりのことが訪れるということも，上述の原因から生じます。まず，悪人が遭遇する苦しみに関しては，だれも不思議がりはしません。人々の考えでは，そうなって当然であり，悪に対する報いなのですから。事実，悪人が受ける懲罰は，あるときは他人を怖じけづかせて大罪を思いとどまらせ，あるときは懲罰を受けているもの自身を改心させます。次に，悪人にも栄華が与えられるという事実は善人に重大な主張を示しているのです。すなわち，栄華が悪人に付随するのがしばしば見かけられるが，こういう幸福をどう考えるべきか，という主張です。私の考えでは，ここにこそ神の配慮があります。というのは，ことによると，あるものは本性があまりにも悪に傾き下劣であり，家計がひどく窮乏すれば，大罪へと突き進む。それゆえ，彼の病気を治療するため，神は富を与える。また，あるものは自分の良心が罪にけがされているのを顧みて，自分の幸運と自分自身［の罪深さ］とを比較し，ことによると，恩恵にあずかり享受している至福を失えば惨めになると恐れ，行いを改める。かくして，幸運を失うのを恐れるがゆえに，そのものは悪をやめることになる。もっとも，分不相応な幸福が与えられ，そのため当然の報いとして破滅に至るものもいます。

また，ある人々には他人を罰するという権力が与えられますが，これは善人には善を継続して行使する要因となり，悪人には懲罰を受ける要因となります。なぜなら，善人と悪人とには同盟はありえないからであり，また，悪人同士にも一致はありえないからです。なぜないのでしょうか。それは，悪人たちの悪は，良心を傷つけ，実行したとき実行すべきでなかったと思うような悪事を実行してしまうものなので，悪人たちは彼らの悪ゆえに仲たがいするからです。このことから，至高である摂理はいくたびも美しい奇跡をもたらしてきました。すなわち，悪人が他の悪人を善人に変えたのです。なぜなら，悪人たちは不当にも他の悪人の罪をこうむっているのに気づき，自分たちを苦しめているものを激しく憎悪するようになり，自分が憎悪する輩のようになるまいと努め，徳という果実へと戻るからです。もちろん，このように為しうるのは神の力のみです。神の力にとっては，悪もまた善なりであり，悪をほどよく用いて，善という結果をひきだすのです。（すなわち，悪が神力に対してだけは善であるのは，神力が悪を支配し善へと転じるからである。）

ただ一つの秩序が万物を包摂しているのですから，人は自分に課せ

られた秩序から迷い出ても，別の秩序に入りこむことになります。したがって，神の摂理の王国では何らのでたらめも許されません(すなわち，神の摂理の王国では何ものも無秩序ではない)。最強である神がこの宇宙のありとあらゆるものを支配しているからです。しかし，人間にとっては神意の行きとどいた周密な秩序づけや配列を頭で理解するのも言葉で説明するのも無理なことですから，次の事項を考察したことで十分としなければなりません。すなわち，神はあらゆる本性の創造者であり，万物を規定し善に導きたまうこと。神は造りたもうた諸物を自分のごとく維持せんと（つまり，自分が善であるので，諸物を善に維持することに）努めつつ，必然的天運という秩序によって御国の領域内からすべての悪を追い出したまうこと。そして，このことから派生的に，地上にみちあふれていると思われている悪が，実は，摂理に規定されているということを顧みるならば，悪はどこにも見られないこと。

ところで，私が見るところでは，もうそなたは問題の重みに圧しつぶされ，私の議論の長さに倦み，歌という甘露を心待ちにしています。さあ，この一杯をお飲みなさい。生気をとりもどし英気がたちかえれば，［理解力が］より安定していっそう高度な問題に昇れるようになるでしょう。

6

高きにまして轟きわたる主（つまり神）の掟なる法則を
明晰な精神にて洞察せんと欲するなら，
いや果ての天の高きを仰ぎ見よ。
そこでは星々が，天理の契りに従い，古からの和平を保っている。
太陽は己が黄金色の火にて進行し，
月の冷たい軌道を阻むことはない。
大熊座と呼ばれる星座は天頂ちかくの通り路をすばやく巡る。
この大熊座は，ほかの星々が海に沈むのを見ても，
西の深海に沈むことはけっしてなく，
自らの光を大海原の海水で染めようとすることもない。
宵の明星は夜ふけを告げ，
明けの明星は明るい昼をふたたびもたらす。
かくのごとく永遠の循環を造りあげ
かくのごとく星々の世界から敵対する戦いを閉め出すのは

相互間の愛である。
この調和が均衡のとれた方法で諸元素を統御する。
[それゆえ］湿は乾と対立しつつも互いに譲りあい，
冷たきものは，信頼により，熱きものと結びあい，
軽き火は高く舞い上り，
重き地はその重量により沈む。
同じ理由により，花は水ぬるむ春の季節に芳香を漂わせ，
暑き夏は穀物を枯れさせ，
秋は林檎をたわわに実らせて巡りかえり
軟らかい雨は冬をしっとりと濡らす。
均衡がこの世に生息する万物をはぐくみ新生させ，
均衡が生まれでた一切を奪う——
捕らえ，隠し，終焉の死の淵に沈める。
これら万物の中に座し，
万物の手綱を支配し導きたまうのは至高の創造主である。
創造主は，王でもあり，君主でもあり，源泉でもあり，始源でもあり，
掟でもあり，法を執り行う裁き主でもある。
彼は万物を動かし駆りたて，また，静止させ停どめ，
惑える遊動体［つまり，惑星］を一定させたまう。
もしも［惑星に］正しい運行を思い出させず，
円い軌道にふたたび閉じこめたまうのでなければ，
現在は安定した秩序により保たれている惑星も，
かの源泉（つまり，始源）から離れ，
落下する（つまり，無になる）であろう。
これは万物に等しく向けられた愛であり，
万物は善という究極に抱かれることを求める。
万物は自らに生存を与えた原因（つまり，神）のもとに
報謝の敬愛をもって戻るのでなければ，
存続することはありえない。

七

私が述べた以上のことからどういうことが生じるか分かりませんか。」

「何でしょうか」と私は言った。

彼女は言った。「すべての運命は，明らかに，善であるということ

です。」
「一体どうしてそんなことがありうるでしょう」と私は言った。
彼女は言った。「まず理解してほしいのですが，楽しい運命であれ，辛い運命であれ，すべての運命は善人の報賞もしくは修行のために与えられるか，あるいは悪人の処罰か滅罪のために与えられるかのいずれかです。だから，すべての運命は，正当であるか有益であるかのいずれかですから，善であることになります。」
私は言った。「確かに，それは正しい推論であり，少し前に教えてくださった摂理と天運のことを考えれば，その命題は強固な議論に裏づけられています。しかし，もしよろしければ，これは少し前におっしゃった，世人には思いもよらぬことのうちに数えたいと思います。」
「なぜですか」と彼女は言った。
私は言った。「巷間の普通の言葉づかいでは運命という語を誤用し，『だれそれは運が悪い』とよく言うからです。」
「では，ご希望により，しばらく一般大衆の言葉づかいに歩み寄って，人々の語法からあまりにもかけはなれていると見えないようにしましょうか。」
「お好きなように」と私は言った。
「有益なものはすべて善であると思いませんか」と彼女は言った。
「思います」と私は言った。
「修行や矯正になるものは有益ですか。」
「そうだと認めます」と私は言った。
「では，それは善です」と彼女は言った。
「そのとおりです」と私は言った。
「ところで，［善人の］運命はそういうものであって，彼らは徳を守って辛苦と戦うか，あるいは悪徳を避けしりぞけて徳の道に従うかしています。」
「それは否定できません」と私は言った。
「では，善人に報賞として与えられる楽しい運については，そなたはどう言いますか。一般大衆はかりそめにもそれを悪いものだと考えるでしょうか。」
私は言った。「いいえ，けっして。彼らの考えではそれはとても善いものであり，事実，そのとおりです。」
彼女は言った。「次に，もう一方の運についてはどう言いますか。つまり，正当な懲罰によって悪人を規制する，辛い運のことです。一

般大衆はそれを善いものだとかりそめにも思うでしょうか。」
私は言った。「いいえ，人々の思うところでは，それはおよそ考えうるもののなかで最悪のものです。」
彼女は言った。「さあ，今や注意して考えてごらんなさい。私たちは一般大衆の見解に従いながらも，彼らには思いもよらぬことを認め結論したのではありませんか。」
「どういうことですか」と私は言った。
彼女は言った。「承認された事項から次のことが派生し生じます。すなわち，徳を所有済みであれ，徳を増進中であれ，徳を獲得中であれ，これらの人々の運は，どんな運にせよ，すべて善いものであり，悪にとどまっている者たちの運はすべて悪いものである，ということです。」（すなわち，一般大衆にはこういうことは思いもよらないことである。）
「そのとおりです。もっとも，だれもそれを是認も肯定もしようとはしないでしょうが」と私は言った。
彼女は言った。「なぜそうなるのでしょう。ちょうど強者には戦いの音を聞くたびに恐れたりたじろいだりするのがふさわしくないのと同様に，賢者には運命の戦いにひきこまれるたびに苦しみ悩むのはふさわしくありません。というのも，艱難辛苦は，強者にとっては勇名を馳せる因であり，賢者にとっては知恵を（つまり，彼の状態の苛烈さに対する）確固たるものにする因だからです。事実，徳は，自分の力によって自分自身を支えて奮闘努力し，逆境に屈することがないから《徳》と呼ばれるのです。
そなたは徳の高みに置かれているのですから，快楽に浸ったり肉欲に溺れたりするためにここに来ているのではありません。悲運のために挫けることなく，福運のために堕落することもないように，そなたはあらゆる運命に対する激しい戦闘［の覚悟］を心のうちに蒔きつけ植えつけているのですから，確固たる力によって中道を占めるがよろしい。中道に及ばざるものと中道を過ぎたるものはすべて幸福を軽んじ（すなわち，悪徳に堕し），骨折りに対する褒賞を得ることはありません。望みの運命が何であれ，それは（つまり，福運も悲運も）そなたたちの手中にあります(すなわち，獲得可能である)。厳しく辛いように見える運命は，善人の修行でも悪人の滅罪のためでもないとすれば，［中道にない悪人を］罰するためなのです。

7

アトレウスの息子（つまり，アガメムノン）は復讐者として
十年のあいだ戦いを行いつづけ，トロイを滅ぼし，
弟の奪われていた正室を取り戻し，復讐を遂げた。
(つまり，アガメムノンは彼の弟メネラウスの妻ヘレネを取り返した。)
かのアガメムノンはギリシャの艦隊を出帆させんと願い，
父親の情を捨て，血で順風をあがなった。
哀れみつつ神官はその娘の喉をむごくもかき切って犠牲にささげた。
(つまり，アガメムノンはトロイに征くための風を得るべく
女神と同盟を結ぶに際して，自分の娘の喉を神官に切らせた。)
イタカ王（つまり，ユーリシス）は仲間たちが消えていくのを嘆いた。
仲間たちは大巣窟に住む凶暴な独眼巨人ポリュペムスにむさぼり食われ，
その空き腹の中に呑みこまれたのだった。
だが，ポリュペムスがその顔の目をつぶされて猛り狂い，
悲しみの涙を流したとき
ユーリシスは喜びを与えられた。
(つまり，ユーリシスはポリュペムスの額にあった独眼を突きつぶし，
ポリュペムスが盲目になって涙するのを見たとき，喜びを得た。)
ヘラクレスが名を挙げたのは彼の難業のゆえである。
彼は傲れるケンタウロス（半人半馬の怪物）を服従させ，
獰猛なライオンを丸裸にし，
(つまり，ライオンを殺しその皮を剥ぎとり，)
ハルピュイアという怪鳥を違わぬ矢で射落とし，
見張りの龍から林檎を奪った。
それゆえ，彼の手はその黄金［の林檎の重量］分だけ重くなった。
彼は地獄の番犬ケルベロスを三重の鎖に繋ぎ，
伝えられるところでは，その勝利者は傲慢な王を猛き馬の餌とした
(つまり，ヘラクレスはディオメデス王を殺し，王の馬に主人の肉を食べさせた)。
彼ヘラクレスは水蛇ヒュドラを退治し，その毒を焼き，
急流アケロオス川は，額に辱めを受け，
自らの岸辺にその恥ずべき面を沈めた
(つまり，アケロオスはいろんな姿に変身できたが，
ヘラクレスと戦ったとき，最後に牡牛になり，

[額の］角をヘラクレスに折られ，恥辱のため河に隠れた)。
彼ヘラクレスは巨人アンタイオスをリビアの砂漠に投げつけ，
カクスによりエウアンドロス王の怒りを解いた。
(つまり，ヘラクレスは怪物カクスを退治し，
その征服によりエウアンドロス王の怒りを解いた。)
ヘラクレスの両肩は剛毛の猪の泡で汚されたが，
その両肩はやがて高き天球を支えることになり，
彼の最後の苦業は不屈の首に天空を支えることだった。
かくして，彼はやがて最後の難業の褒賞として
天界に値するところとなった。
いざや，行け，強者たちよ，
壮大なる例話の導く至高の道へ。
ああ，愚かなるものたちよ，なぜ背を見せるのか。
(すなわち，ああ，愚鈍にして脆き人間たちよ，
なぜ逆境から逃げるのか。
なぜ，天界の褒賞を得るべく，徳により逆境に立ち向かわないのか。)
地上を征服すれば星斗が得られるのだ。
(つまり，世俗的な欲望を征服すれば，人は天界に値することになるのである。)」

第四巻終わる。

第五巻始まる。

一

彼女はこう言い終わると，議論の方向を変えて何かほかのことをとりあげて論じようとしていた。そこで，私は次のように言った。「確かに，あなたのお諭しはもっともであり，あなたの威厳にふさわしいものです。しかし，少し前におっしゃったこと，つまり，神の摂理の問題はほかの多くの問題と絡みあっているということは，私にもよく分かりますし，私も同じように証明できます。それよりも私がお尋ねしたいのは，偶然はそもそも存在するとお考えなのかどうか，もしも偶然は存在するとお考えならば，それはどういうものなのか，ということです。」

すると彼女は言った。「私は早く約束という債務を返済して免責になり，そなたが故国に帰るための道を示し，さらに，その道を開こうと急いでいるのです。そなたが尋ねていることは理解すれば非常に有益ではあるけれども，私が目指している道から多少はずれています。だから，多くの脇道のためそなたが疲れてしまい，正しい道を見さだめることができなくなりはしないか心配です。」

私は言った。「その点はご心配無用です。これらすべてを理解すれば，私は嬉しくなりますし，さらに，それは私にとって安らぎの場となるでしょう。というのは，あなたの議論はどの面でも確実な信憑性があり精確でしょうから，今からの議論にも疑うところはありませんから。」

「では，そうすることにしましょう」と彼女は言って，次のように話しはじめた。「もしも偶然の定義が次のようなものであるならば，つまり，『偶然とは，原因の絡まりあいによらず，でたらめな運動によってひき起こされる出来事である』ということであるならば，偶然はまったく存在しないと断言できます。加えて，偶然は内容のない《音》(すなわち，内容のない言葉)にすぎないと推断されます。その音には何らの意味も託されていないのですから。そもそも，でたらめや無秩序にどういう持ち場があったり残されていたりするでしょう。なにしろ，神が秩序をもって万物を導き制御したまうのですから。次の命題が真理真実であることは確かです。すなわち，『何ものも無からは生じない』ということです。これは宇宙の創始者であり君主である神との関連において意味され理解されたわけではありませんが，古

人もだれ一人としてこの命題に反論したことはなく，それどころかこの命題を質料的物質の（つまり，諸原因の本質に関して），いわば，根本原理として打ち立てました。さて，もしも何かが原因もなく発生し出来すれば，それは無から発生・出来したように見えることでしょう。しかし，そういうことがありえないとすれば，偶然が私の少し前の定義のようなものであることも不可能です。」

私は言った。「では，偶然とはどんなものですか。偶然とか偶発的事件と正当に呼ばれうるものは何もないのですか。それとも，人間には隠されているけれども，これらの言葉が適切な出来事が存在するのですか。」

彼女は言った。「わがアリストテレスが『自然学』[ii, 4-5] という書物の中で簡潔な議論で，ほぼ真理を衝いた定義をしています。」

「どのようにですか」と私は尋ねた。

彼女は言った。「人間が［結果とは］別のことのためにあることを行い，意図していたこととは異なることが何らかの原因で起きるならば，それは《偶然》と呼ばれます。例えば，畑を耕すために土地を掘って金塊が埋められているのを発見すれば，それは偶発的な偶然によって起こったと人々は思う。だが，実際には，それは無から生じたのではない。なぜなら，それには固有の原因があるのだから。ただ，その原因の成り行きが予見も予知もできないため偶然が生じたように見えるのである。もしも畑を耕作するものが土地を掘らなかったならば，そして，金の埋蔵者がその場所に金を隠していなかったならば，その金は発見されることはなかったであろう。それゆえ，これら［発掘と埋蔵］は原因であり，偶発的偶然を削減する。つまり，偶発的偶然の削減は，互いに遭遇し合流する諸原因によって起きるのであり，行為者の意図によるのではない。金を隠したものも畑を掘ったものも金が発見されると分かっていたのではなく，前述のように，前者が金を隠していた場所を後者が掘るということが生じ，しかも［二つの行為が］重なったのである。

こういう次第ですから，今や私は《偶然》を次のように定義します。すなわち，『偶然とは何か別事のためになされた事柄のうちに諸原因が複合することによる意想外な出来事である』と。ただし，諸原因を重ならせ複合させるのは，［万物を］不可避的に結びつけながら進んで行く秩序——摂理の源泉から涌き出て万物を場所的・時間的に規定する秩序——なのです。

1

逃走兵たちが後ろ向きに追跡者の胸に矢を射た
アケメニアの国の荒れた岩場の源から
チグリス川とユーフラテス川は起こり，流れ出る。
ほどなく，チグリスとユーフラテスの両川は分岐し分流する。
ふたたび一緒になり，ひとつの水流に合流し，
同じ名前で呼ばれるや，
まじりあう河水が運んで来たものは一緒に浮流する。
舟も，急流が濯いとった木々も，うち集まる。
河水は，まじりあい，多くの偶然の出来事や行為を包み含みこむ。
しかし，このあてどなき偶然も，
大地の傾斜と［滝・急流など］流水の下りゆく順序に支配されている。
かくのごとく，運命は，
手綱が緩み，支配されぬまま漂っているかに見えるが，
実は，手綱を許していて（つまり，支配されていて），
かの法則（つまり，神の秩序づけ）に従って過ぎゆくのである。」

二

私は言った。「以上のことは私にもよく分かりますし，まさにおっしゃったとおりであると同意します。しかし，お尋ねしたいのは，諸原因がそのように互いに絡みあって成している秩序のうちに自由意志が存在するかどうかということです。それとも，天運の鎖は人間の心的活動をも拘束するのかどうか知りたいのです。」

彼女は言った。「もちろん，自由意志は存在します。それどころか，自由意志を持たない理性的生物はいません。事実，本性的に理性を用いうるものはすべて，あらゆることを見分け，かつ判断する識別力を有していて，避けるべきものと望むべきものとをおのずと察知します。だれもが望ましいと判断する事物を人は求め望み，だれもが避けるべしと信じる事物を人は避けます。したがって，理性が存在するすべてのものには，しようという意志とすまいという意志との自由が存在します。

ただし，私は自由の程度はすべてのものにおいて一律であるとは確言しません（すなわち，認めない）。その訳は——最高の神的物質（つまり，［神の］精神）においては，判断力は冴えわたり，意志は堕落す

ることなく，能力は望むところを実現しうる。これに対し，人間の魂は，神の御心を観想しつつ，つまり，見つめつつ，自己を見つめるときが最も自由であり，肉体に入りこめば不自由になる。さらに，世俗のものごとに繋がれ閉じこめられれば，いっそう不自由になる。しかし，最大の隷属状態は，魂が悪に屈し，本来の理性から転落してしまったときである。なぜなら，至高の真理という光明から卑しく無明のものに眼を転じるやいなや，無知の雲により無明に包まれ，よこしまな欲望に煩わされる。欲望に近づき欲望と心を同じくすれば，自分自身と一体化した隷属状態を助長し増強することになる。こうして，魂は本来の自由から囚われへと堕してしまう——という次第だからです。

しかし，永遠から万物を見わたし，かつ見とおしたまう神の摂理の眼力は，すべてを見とおし，予定のとおり万物をその正否によって定めたまうのです。かくて，ギリシャ語に曰く，『神は万物を見たまい，万物を聞きたまう』と。

2

蜜のごとき口もて（つまり，甘い詩で）ホメロスの歌いて曰く，
太陽は至純なる光にて輝く，と。
しかし，その光芒は弱く，地や海の深奥にまでは射しこまない。
偉大なる宇宙の創造者なる神の眼力はそうではない。
高きより一切を見わたしたまう方には，
地の重さも抗いえず，夜の暗雲も抗いえない。
神は精神の一瞥により，
一切のあるもの，ありしもの，来るべきものを見とおしたまう。
一切を見わたし見とおすのは神のみであるので，
神こそ真の太陽と呼ばれうる。」

三

このとき私は口をはさんだ。「今や私は以前よりももっと厄介な疑問のため困惑しています。」

「どんな疑問ですか。」彼女は言った。「もっとも，私はそなたがどんなことで当惑しているかもう推測してはいますが。」

私は言った。「神が一切を予知することと，少しでも自由意志が存在することとは，まったく矛盾・背反しているように思えます。というのは，神が一切を予見し，しかも，けっして過つことはありえない

のであれば，起きると神の摂理が予見したことはすべて必然的に起きなければなりません。したがって，神が人間の行動のみならず計画や意志をも予知するのであれば，意志の自由はありえません。それゆえ，神の摂理が過たず予感したこと以外の行為や意志はありえないことになります。かりにそれらが予見されていた生起の仕方から逸脱するとすれば，将来のことに関して確実な予知は存在せず，不確かな憶測があるにすぎないということになります。しかし，そのようなことを神に関して考えるのは冒瀆であり許されないことだと思います。

ある人々は彼らの論法によってこのもつれた疑問を解きほぐすことができると思っていますが，私はその論法にも承服しません(すなわち，その論法を認めない，あるいは賛同しない)。彼らの言によれば，ことが起きる以前に神の摂理が予見していたがゆえにそのことが起きるのではなく，むしろその逆である。すなわち，ことは起きるがゆえに，神の摂理から隠しえぬところとなる。それゆえ，必然性は反対側に移される。つまり，『予見されたことは起きる』ということが必然的なのではなく，『起きるべきことは予見される』ということが必然的なのである，とのことです。いわば，どちらがどちらの原因なのか，つまり，予知が必然的に起きることの原因であるのか，それとも必然的に起きることが摂理［の先見］の原因であるのか，を求めることに腐心されています(すなわち，［因果関係の究明に］腐心したり努めたりしているかのように，その解法は提出されている)。しかし，原因[と結果]の順序はどうであれ，私が示そうと努めているのは，たとえ予知は将来の生起に必然性をもたらすとは思えないとしても，予知されたことの生起は必然であるということです。

もしもある人が座っているとすれば，その人が座っていると推断する意見は必然的に真です。そして，逆も同様であり，もしも人が座っているがゆえにその人に関する意見が真ならば，その人が座っていることは必然です。したがって，前者の場合にも後者の場合にも必然性が存します。つまり，前者には座っているという必然性，後者には真であるという必然性です。ただし，座っているという意見が真であるがゆえに人が座っているのではなく，むしろ人が以前から座っているがゆえに，その意見は真なのです。ですから，真であることの原因は後者からは得られない（すなわち，真であることの原因は，意見が正しいからではなく，座っているという事実から得られる）のですが，ともかく前者にも後者にも必然性は存在します。明らかに，神の摂理

と将来のこととに関しても同様な議論が可能です。ことは起きるべきだから先見されるのであり，先見されているから起きるのではないとしても，やはり起きるべきことは神に必然的に先見されるか，あるいは神に予見されたことは必然的に起きるかのいずれかです。ですから，このことだけでも私たちの恣意（つまり，自由意志）を打ち砕くに十分です。それにしても，今や明らかなように，時間的な事柄の生起が永遠なる予知の原因であるという論法は真実からかけはなれ本末転倒しています。そもそも，起きるべきことは起きるべきであるので神はそれらを先見すると考えることと，すでに起きたことが神なる最高摂理［の先見］の原因であると考えることとは，どう異なるでしょうか。

また，次のことも付け加えることが可能です。あるものが存在すると認識されるとき，そのものは必然的に存在する。同様に，あることが生起すると認識されるとき，そのことは必然的に生起する。ゆえに，［生起すると］予め知られていることの生起は不可避であることになる，ということです。

最後に，あることを実際とは違ったふうに誤解するならば，それは不知であるばかりか，間違った意見であり，真の知識から逸脱し乖離しています。ですから，あることは，生起が確実でも必然でもないけれども，起きることになるとすれば，だれがそのことは起きると予知できるでしょう。認識は誤謬に干渉されませんが（すなわち，もしも私があることを認識しているとすれば，私がそれを認識しているということは誤謬ではありえないが)，これと同様に，認識によって理解されていることは理解されていること以外ではありえません。だから，一切は必ず認識がそうであると理解しているとおりであるので，認識には虚偽はありません（すなわち，認識はそれが知っていることの偽物を受けつけない)。

そうとすれば，どういうことが言えるでしょう。もしも，ことが起きるのが不確実であるとすれば，神はどのようにして予知できるのでしょうか。もしも神の判断では『ことは不可避的に起きる』であり，実際には，起きないこともありうるとすれば，神は過っていることになります。しかし，神が過つと思うのみならず，それを口にするのは，罰あたりな冒涜です。もしも神が知っているのは，『起きるべきとおりに，ことは起きる』であり，したがって，神は中立的（すなわち，五分五分）に『ことは実行されることもされないこともある』という

ことを知っている［にすぎない］のであれば，確実不動なものを含んでいない予知とは，一体，何でしょう。そのような予知とあの予言者ティレシアスの笑うべき予言とどれほどの相違があるでしょう。ティレシアス曰く，『私の予言はすべて当たるか当たらぬかのいずれかである』。もしも神の予知では諸事不確実なりと判断されるのであれば，人間の意見と比べてどれほどの価値があるでしょう。人間の判断でも生起は不確実なのですから。

逆に，もしも万物の最も確実な源泉［である神］においては不確実なものは皆無であるならば，起きると神がきっぱり予知したことは確実に生起します。したがって，過つことなく万物を見とおす神の精神が万物を束縛し制約して必然的に生起させるのですから，人間の計画や行動の自由は皆無であるということになります。

このこと（つまり，自由意志は存在しないこと）がいったん認められ受け入れられれば，人間の営みが崩れ瓦解することは明らかです。なぜなら，善人に対する褒賞，および悪人に対する罰は，自発的な心の自由な活動がそれらに（つまり，褒賞にも罰にも）値したのではないので，そういう目的や約束は無駄になってしまうからです。そして，現在最も正しく最善であると判断されていること，つまり，悪人が罰せられ，善人が報われることが，最悪に見えてきます。なぜなら，人々は固有の意志により一方にも他方にも（つまり，善にも悪にも）進んだのではなく，起きるべきことの確実な必然性に拘束された結果そうなったのだからです。そうとすれば，悪徳と美徳は過去にも未来にも存在せず，［褒賞と罰という］あらゆる報いは無差別にかきまぜられる混乱によるのだということになります。さらに，不調和がもうひとつ持ち上がります。しかも，これ以上の冒涜や不善は考えられないほどの不調和です。すなわち，ものごとの秩序は神の摂理に由来し導かれるのであるから，何も人間の計画に許されていることはない（すなわち，人には何も実行したり意図したりする力はない)。したがって，神が私たちを拘束して必然的に悪徳を行わせるのであるから，私たちの悪徳はあらゆる善の創造者に関連づけられることになります(すなわち，神が我々の悪徳の責めを負うべきことになる)。

そうとすれば，神に望みをかけたり神に祈ったりする理由はなくなります。人間の願望しうること一切を織りなし縛りあげているのは変更されえない天運の順序づけなのですから，何を神に願うべきでしょう。そして，何ゆえ神に祈らなければならないでしょう。こうして，

神と人間との唯一の接点（つまり，願いと祈り）は，失われてしまいます。しかし，正義と真の恭順とに対する褒賞として私たちは神の恵みという計り知れない報賞（つまり，あまりにも大きくて称えきれない報賞）に値するようになるはずです。そして，ただそれのみ（つまり，願いと祈り）を手だてとして人間は神と語ることができ，祈りによってのみ，希求しないうちは近づくことすら不可能な光明［つまり，神］に結ばれうるのだと思われます。したがって，［神により］認可されていることは必然的に起きるのだから，望みも祈りも無力であると解するならば，私たちは何によって万物のあの最高君主に結ばれ繋がれうるでしょうか。かくして，少し前に歌われたように，人類がかの源泉から分離して，その始源（つまり，神）から堕落してしまうことは必然となります。

3

どんな不調和な原因が
万物を結ぶ絆（つまり，神と人間との接点）を断ち切ったのか。
いかなる鬼神が
ふたつの正しく真のもの（つまり，神の摂理と自由意志）に
かくも烈しい戦いを起こさせ，
別々に切り離し，
互いに関わりあいも結びつきもなくさせたのであろうか。
だが，実は，真のものには不調和はなく，
いつも相互に繋がりあっている。
ところが，人間の精神は暗い肉体につぶされ損なわれていて，
その薄い視力の火によっては
(つまり，魂が肉体にあるあいだ洞察力により)
森羅万象のかぼそい編み目を察知することはできない。
それにもかかわらず，なぜ精神はかくも熱く愛着をもって
隠された真理の印を見いだそうとするのであろうか。
(つまり，なぜ人間の精神は真理の覆いの下に隠されている暗号を
知ろうと熱望するのか。)
精神は自分が苦労して知ろうと求めているものを
少しなりとも知っているであろうか。
(すなわち，そういうことはない。
だれも既知のことを知ろうとは努めないので，本文は次のように言

う。)
だが，だれが知っていることを知ろうと努めるであろう。
知らないとすれば，精神は何を盲目的に捜しているのであろうか。
まったく知りもしないものなら，だれが求めようとするであろうか。
(すなわち，何かを求める人は，必ず幾分かはそれを知っている。
さもなければ，求めることは初めからありえない。)
知らないことをだれが追求できるであろうか。
たとえ求めたとて，いずくにて見つけるであろうか。
そして，見つけたとて，無知蒙昧であれば，
だれがその形相を認識できるであろうか。
だが，高き精神（つまり，神）を観望するときは
魂は全体も個も（つまり，普遍性も固有性も）ともども認識する。
事実，肉体の雲と闇とに隠されてはいるが，
今でも魂は自分自身をまったく忘れているのではない。
個別性は失っていても，全体は保持しているのだ。
それゆえ，真理を求めるものは中間状態にあり，
すべてを知っているわけでもなく，
すべてを忘れたわけでもない。
彼は保持している全体を想起し，
全体に諮りつつ，
前に見たことのあるものを
(つまり，記憶のうちの大いなる全体を）懸命に思い出す。
かくして，忘れていた部分を
保持している部分に継ぎ足すことが可能となるのである。」

四

　すると彼女は言った。「神の摂理に関するその疑問は古来からのものです。例えば，マルクス・トゥリウスは予言を分類したとき(つまり，予言に関する彼の著書において)，この問題を大いに論じています。そなた自身もそれを広く，深く，長期にわたって探求してきました。しかし，人間たちのだれもそれを確実かつ周到に結論づけ論じつくしたものはいません。この解決が不明で困難である原因は，人間の理性の働きが神的予知の単一性に至りえない（つまり，繋がりえない，あるいは一体化できない）ためです。人間が，どんな方法によるにせよ，神的予知の単一性を考察できるならば（つまり，神が見わたすごとく，

人間がものごとを考察し理解できるならば)，疑問はまったく残らなくなるはずです。私はまずそなたが悩んでいる［従来の］論法を考察してそれに答え，最後に難問の原因・理由を示し，それを論じるよう努めましょう。

そなたに質問しますが，なぜそなたはあの論法がこの疑問を解くのに有効だとも十分だとも思わないのですか。すなわち，その論法もしくは解決法では，予知が原因となってことが起きるのではないと判断され，意志の自由は予知によって妨害されたり阻止されたりはしないと想定されています。というのも，起きるべきことの必然性に関するそなたの議論の唯一の拠りどころは（すなわち，他の方法によらず）予知が前もって察知したことは不生起ではいられない（つまり，生起しなければならない）という理屈だけではありませんか。ところが，そなた自身も少し前に口に出して認めたように，予知は起きるべきことに必然性を付与しないとすれば，どういう原因によって，あるいは何ものによって，自発的なものごとの結末が一定の生起の仕方に縛りつけられるのですか(すなわち，そのような原因はない)。以下に論じることが一層よく理解できるように，予知は存在しないと仮定しましょう。そこで，質問ですが，その場合に関する限りにおいて，自由意志に由来する事柄の生起は必然に束縛されていますか。」

（ボエティウス）「いいえ」と私は言った。

彼女は言った。「今度は反対に，予知は存在すると想定し，それはものごとに必然性を付与するのではないとすれば，私の考えでは，意志の自由はまったく完全であり，独立的であり，拘束を受けることはありません。しかし，そなたは言うでしょう，『たとえ予知が原因となって将来のことが必然的に生起するのではないにせよ，予知はやはり必然的な生起の徴である』と。しかし，その見解では，予知がまったく存在しない場合でも，依然として（あるいは少なくとも）確実に，将来のことの生起や結末は必然づけられていることになります。なぜなら，《徴》はあるものが何如なるものであるかを示し知らせるにすぎず，知らせることを実現するものではないのですから。したがって，予知が必然性の徴であると考えられるためには，生起が必然づけられていないことはいっさい生起しないということをまず示さなければなりません。それとも，必然性は存在しないというのであれば，予知は存在しないもの［つまり，必然性］の徴たりうることは不可能です。ともかく，今や確かなように，この証明が確固たる理由により支持さ

れるためには，徴とか外から取られた議論によるのではなく，妥当にして必然的な根拠によって導出され証明されなければなりません。

ところで，そなたは尋ねるかもしれません，『起きると先見されていることがどうして生起しないことがありうるのか』と。しかし，すでに考察したとおり，起きると摂理が予知していることが起きないはずはありません。ただ，そのようには捉えないで，それらは生起するけれども，生起すべき必然性はそれらのうちに本来的にあるのではない［と捉える］のです。このことは次に述べることから容易に理解されるでしょう。すなわち，私たちは眼の前でなされる多くのことを見ます。例えば，御者が荷車や馬車の速度を上げたり落としたり向きを変えたりするのを見ます。他のすべての労働者についても同様です（すなわち，［彼らの技術を］理解できる)。さて，これらのことは必然性（すなわち，我々の視線のうちに必然性があって，それ）に束縛あるいは強制されて，そのようになされるのでしょうか。」

（ボエティウス） 私は言った。「いいえ。もしもあらゆることが束縛によって（つまり，我々の眼や視力に束縛されて）動かされるのであれば，技術の行使は虚しく徒になってしまうでしょう。」

（哲学） 彼女は言った。「そういう次第ですから，人々が何かを行うとき，人々がそれを行うという必然性はないのです。それは為される以前からそのようになりえたのであり，必然性とは無関係です。ですから，生起することのうちいくつかは，その結末も生起自体も，あらゆる必然性から独立であり無縁です。事実，私が思うに，『人々が今していることは，それらが為される［のが知られる］以前には，生起することになってはいなかった』とはだれも言わないでしょう。それらは予め知られていたとしても，それらの生起は自由なのですから。現在の事態が認識されているからといって人々の行為に必然性をもたらさないのと同様に，将来のことが予知されているからといって生起すべき事柄に必然性をもたらしはしないのです。

しかし，そなたの言い分はこうかもしれません。『必然的な結果と生起とを持たない事柄に関しては，予知が存在するかどうか疑わしい。両者は相入れないように思えるから。』 というのは，そなたの考えでは，もしもある事柄が予見されるならば，必然性が付随する。もしも必然性が存在しないならば，そのことは予知されず，認識力により確実に理解されることもありえない。もしも確実に生起しないものが確実として予見されるならば，それは確固たる認識ではなく，無明の憶

測にすぎない。さらに，ある事柄をそれ自体とは違うふうに判断するのは完璧な認識から逸脱している。このようにそなたは考えていますから。

この謬見の原因は，人間が認識する一切のものはもっぱら認知・認識される側の力量および本性によってのみ認識されるという思いちがいにあります。実際はまったく逆であって，認識される側のものすべてが把握され，かつ認識されるのは，そのものの把握力や本性によるのではなく，認識する側の能力（つまり，知力と本性）によるのです。簡単な例で示しましょう。［例えば］丸い物体を認識するのに，視覚と触覚とでは認識の仕方が異なります。視覚は，それ自体は移動せず，遠くから視線を投げかけることによりその物体全体を同時に見まわして認めます。これに対し，触覚はその球体によりそい密着し，その周りを撫でまわして部分ごとにその丸さを把握します。人間自身も，感覚，想像力，理性，および叡知により，それぞれ異なる捉え方をします。感覚は人体の形状を，質料的物質から成るものとして，外観から把握する。想像力は質料のない形状のみを理解する。理性は想像力を凌ぎ，普遍的考察によって個に共通な種を把握する。だが，叡知の眼はもっと高い。それは普遍性の境界を超え，精神の純正な識別によって，人間の単一的形相を直観する。これは神的精神に恒常的にあるものです。

ここにおいて大いに考慮すべきなのは，最上位の把握力は下位の把握力をとりこみ包含しているが，下位の把握力はけっして上位の把握力に上ることはできないということです。感覚は物質のほかは把握できず，想像力は普遍的な種を見ることはなく，理性は，叡知が捕らえる単一的形相を捕らえることはできません。しかし，叡知は，いわば，高所からすべてを見て，形相を把握するに際して，その形相のもとのあらゆる事物を認識し判別します。しかも，叡知があらゆる事物を認識する方法は単一的形相を把握するのと同じ方法なのですが，他のどれも（つまり，精神の前述の三つの能力のどれも）単一的形相を認識することはできません。つまり，叡知は理性による普遍性も，想像力による形状も，感覚により知覚可能な物質をも認識するけれども，外部からの理性も想像力も感覚も用いてはいません。それでいて，叡知は，いわば，精神の一瞥により（推論も比較もすることなく）一切を形相的に看破します。理性も普遍的なものを見ぬくとき，想像力も感覚も用いない。それでいて，理性は想像的・感覚的なものも把握しま

す。その証拠に，理性が念頭においている普遍性は，『人間は二本足の理性的動物である』と定義されるのですから。この認識は普遍的ですが，だれでも知っているように，人間は想像的・感覚的でもあります。このことは理性もよく考慮していますが，理性は想像力や感覚によらず，理性による概念形成によって見ぬきます。また，想像力も，形状を認め形成するきっかけは感覚から得るにせよ，感覚が存在しなくても，一切の感覚的なものを把握し理解します。これは，感覚的知覚ではなく，想像的知覚の判断によるからです。

　かくして，そなたにも分かったように，あらゆるものは認識するさい，認識される側の能力・力量よりも，むしろ自己の能力・力量を用いるのです。これは無理からぬことです。というのも，あらゆる判断は推断する側の活動もしくは行為であるので各人は，外部の能力によらず，自分本来の能力によって，役目や意図を果たさなければならないのですから。

4

学堂（つまり，哲学者たちが集まって議論した，
アテナイの街にあった柱廊）は
かつて論旨低劣な古老を
（つまり，ストア派と称される哲学者を）生み出した。
彼らの考えでは，
像的感覚（つまり，感覚的映像，もしくは感覚可能な事物の映像）は
外部の物体から精神に刻印される。
(すなわち，ストア派の考えでは，
精神は空洞状態であり，いわば，鏡か白紙のようなものである。
それゆえ，あらゆる形状は，まず外部の事物から精神に入りこんで
精神に刻みこまれなければならない。)
（本文）　ちょうど尖筆を速やかに動かして，
何も書かれていない，滑らかな蝋板やまっ白な羊皮紙に
刻むべき文字を記すときのようである。
（注釈　しかし，ボエティウスはこの見解に反論し，次のように言う。）
だが，もしも活動的な精神がその本来の活動によっては
何も開拓せず（つまり，何もせず),
ひたすら外部の物体の形状や印を受け入れ影響され，
鏡のように虚ろで空しい像を映すだけであるならば，

どこから精神の認識力は活力を得，また，どこからやって来て，
万物を識別し見分けるのか。
どこから個々の事物を見分ける力は来るのか。
どこから認識した事物を区別する力と，
区別した事物を綜合する力とは来るのか。
そして，混乱から道を選ぶ力は？
現に，精神はときにはいと高きにまで頭をもたげ
(つまり，理解を高め)，
ときにはいと低きにまで降り，
そして，自分に戻って，
真実により虚偽を論破し粉砕する。
この力は物質に刻まれる印や形状を
受け入れ取り入れる原因である以上に，
事物を察知し認識する，有効にして強力な原因である。
だが，生身においては知覚（つまり，感受もしくは感覚）が先に働いて，
精神の力を刺激し動かす。
ちょうど光が目に射しこんで物を見せるときのように，
そして，声や音が耳を打って振動させて聞かせるときのように。
精神の力は動かされ刺激されれば，
類似の活動に応え，自己のうちに備わっている種を喚起する。
そして，これらの種を外部の印や事物に重ね合わせ，
外部のものの像を自己のうちに隠されている形相と融合させる。

五

ところで，もしも物体が知覚されるさいに（つまり，物質的なものを認識するさいに）——たとえ外部から与えられる物体の性質が［身体に］入りこんで感覚器官を刺激し，身体の知覚（つまり，感覚もしくは感受）が能動的精神の[認識]力に先行するのであっても，そして知覚もしくは感受が精神の活動を呼び起こし，その過程において，精神の内部に眠っている諸形相を活動させ喚起させるのであっても——，もしも物体の知覚において，前述のように，精神は感覚に教えられたり刻印されたりしてこれらの事物を認識するのではなく，その固有の力によって身体に受けた知覚や感受を判断し認識するのであるならば，肉体的感情や欲情からは独立的であり無縁なもの（例えば，神や

天使）は，識別にさいし，外部から与えられた事物に影響されることなく，自らの精神活動をまっとうさせることになります。

だから，このため，さまざまな実体ごとにいろんな認識の仕方があることになります。身体的感覚は，自分ではあちこち移動することができない生物——例えば，牡蛎や紫貝，および海にいる他の貝など岩に付着して生きているもの——に存しますが，そのほかの［上位の］認識法を兼ね備えてはいません。他方，想像力は移動可能な動物に存し，彼らは避けたり望んだりする願望を有していると思われます。これに対し，理性はただ人間にのみ存し，同様に，叡知はただ神的性質にのみ存します。このように，理性はそれ固有の本性によって，自分の対象物を認識するだけでなく（すなわち，もともと理性の認識法に属するものを認識するだけでなく），他のすべての認識法の対象物をも認識するので，理性による認識法は他のものよりも価値が高いことになります。

ところで，もしも感覚と想像力とが理性に論駁し，『理性が見ると思っている普遍的なものは虚妄だ』と言ったならば，どうでしょうか。感覚と想像力との言い分はこうです。『感覚可能もしくは想像可能なものは普遍的ではありえない。ゆえに，次の二つに一つである。理性の判断が正しく，感覚的な物は存在しない。さもなければ，理性もよく知っているとおり，多くのものが感覚と想像力に帰属するのだから，理性は感覚可能で個別的なものを普遍的と認め，そう把握するけれども，その概念形成は虚偽にして虚構である。』 さて，もしも理性がこれら二者（つまり，感覚と想像力）に答えて，『自分（つまり，理性）は，普遍的な理性により，感覚可能なものも想像可能なものも正しく認め把握する。しかるに，これら二者（つまり，感覚と想像力）は，物的な形状を超えたり凌駕したりすることはありえない。ゆえに，これらは普遍性の認識にまで伸展し向上することはできない』と言うならば，人間としては，事物の認識に関して，より完璧でより確固たる判断のほうに信を置くべきです。ですから，このような論争において，私たちには推論，想像，知覚という能力（つまり，理性，想像力および感覚による［認識法］）が備わっているので，私たちはむしろ理性の言い分に（すなわち，感覚と想像力の言い分よりも）くみすべきです。

人間の理性も似たようなものであり，神の叡知が将来のことを見とおし認識する仕方は，人間の理性が認識するのと同じ仕方であるにすぎないと誤認しています。事実，そなたは次のように論じて言います。

『あることが確実にして，かつ必然的な生起を有すると人間に思えるのでなければ，それらが生起すると確実に予知することは不可能である。ゆえに，それらには予知は存在しない。もしもそのようなものにも予知が存在すると考えるのならば，生起が必然でないものは何もない。』しかし，もしも私たちが理性を享有しているように，神的精神の判断力をも持ちうるならば，想像力と感覚とは理性より下位にあってしかるべきであると判断したのと同様に，人間の理性は神的精神に従属し，それより下位にあって当然であると判断することでしょう。ですから，もしも可能ならば（すなわち，可能ならば，私は次のように助言する）最高の叡知の高みにまで昇るべきなのです。そこで理性は自分では見わたしえないことをはっきりと理解するでしょう。すなわち，いかにして神の予知は，［理性にとっては］確実な結果や生起が存在しないものであっても，確実・確定の事柄をことごとく見るかを，そして，これは憶測ではなく，どんな領域でも閉ざされも閉め出されもしない，単一的な最高の智見であることを［理解するでしょう］。

5

生物は実にさまざまな姿で地上を動きまわる。
あるものは長々しい体をして，埃のなかを這い，
そのあとに長く延びた跡やすじを残し（つまり，蛇・くちなわの類い），
ある生きものは天翔る軽い翼で風を打ち，
滑らかに飛翔して高き大空を漂う。
ある生きものは歩行により，つまり，四足で，
地上に痕跡や足あとを刻み，
緑の野を行き，あるいは森の下陰を歩くのをよろこぶ。
これらは見たところ，さまざまな形をして互いに相異しているとはいえ，
彼らの顔はうつむいていて，
そのため感覚は鈍重となる。
ひとり人類のみが高等な頭を高くもたげ，
直立の体をしてすっくと立ち，
大地を己が下に見おろす。
地上の人間よ，
知性を失って卑しくなることさえなければ，
その姿はまことの顔にて天を求め，

額を上向けて心を高く持ち上げようとする。
その姿は汝にこう警告しているのだ。
汝の体がかくも高く上へと伸びているからには，
汝の精神の鈍ることのないように，
そして，足元に低く降りることのないように，と。

六

こういう次第で，少し前に示したとおり，認識されるものは，それに固有な本性によってではなく，それを把握する側の本性によって認識されるのですから，今から神的実体とはどのような状態のものであるかを可能なかぎり考察しましょう（すなわち，できるかぎり考えてみよう)。そうすれば，その智見がどんなものであるかも理解できます。あらゆる理性的生物の判断では例外なく『神は永遠なり』ですから，永遠とは何かから考察しましょう。そうすれば，神的本性と神的智見も併せて明らかにすることになりますので。

さて，永遠とはとこしえの生命を完璧かつ同時的に所有することを言います。それは時間的事物との比較対照によって一層はっきり示されます。すなわち，時間のうちに生きるものはすべて，現在のうちにあり，過去から未来へと（つまり，過ぎ去った時間から来るべき時間へと）進むのであるから，時間のうちにはその生命の全期間を同時的に包括しうるものは存在しない。事実，それは明日という時間はまだ受け取っておらず，昨日という時間は失っている。そなたたちは，もはや今日の生命のうちに生きているのではなく，過ぎ去りゆく，たまゆらのこの一瞬のうちに生きているにすぎない。したがって，時間的制約を受けるものは，たとえ，アリストテレスが宇宙に関して想定したように，始まりがなく，終わりもなく，そして，その生命は時間的に無限に拡がっているとしても，それを永遠とみなすのは正当ではない。なぜなら，それは無限の生命の全期間を把握し包括するとしても，それは未来（まだそうなっていないこと）を含まず，過去（過ぎ去ったこと）をもはや含んではいない。それゆえ，それは生命の全期間をまったく同時的に包括していることにはならないからである。これに対し，とこしえの生命の全体を同時に把握するものは，未来が欠けることもなく，過去が逃げ去ることもないので，それこそ永遠であると正当に実証・論証される。したがって，必然的に，永遠はそれ自身にとっては常に現在であり，かつ全能であり（すなわち，永遠はそれ自

身の立場からすれば常に現在であり，しかも，すべて思いどおり［見とお］しうる），過ぎゆく時間の無限性を現在として所有することになります。

したがって，幾人かの人々はプラトンの所見——宇宙には時間の始まりはなかったし，終わりもないであろう——を聞いて，宇宙はその創造者とともに永遠なるものとして造られたと思いますが，彼らの考えは間違いなのです。（すなわち，彼らは宇宙と神とはともに永遠に創造されたと思っているが，それは思いちがいである。）なぜなら，プラトンが宇宙に関して認めた，とこしえの生命によって導かれることと，とこしえの生命を現在のものとして同時的に包括すること——これは，明らかに，神的精神に固有である——とは別ものなのですから。そして，神が被造物よりも以前から存在するのは，時間的な量のゆえではなく，むしろ単一的本性という特徴のゆえであると思われます。そもそも，この時間的事物の［行う］無限の運動は，不動の生命の現在的状態を模倣したものです。ところが，前者は，後者の偽装も扮装も，それどころか真似すらできず，不動性（つまり，神の永遠性のうちに内在する）から衰えて運動へと陥り，神的現在性という単一性から未来と過去という無限の量へと減少するのです。

無限の運動は生命全体をすべて同時に把握することはできないにもかかわらず，ともかく存在しつづけることをやめない。そのため，それは達することも果たすこともできないもの［つまり，永遠］を模倣し類似しているように見える，さらに，それはある種の現在——刹那的･瞬時的な瞬間——に結びついているようにも見える。なぜなら，その刹那的・瞬時的瞬間は，神の恒久的な現在性の外観・様子を帯びているため，生起するものに過去から現在［という時間］があるかのように見せるからである。しかし，そのような刹那的瞬間は恒久的ではありえないので，無限の時間（つまり，連続による）という道をとることになる。かくして，それ［無限の円環運動］が行われる。それは運行によって生命を持続しているけれども，その生命は恒久性の全体を包括することはできない。かくして，ものごとに適切な名称を付けようと思うならば，プラトンに従って，神はまさしく《永遠》であり，宇宙は《存続》であると言うことにしましょう。

さて，あらゆる判断は自分自身に備わっている本性によって認識し把握するのだから，そして，神にとっては常に永遠の現在という状態であるのだから，神はすべての時間的運動を超越する。神の智見は現

在という単一性のなかにあって，過去から未来にわたる無限の全期間を包括して考察し，その単一の認識において過去のこともまるで今現在なされているかのように見とおす。したがって，一切を認識する予知を思索し考察しようと思うのであれば，それを将来のことの予知としてではなく，正しくは現在，つまり，けっして過ぎ去らない瞬間，に関する智見とみなすべきなのです。ですから，それは《予見》とは呼ばれず，むしろ《見とおし》［＝摂理］と呼ばれるべきなのです。それは，下界の万象から遥かかなたに厳然とあり，いわば最頂点から，万物を遥かに見わたすのですから。

こういう次第なのに，なぜそなたは，神の視野において目撃され認識されることは必然的に実現されねばならないと要求したり論じたりするのですか。人間でさえ，彼らの目前で何かが行われるのを見るとき，それを必然とはしないのに。それとも，そなたが見ているために，現在見ているものに必然性が加えられるのですか。」

「いいえ」と私は言った。

（哲学）「したがって，神的現在と人間的現在とを適正に比較対照するならば，人間たちは時間的現在において若干のものを見る。他方，神は永遠の現在において万物を見たまう，ということなのです。

それゆえ，神的予見は，人間にとっては将来の時間に生起することを現在として見とおし，しかも，事物の本性や特質を変えることはありません。さらに，それは判断を混同することなく，彼の精神の慧眼によって，将来の必然も非必然も認識します。そなたたちは人が地上を歩くのと，太陽が天に昇るのを同時に見れば，たとえ両者を同一時刻に見るにせよ，前者は自発的であり，後者は必然的であると判断し識別しますが，これと同様に，己が下の万物を見とおす神の眼力は，万物——彼にとっては確実に現在であるが，時間的条件としては未来である——の特徴を変じることはありません。このことは，次の事実により強化され，憶測ではなく，確固とした知識となります。すなわち，神は，どんなものであれ生じると認識するとき，そのものは生ずべき必然性を欠くことを認識しているという事実です。（つまり，何かが生起すると神が認識するとき，それには生起すべき必然性はないということを神はよく知っているのである。）

ここで，そなたの言い分が次のようであるならば，すなわち，『生起すると神が見抜くものは，不生起ではありえない(すなわち，生起しなければならない)。 不生起でありえないものは，必然的に生起せ

ざるをえない。』 こう言って，必然という呼称に私を縛りつけようとするのであるならば，私は確たる真実であることをはっきり披瀝しましょう。もっとも，これを理解でき，これに到達しうるのは，神的精神の理解者だけでしょうが。というのも，私の答えは次のとおりだからです。未来の事柄は，神的認識に関連づけられれば，必然である。しかし，それ本来の性質において理解するならば，それはあらゆる必然から完全に自由であり独立的であると見られる。なぜなら，必然性には二通りあるからである。すなわち，ひとつの必然性は単一的である。例えば，すべての人間が死滅するのは必然的であるというごとき場合である。今ひとつの必然性は条件的である。例えば，だれかが歩行しているのを認識すれば，彼が歩行しているのは必然的であるというごとき場合である。人間がそうであると認識したことは，その認識以外にはありえないからである。ところで，条件的必然性が単一的必然性をもたらすことはない。なぜなら，条件的必然性は事物に固有の本性によって生じるのではなく，条件が加わることによって生じるからである。そもそも，人が歩いている［のが認識される］とき彼が歩いていることは必然であるにせよ，その人は彼自身の自由意志で歩くのであって，必然が彼を強制して歩かしめるのではない。

さて，以上と同様に，神の摂理が現在のものを見るならば，たとえ固有の本性という必然性は備わっていなくても，そのものは必然的にそう［神の見るとおり］でなければならない。ところで，神は，自由な意志によって生起する一切を現在として見る。それゆえ，これらは，神の慧眼と関連づけられれば，神の知るところであるという条件のため必然とされる。しかし，これら自体において考察されれば，これらは必然から独立的であり，それ固有の本性の自在さを放棄しているわけでも絶っているわけでもない。したがって，確かに，起きると神の予知したまうことすべてが実現されるのは疑う余地がないにしても，そのうちのいくつかは自由な恣意つまり自由意志から生起・出来するものである。それらは，たとえ生起するにせよ，生起にさいして固有の本性を失うことはない。なぜなら，それらは，実現される以前には，それ固有の本性により，生起しないことも可能だったのですから。」

（ボエティウス） 私は言った。「では，固有の本性［によらないという理由］のゆえに必然ではないと論じることにはどんな意味があるのですか。というのは，そういうことは神の智見するところであるという条件のゆえに必然そっくりの様子で生起するのですから。」

（哲学） 彼女は言った。「両者の相違は次のとおりです。私が少し前に提示したこと――つまり，上昇中の太陽と歩行中の人間――において，これらが生起するとき，同時に不生起であることは不可能ですが，前者は生起する以前から，生起が必然であったのに対し，後者はそうではありません。これと同様に，神が現在として捉えているものは，疑いなく，発生することになりますが，そのうちのあるものは事物の本性から発するのであり（例えば，上昇中の太陽），あるものは行為者の能力から発するのです（例えば，歩行中の人間）。ですから，次のように言っても間違いではありません。これらは，神的認識に関連づけられれば，必然であり，それ自体として考察されれば，必然の束縛から独立的であるのです。ちょうど感覚にとらえられるすべてのものが，理性に関連づければ，普遍的であり，それ自体として見るか，それ自体に注目するかすれば，個別的であるのと同様です。

ところで，今そなたの言い分はこうでしょう。『私に目的を変更する力があるとすれば，神の予知していることをはからずも変更するとき，私は神の摂理を無効にすることになる。』これに対し，私は次のように答えましょう，『確かに，目的を変更することは可能である。しかし，神の摂理の［見とおす］現在的真理は，そなたが目的を変更しうることも，変更するか否かも，どのように変えるかも見とおす。それゆえ，神の予知から逃れることは不可能である。ちょうど，そなたが自由意志により予定変更してさまざまな行動をとっても，いま見ている人の視野から逃げることができないのと同様である』と。

しかし，そなたは反論するかもしれません。『では，このことはどうか。私が今はこれを，今はあれをしようと思うたびに，私の意向しだいで神の智見は変更されることになりはしないか。そのため，予知は認識内容を刻一刻取り替えると思えるのではないか。』」（すなわち，神の予知はあるときはあることを，あるときはその逆を認識するので，認識内容を刻一刻さまざまに取り替えると思われないか。）

彼女は言った。「そういうことは絶無です。なぜなら，神の慧眼は先まわりして未来のあらゆることを見抜き，それらを神固有の認識である現在へと呼びもどし連れかえすのであり，そなたの誤解のように，今はこれに，今はあれにというふうに予知を刻一刻取り替えることはありません。彼は常に不動であり，そなたの方針変更に先まわりし，瞬時にそれを包みこみます。

この万物を把握し見抜く現在性を，神は，将来生起すべきことから

ではなく，彼本来の単一性から得ています。このことにより，そなたが少し前に述べたこと，すなわち，我々の将来［の行動］が神の智見の原因をなすと論ずることは無益であるという抗議も解消されます。なぜなら，神の智見の力は現在的認識により一切を包括し，万物の［本来的］あり方を設定しはするが，以後の事柄に影響されることはないからです。

かくのごとき次第なので(つまり，神の予知に必然性が内在しているというわけではないのであるから)，意志の自由は存在し，人間にとって一点の瑕疵なく完全に存在しています。あらゆる必然から解放され自由である人間の意志に対して，かの掟が褒賞と処罰とを課しているのは悪意からではありません。神，すなわち，一切を見わたし予知したまう方は，高所にいまして，彼の見る永遠の現在は私たちの行動の多様な特徴と常に一致するのであり，善人には褒賞を，悪人には懲罰をあてがい規定するのです。神にかけられる望みや祈りは無益でも無駄でもなく，正しいものであれば，かなえられないはずがなく，無効でもありえないのです。

ですから，悪徳を拒み遠ざけ，徳を崇め愛しなさい。心を正しい希望に高め，敬謙な祈りを天にささげなさい。そなたたちが行い振る舞っているのは（つまり，行動と言動は）一切を見抜き審判したまう裁き主の眼前なのですから，自らを偽らぬかぎり，そなたたちには有徳と美徳という偉大なる必然が課せられ命ぜられているのです。」

ボエティウスの書終わる。